
深海からの侵略

elebras

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海からの侵略

【Nコード】

N6428V

【作者名】

elebras

【あらすじ】

多目的海洋調査観測船「みこもと」は自律AI搭載型海洋調査ロボット「DORII」(Deep Ocean Research Independent Intergrance)の試験航海に出発した。その頃米海軍は試作新型原子力潜水艦が試験航海の途上消息を絶ち、「みこもと」の所属する独立行政機構「海洋調査機構」に搜索の協力を依頼していた。急遽、予定を変更して搜索に赴いた「みこもと」とその搭載する深海調査艇たちが出会ったものとは？そして、それによる全海洋の危機に「海洋調査機構」のメンバーが

立ち向かう。

邂逅

生物

その生き物はこれまで見た事もない大きさだった。ほとんど透明に近いその体長はゆうに五〇mを超えていた。体側の繊毛（このサイズでもそう呼んで良ければだが・・）をせわしく動かしながら、ゆったりという表現しかできない動きで海中を漂っていた。

「こいつですか、昨日の幽霊の正体は。しかし、なんでこんな大きなもの、これまで発見されなかったんです？」聞いたのは装備担当の津田だった。

「生息域が深い、生息分布、いろいろ理由はあるでしょうが、やはりまだ海は人間にとつて『広い』ということなんでしょうね。」と海洋学研究員の望月が答えた。しかし、当の望月とて正しい答えを知っているわけでは無かった。

「艇を少し振るぞ。このままでは視野が狭いし、ちょっと近付き過ぎだ。」艇長の野瀬はそう言つと、艇を生物の側面方向に移すべく、マニユバーを開始した。

彼等が搭乗しているのは、高機動潜水調査艇「みずなぎ」一号艇だった。この艇は主に大陸棚付近の水深で、機動性の高い、言い換えれば海洋生物を追跡調査可能な潜水調査艇として、特別行政法人「海洋調査機構」が独自に開発したものであった。その主な要目は、

全長 9 m

全幅 4 m

全高 1.8 m

船質 カーボンファイバー/ケブラー/ボロン複合積層強化樹脂

動力装置 低損失コアレス水中電動機 二基 合計 15 kW

発電装置 リチウム触媒燃料改質型燃料電池集積体 33 kW/時

推進装置 キャビテーション・ダクト型ウォータージェット 全周

回転方式

安全潜入深度	900 m
最大潜入深度	1350 m
最大水中速度	12.5 ノット
航続距離	70 海里
搭乗人員	3 名

というものであった。これ以外に、その都度の観測、調査内容に応じて、パッケージ化された観測装置を収容するベイを耐圧殻外部に備えていた。これにより、小型の艇にも関わらず、非常に汎用性の高い艇となっていた。しかし、この艇の特徴は別のところにあった。それは両舷にそれぞれ2枚づつ配置された水中翼の存在だった。浮上、沈降のエネルギーをこの翼により前進、後退のエネルギーに変換することで、ほとんど無動力で進む事ができる装置、1990年代に米国ウツズホール海洋研究所で実験された装置をよりリファインした形で搭載していた。船体サイズから言えば「長大」と評しても良い、70海里もの航続距離は、この装置によって達成されていた。

「おい、長野君、まだ『みずなぎ』とはリンク繋がらないの？実験では巧くいったはずでしょう。」と調査主任の吉村は電子装置担当の長野を急かした。

多目的海洋調査観測船「みこもと」の遠隔観測機器室で、吉村はすでに2時間近く、「みずなぎ」からの海中データリンクが繋がるのを待っていた。

多目的海洋調査観測船「みこもと」は「みずなぎ」と同じく、特殊行政法人「海洋調査機構」が文部科学省の予算で建造した船だった。深海調査母船機能と広範囲な海洋観測機能を高いレベルで統合した結果、波浪貫通型双胴船形という特殊な船形と、船体の大型化を招き、予算の確保には多大な労力が費やされたが、その労力は無駄ではなかった。

全長	14.8 m
全幅	3.4 m
基準排水量	8750 総トン
喫水（軽荷）	5.4 m
動力機関	低損失直流コアレス水中電動機 4基
20 kW	軸出力合計 84
推進装置	全周回転型2重反転コルトノズル推進装置 2基
発電装置	高効率定回転ディーゼル発電機 4基
W/h	合計 8800 k
同	リチウム触媒型燃料電池集合体 2基
W/h	合計 2400 k
航海速度	18ノット
最大速度	27ノット
航続能力	18ノットで最大9600海里
搭載観測装置	
一万m級深海潜水調査艇「かいえん」	1基
高機動多用途潜水調査艇「みずなぎ」	2基
自律行動型深海調査ロボット「ドリー（DORIE）」	1基
曳航式可変深度音響通信／観測集合体「金魚」	2基
ODON社高精度サイドスキャンソナー	2基
統合型ネットワーク制御装置	1式

などが主な要目であったが、それ以外にも双胴船形を利用した船尾ベイの採用と、それにより門型揚収装置に代わって採用された、ガントリー式揚収装置など、多くの進んだ補助装置が採用されたことにより、この船の稼働可能範囲は非常に幅の広いものになっていた。

「あ、吉村さん。何か途中で海水の不連続があつて、すごいマルチパスが起きてるんです。今、可変深度用の『金魚』をだしてもらっ

てますから、もうすぐ繋がると思います。ちょっと辛抱願います。」
と長野はキーボードからのコマンド入力の手を休めずに答えた。

「んー、金魚以前に繋がりそうです。あー、吉村さん、それいじつてもだめですよ、やたらにいじらんで下さい。その左舷側の小さいモニターに字が出ます。キーボードはその下です。」

「お、オンラインになった。長野君これ、向こうはログインしてるの？」

「いえ、向こうの信号は歪みが大きくて、こちらから、ポーリングで強制的に向こうを制御してます。文字だけならなんとかいけます。そのまま打ち込んでもらえば向こうのモニターに現われますから。」
「うー、了解。それじゃ『モチヅキ、コタエロ』っと・・・」

艇首部分のほとんど全てを占める半球型の透明な観測／操縦キャabinは、潜水中の常で照明が落とされていたが、今は観測のための強力な外部フラッドライトからの散乱光ではの明るくなっていた。それでも、最前部、一段下がった観測員席のモニターに浮かび上がった文字は明るすぎるほどだった。

「艇長、リンクが繋がったみたいですね。吉村さんからの呼び出しです。『コチラ モチヅキ』っと。」

「ナニカ ミツカッタカ？」

「ミツケタ。」

「ナニヲ？」

「オオキナ イキモノ」

「ナンダソレハ？クジラカ？」

「コレデハセツメイフノウ。ベツノハウハウヲカンガエル。タイキネガウ」

「リヨウカイ」

発見（前書き）

第二話です。

更新は不定期になる事をお断りしておきます。

発見

「津田君、この深度でも無線ブイは上げられる？」

「現在深度370mですから、いけます。水深450mまでは上げられますから。」

「艇長、どうも水中リンクが巧く繋がらないようなんで、無線ブイを上げようと思います。艇の機動が制限されますんであまり使いたくはないんですが、他に方法がありませんので。」

「状況的にそれしか手がなさそうだね。さいぜんの機動で生物との位置関係は安定したから、ここしばらくは問題無いと思う。」

「それじゃ上げます。津田君、衛星回線メイン、一部ロングレンジUWBのセッティングで上げて貰えますか。」

「了解。上げるのは良いですが、回収はどうします。多分、この深さだと相当時間が掛かると思っんですけど・・・」

「津田、回収はせんよ。切り離して上に探させよう。ビーコンセツトしておいてくれ。」

機動性の喪失時間を考えれば野瀬のアイディアは妥当だった。

「そういう事なら了解です。それでは、2Mbpsの衛星メイン、400MbpsのLRUWBをバックチャンネル、ビーコンは一応VHFと衛星両方をセツトしておきます。どちらもGPS位置情報を10秒間隔で送信。この設定で上げます。」

「うん、やってくれ。」

津田はキャビン最後部の操作員席コンソールからブイにデーターを打ち込み、シミュレーターで機能を確認すると、即座にブイをリリースした。直径25cmに満たないブイはケブラー繊維で強化されたシリコンゴム被覆に覆われた光ファイバーケーブルを引きながら上昇していった。

「吉村さん、『みずなぎ』から、衛星で入ります。今ネゴシエーシ

ヨン中。大スクリーンに出します。おっと、UWBにも来てるぞ。バックチャンネルで何か送るつもりだな。」長野はサーバーモニターから目を離さずに言った。

「お、絵がでた。なんだ望月の顔だけか。見たくもねえなあ。」

「吉村さん、それ全部『みずなぎ』で聞こえてますよ。」長野は笑いをかみ殺しながら注意した。

「へいへい、聞こえてます。そっちも吉村さんの顔しかみえないですよ。」

「ん、まあ、そのだな、それはそれとしてだな、どんなもん見つけたんだ。」

「えーえー、それはそれとしてですね・・・まず、UWBも繋がってるみたいですから、バックチャンネルでこれまでの映像を送ります。この回線ではリアルタイム映像だけを送るつもりです。長野君はそこにいるんですよ、リアルタイム映像は高解像度モードじゃ送れないんで、バックチャンネルに復元データを乗せます。録画映像は、そのまま高解像度モードで送ります。デコードの準備よろしくそれから、吉村さん多分、海棲生物の村木君と生態学のチャンネルも一緒に見た方が良いと思います。」

「ああ、二人とももう来てる。ちよつと顔だして見て。」

画面に斜めに二人の顔が現れて消えた。

「望月さん、データ・デコード全部OKです。テンポラリーの容量ははテラバイトオーダーですから、解像度最高で送って大丈夫ですよ。」

「判った。それじゃこれから艇外のカメラに切り替える。距離は約50m、比較対象としてカメラの視野に水色板を入れる。距離は1m。それでは切り替えます。」

カメラが外部に切り替わった当初はスケールの認識ができない事で、あまり驚きは無かった。しかし、頭がそのスケールを理解し始めると、すでに一杯になっていた観測室のそこから驚きの声が上がった。

「大きいですね。オビクラゲの類のように見えますが、良く見ると体節らしきものが見えます。旋毛虫類かゴカイの仲間かも知れませんが、なにせここまで透明に近いのは初めてですねえ・・・」海棲生物の村木がまだスケールを理解できていない口調で言った。

「村木サン、それどころじゃないよ。このイキモノ、生態学的には悪夢です。一体どんなエネルギーで生きてる。簡単な計算すれば判るけど、体長50m超えてるのは確かだから、単純な食物からの炭素？酸素反応じゃ相当な量を食べないと体維持できないですよ。じや食べ物は何ニ？そんなたくさん、栄養価の高い食べ物なかなか無いよ。」

在日7年目の台湾人であるチャンの日本語は流暢だった。

このチャンの疑問に答えるかのように、「みずなぎ」の望月が割り込んで来た。

「実はチャンさん、この生物、動作だけでなく、他のエネルギー消費もしてるんです。ひよっとしたら、それが答えになるかも知れません。これから、それをお見せしますよ。」

そう言うと、艇外のフラッドライトを全て消灯した。艇外カメラの露光調整が光量変化に追従できず、一瞬スクリーンが真っ暗になり、徐々に何かを映し出し始めた。

それは、この世のものとは思えない光景だった。カメラの露光調整が正常になるにつれ、観測室の大スクリーンに現れたのは、まさにそう言う光景だった。

明滅し、乱舞する光のページェント。走り、止まり、そして一瞬の爆発。その体のゆったりとした動きからは想像もできない、美しく活動的な光の乱舞だった。これには観測室に詰めた全ての要員が目を釘付けにされた。そして、自分の頭の中でそれを実スケールに変換できた人間は、大きなショックをも受けた。

「こりゃ、またその、何というか・・・」

意味をなさない言葉を最初に発したのは吉村だった。

「これは化学反応での発光じゃないです。化学反応ではこんな速度じゃ伝搬できない。Eしだと考える以外に無い。エレクトロルミネセンスを自然界の生物ができる・・・いや、もっと小さなスケールなら、発電能力を持つ魚類で可能かも知れないが、このスケールでは・・・望月さん、生体サンプル無理ですかねえ。」村木が興奮気味に聞いた。

「生体サンプルですか・・・艇長、近づけますかね、そこまで。」

「あんまりぞつとしないな。軟体動物だとは思うが、サイズを考えれば、その質量だけでもこの艇をぶつ飛ばせる。」

「艇長、こちら村木です。確か、海水物理計測用の青緑レーザーパツクを積んでましたよね。それで生物の体の一部を照射したらどうでしょう。レーザーメスの要領で一部を切り取れませんかねえ。」

「散乱が大きいから、レーザーメスの様には行かないと思うが、それなら10m程度の距離まで近づけば、小さな部分は熱膨張で剥離するかも知れんな。ただ、加熱されたサンプルになるかも知れんが良いのか。」

「無いよりましです。ごく局部的に照射できれば、加熱が進まないうち剥離が起きるかも知れませんか。」

「判った、ブイ切り離した後、機動できるようになったら試してみよう。津田、準備しておいてくれ。」

「あー、吉村です。それでは艇長、くれぐれも慎重に。ま、野瀬さんの事だから心配はしないけれど。本船研究員は画像データ転送終了次第、それぞれ分析にかかってくれ。ただし、今回のミッションは生物学的調査じゃないから、そのつもりで。分析はミッション目的との関連が第一だ。」

画像転送は20分ほどで終了した。残る調査項目は打ち切って生体サンプル収集と、付近の海水物性だけを行って帰還することなどを打ち合わせた後、LANブイを切り離し、自由な機動性を取り戻した「みずなぎ」は、370mの海中をゆっくりとその生物に接近

するマニユールを開始した。

調査（前書き）

第三話です。

調査

「35mです、艇長。」津田は音響測深儀の数値を操縦に専念する野瀬に代わって読み上げた。接近は音響測深儀のトランスジューサー設置位置の関係で上方からしか不可能だった。海中では空気との屈折率の違いで起こるレンズ効果のため、目視による距離の判定はまったくあてにならない。正確な距離を知る必要のないマニューバーならばどの方向からでも良かったが、レーザー照射を行うためにはある程度正確な距離を知る必要があった。

「望月さん、レーザーの試験をお願いしますか。」

本来ならば津田が行う作業であったが、二人が接近マニューバーに忙殺されていることから、レーザーの操作は望月が行う手はずになっていた。

「方向はどうしますか。」

「とりあえず、生物と正反対の方向でやってください。刺激してもあまり良いことはなさそうですから。」

「了解、生物と反対方向、海底に対して45度の入射角で試験発射します。同時に海水の成分分析もやってしましましょう。時間が節約できる。」

「お願いします。」

望月は観測員席のモニターコンソールから方位、角度を指定し、同時に観測センサーの初期設定とキャリブレーションも行い、試験照射で海水分析をしてしまう準備を整えた。

青緑レーザーによる海水分析の原理は、透過性の大きい青緑レーザーをある方向に向けて照射し、その散乱の度合いを計測する事で海水中に含まれる浮遊粒子の量と、特定の浮遊粒子が引き起こす特徴的な散乱パターンを観測して、浮遊粒子の特定などを行うものである。

「それでは発射します。」望月はそう言ってモニターに出してあつ

た、レーザー制御コンソールの発射ボタンをクリックした。2秒間の試験発射であったが、計測器はフル稼働していた。

「計測結果処理中。あれ、エラーだ。散乱度変化が設定値を超えたって？まさか。もう一度キャリブレーションしてみます。」

望月はレーザー制御コンソールから初期設定タブを開き、前のキャリブレーション設定値を捨てて、もう一度キャリブレーションを行った。しかし、その設定値は以前のものとほぼ同じだった。そして、再試験の結果も同様であった。

「望月さん、接近行動を中止します。レーザーに問題があるのでは意味がないですからね。」

「そうですね、いったん距離を置いて調べなおした方が良いと思います。それに、ここから先の機械の点検は津田君じゃないと。」

「それでは、一旦側方へ距離を取る。レーザー再試験後、改めて接近行動を再開する。津田、マニユバーは俺一人で良いから、レーザー点検初めてくれ。」

「了解、艇長。しかし、ちょっと腑に落ちないんですよ。望月さん、試験出力は定格でしたか？」

「ええ。マニユアル通りですよ。」

「散乱度の変化って、散乱度が大きい方へ変移してるって事ですよ。ね。だとするとですね、レーザー側の故障だとしたら、出力が増える方へ変化しなきゃいけないんです。ところが、今、電源系のログ見てるんですが、レーザー照射中の電流は変化してないんですよ。」

「するとレーザー装置側に問題は無いと？」

「ええ。そう思うんですよ。これから計測器をチェックしますけれど、二度初期化しても同じ結果つてもおかしい。というのはですね、エラーは散乱度の変移が設定値を超えた、って言うてるわけです。計測装置に問題があるなら、2度目の初期化での値に変化がなけりゃいけない。双方に共通するのは電源だけです。これはすでに、ログで確認して、変化が無い事が判ってる。どうも変ですよ、これ。」

「それじゃ何が原因なんです。」

「海水自身。その可能性が一番高いです。あ、計測装置の自己診断が終わりました。異常なしですね。これで異常が無いなら、後はメインコンピュータ自身がおかしいという事なんで、それはちょっとあれですから・・・望月さん、ちょっと実験してみましよう。ちよつと方向を変えて、レーザーがフッドライトの中を通るようにして照射してみます。で、それを外部カメラで拡大して見てもらえますか。」

津田はマニピュレーターの先端座標をマニピュレーター制御装置からレーザー照射制御装置に取り込み、そのマニピュレーターの先端をかすめるように照射するよう設定した。望月はマニピュレーターの先端に外部カメラの焦点を合わせ、それを4倍に拡大してスクリーンに映し出した。

「それじゃ照射しますよ。最初は試験と同じ2秒間です。それじゃ照射します。」

津田がレーザーを照射すると、2秒間、鮮やかな青緑の線がモニターに現れ消えた。

「ほら、望月さん、見て下さい。レーザーの通過した跡が見えますよ。通過した跡が僅かに白濁しているのが判りますか」

「確かに。なるほど、これじゃ時間とともに散乱が増えるわけだ。」

「こりゃ、海水がおかしいですよ。可視光線での透明度は普通に見えますから、レーザーだけに反応する何かが海水中にあるってことです。」

「しかし、そんな海水って例がないですよ。」

「津田、海水の比重は連続して計測してるだろ。それに変化無いかな？」

「ちよつと待つて下さい、艇長。ああ、これだ。水深300mくらいに小さいですが比重の不連続があります。ってことは、我々は違う水に入ってる？どうして艇長判ったんです？」

「実はな、艇が少し浮き気味なんで変だと思ってたんだ。それとな、

出力／速度曲線も多分おかしい。海水の粘度が違うんじゃないか？」
「うわ、さすがに粘度は連続計測してません。海水サンプルを取って、母船で調べてもらいます。ところで、もう一回レーザー照射します。今度は10秒間照射して、例の白濁を十分出して、それを採取、上で分析してもらいましょう。望月さん、すみませんがカメラの方お願いします。」

「了解。このままで良ければ、画像自体はすでに取り込んでますから、いつでも良いですよ。」

津田は照射時間を10秒にセットして、照射を開始した。今度は時間があつたため、レーザーの経路に沿ってわき出すように白濁が現れるのが、カメラではつきり見えた。

調査（後書き）

用語で判らないモノがありましたら、どうか感想に書き込んで下さい。
説明します。

攻撃（前書き）

第四話です。

攻撃

それは、望月が白濁した海水サンプルを採取しようとした瞬間だった。

「何かに掴まれ。来るぞ。」野瀬が叫んだ。

それまで、海中に漂うような動きしか見せていなかった巨大生物が、突如その全体を燐光で光らせるや、驚くほどの早さで体の両端を合わせるような動きを始めた。そして、その両端の合わさる位置には「みずなぎ」があった。

物理的な衝撃は900mを超える潜航耐力を持つ「みずなぎ」の艇体強度が許容できる範囲だった。しかし、その物理ショックの直後にさらされた電撃には耐えられなかった。金属ボロン繊維とケブラーで強化された炭素繊維/アクリル樹脂製の主船殻自体は絶縁性だったが、外部に多数の金属製部品が露出しており、また、艇体周囲に巨大な電流が流れた事による、静電誘導、電磁誘導による起電も無視できなかった。

電撃によつて、電源系の接地電位を数千ボルトにまで上昇させられた事により、地絡保護系は例外なく焼き切れる事になった。さすがに2重3重の安全性を追求する潜水調査艇ゆえ、回路的に保護されていた部分は直接的には無傷であったが、電気、電子装置に電源が供給されないのならば、壊れていなくても結果は同じだった。370mの海中で電源を失った艇は、真の闇に包まれた。それまで発光していた生物も、この攻撃以来、まったく発光をしなくなっていた。「みんな、大丈夫か？」最初に精神的平衡を取り戻した野瀬が安否を確認した。

「津田、なんとか生きてます。」

「望月も怪我は無いようです。」

「みんな生きてるようだな。ところで何だったんだ、あれは。最初はぶっ飛ばされるのかと思ったが、そっちは外洋の波程度のシヨッ

クで、ちょっと安心したとたんに、ピカ、ドカーンだ。雷みたいな感じだった、海中で雷か？」

「多分、そうです。艇長。雷というよりも生体電撃、つまり、電気ウナギとかシビレイイのあれだと思います。ただし、規模が雷クラスだったという違いはありますが。」

「電撃なのか？海中だぞ。海水は電気の良導体じゃないのか？」

「そうですが、なにせ電圧、電流が大きいですから、僅かな抵抗でもこういう事になります。」

「なるほどな。ところで、津田、なんで非常灯まで点かないんだ？あれは自分が抱えてる電池で動作するんだろ？」

「調べてみないと・・・ちょっと待って下さい・・・あつた、これで明かりができる・・・」

津田がそう言うのと、手元に緑色の灯りが点った。

「これを使って下さい。化学発光体です。中程で折り曲げて、中のガラスアンプルを壊すと発光が始まります。振れば明るくなりますから。」

3人がそれぞれ発光体を点灯すると、キャビンは淡い緑色の光で満たされた。

「なんだ、津田、こりゃあ夜釣りで使うケミホタルじゃないか。なんでこんなもん用意してあつたんだ？」

「深海でのマーカーに便利なんですよ。中身が液体だから水圧で潰れないです。さてと、非常灯はと・・・」

ほどなく、非常灯が復旧して、キャビン内部は先ほどとは逆に赤い光で満たされる事になった。

「まったく、非常灯まで半導体化だと言って、メインとの切り替えをSSR（半導体リレー）なんかでやるもんだから、メインラインのサージでSSRが飛んで、肝心の時に役立たずになる典型ですね、これ。単純に機械式にしとけば済むものを・・・」

ともかくも、非常灯が復旧したことで、メイン電源系の復旧に取りかけられる事になった。しかし、こちらは予想外に深刻だった。

「艇長、ちよつとメイン電源は簡単に行きそうにないですね。地絡保護の付いたブレーカーは全て地絡保護回路が焼け切れています。ブレーカーそのものの交換以外には完全に復旧する方法は無いです。問題なのは、燃料電池への燃料圧送ポンプがやられてる事でして、このままでは燃料電池出力が半分も出ません。燃料電池そのものは、保護回路のおかげで無事ですが、自然流入だけではどうにも・・・。推進系と浮力制御系以外は非常用の電池で動作させられるので、接続を切り替えれば問題無く動くはずですよ。ただし外部の観測装置は期待できませんが。」

「なるほど、状況は判った。ともかく、艇の現在の状況を知る事が先決だ。まず艇の制御を取り戻したい。今の状態では艇が沈下しているのか、浮上しているのか、まったく判らないからな。」

「了解。すみませんが望月さん手伝って頂けますか。」

「おやすいご用で。何をすれば良いですか。」

「最初に観測席の両脇に燃料電池へのアクセス口があります。コインで頭をねじれば開くロックですから、それを開けて貰えますか。」
狭いキャビンの中で3人の戦いが始まった。

「えつと、これで制御装置とコンピューターの電源は復旧するはずだ。艇長、制御システムを立ち上げて下さい。」

「今やってる。お、立ち上がったぞ。アラームで真つ赤つかがな。」

「ああ、そりゃ正常に働いてるって事なんで喜ばしい。すみませんが、制御をこちらのコンソールに下さい。」

「よし、切り替えるぞ。3、2、1、切り替えた。」

「はい、来ました。さてと、アラームを潰さないけりや。望月さん、そちらのコンソールも立ち上げて貰えますか。」

「もう立ち上げてます。こっちもアラームで真つ赤つかですねえ。」

観測装置制御系はこのコンソールからやりましょう。」

「そうして貰えると助かります。艇長、そちらのコンソールに浮力系の制御を出してあります。試験プログラムを走らせて貰えますか。」

「お、判った。今ロードしてる。・・・じゃ走らせるぞ。」

攻撃（後書き）

というわけで、第四話です。

用語の判らない部分がありましたら、感想に書き込みをお願いします。

後で解説します。

復旧（前書き）

第五話です。

復旧

主電源に関わるものを除く、その他の装置の試験と切り離しを終え、艇制御を再起動させた時点での状況は深刻なものと言えた。艇は0.7m/分というゆっくりとした速度ではあったが沈降モーメントを受けており、さらにごく僅かではあるが、浮力はマイナスになっていた。これは今後水深が深くなるにつれ、浮力は減少するため、さらに沈下速度が加速される事を意味した。

「艇長、あまり歓迎できる状況じゃないですねえ。艇が沈んでいます。どうしてもメインを復旧させないと・・・非常浮上装置は極力使いたくないですから。」

確かに艇には非常浮上装置が備わっていた。しかし、それは球形キヤビンのみを切り離し浮上するというもので、それは艇を失う事を意味していた。それゆえ、本当の意味での最後の手段だった。

「確かに、まだキヤビンの切り離しをする段階じゃないな。推進と浮力、どちらの復旧の可能性が高いんだ？」

「電力的には浮力調整装置ですね。ただ、復旧できるならば、推進装置の方が浮上は早くなります。ともかく、なんとか電源を供給しないと、自己診断もできません。」

「津田さん、燃料電池の端子が見えてるんですけど、ここへ直接繋ぐわけには行かないんですか？」

「ええ。この艇の電源系は超大型のプリント基板みたいな構造でして、樹脂船殻の中に電源母線を埋め込んである形なんです。ですから、繋ぐためのケーブルというのがほとんど存在しない。母線の回路自体は二重化されていて、安全係数は非常に大きいのですが、まさか海中で電撃を受ける事までは想定されていませんでしたから。」

「そうですね。まさか海中で電撃を受けるなんて普通は考えられませんからねえ。」

「ブレーカーをバイパスしてしまえば復旧はするのですが、バイパスするものが無い。で、ブレーカーを分解して内部を強制的に接続状態にする方法で復旧する事を考えているんですがね。」

そう言いながら津田は、配電盤からメインのブレーカーを取り外していた。ブレーカー自体はコネクター式になっているため取り外しは容易だった。

「あー、やつぱり。これ組み立て式じゃなくて、樹脂モールドになっている。こりゃ分解は手間だぞ。それよりも強制的に接続状態にできるかな？」

「なんでそんなもの使ってるんだ。サバイビリティ最悪じゃないか？」

「いえ、それ自体のサバイビリティは低くないんです。そのためにコネクター式になってるんですから。ただし、予備を持つてることを前提にしてですが。」

「とにかくなんか考えてくれ。製造メーカーの批判は上に上がれてからにしよう。」

浮上、操縦に支障のない部分を手当たり次第に分解した結果、なにがしかの代用品を手できた津田は、浮力調整装置の復旧にかかった。しかし、コネクター部分でバイパスするにせよ、故障していいと思われる地絡保護の無いブレーカーを除いても3カ所のバイパスを造らなければならなかった。それでも、かれこれ一時間の津田の奮闘により、電源が浮力調整装置に供給された。

「艇長、電源はこれで繋がってます。そちらのコンソールで試験願えますか？」

「もう立ち上げてる。お、早いな、自動診断に入ったぞ。うん、取りあえず駆動系には異常がないぞ。あー、電源電圧アラームが出た。電圧が低い。診断結果はこの深度だと浮力調整は無理だと・・・」

「ええ、それは予測範囲です。さてと、燃料電池電圧をどう上げるか？なにせ燃料圧送できてませんから。」

津田はまず燃料圧送系の電源復旧を試みたが、これは絶望的だった。燃料タンク内部に設けられた圧送ポンプ系は唯一地絡保護がされていないため、ポンプ駆動モーターにダメージが及んでいた。

「予想通り、ポンプはだめですね。アイディアはあるんですが、ちよつと危険なんで・・・」

「そんなこと言つてられんぞ、現在深度410m、0.9m毎分の沈降度になつてる。このままだと加速度的に沈降度が上がるし、電源に問題がある状態だから、なるべく早いうちに正浮力にせんと、アウトになるぞ。」

「ええ、それは判つてますけれど、予備の空気ポンプを使わにやらないんで、躊躇してるんです。」

津田のアイディアは、3本ある予備空気のポンベのうち1本の空気を放出して、そこに燃料を入れ、もう一本のポンベの加圧された空気をそれに入れて、圧のかかった燃料ポンベを作り、それを燃料電池の燃料ラインに繋いで圧送するというものだった。1回に最大10リットルしか送れないが、浮力調整だけならなんとか可能はずだった。

「しかし、津田さん、どうせ巧く行かなければ緊急浮上しかないんですから、その作業時間分の予備空気があれば十分ですよ。と言うことは、2本使つてしまつても大丈夫だという事だと思いますが。」望月の意見は非常に論理的だった。

「津田、そういうことだ。そのアイディアを実行してみよう。それでだめなら、緊急浮上するだけだ。」

「判りました、やってみましょう。」

作業自体は簡単だった。エアコックを開いて空気を艇内に放出し、空になった空気ポンベの弁を外して燃料ドレインから燃料を入れ、もういちど弁を取り付けて、ホースで別の空気ポンベに繋ぎ、均圧させるだけでよい。しかし、燃料系にエアホースを繋ぐのは簡単では無かった。スクイーズバルブの手前で燃料ラインを切り離し、エアホースにアダプターを付けて、それに繋ぐ作業は狭い点検穴に半

身を入れてでなければできなかった。結局、一番近い望月が貧乏くじを引くことになった。

「繋ぎましたよ。もう一度は金をもらっても嫌ですけれどね。」

点検口から体をやつと抜き出した望月がぼやいた。

「いや、その、もう一度入ってもらわんと……すんませんね望月さん。」

「えー、もう一度。何するの。」

「燃料を送る前にスクイーズバルブを開いて、エア抜きしないといけないんですよ。」

「あ、そりや大丈夫。バルブのところから曲げて、体入れなくても手がとどくようにしてあるから。」

「あ、流石……それじゃ早速燃料送る準備しましょう。えっと、スクイーズ開いてもらえますか？」

「ちよつと待つて……はい、開きました。」

「それじゃ、ゆっくり送りますから、燃料が出てきたらすかさず締めて下さい。」

「はい。どうぞ。」

「それじゃ送ります。」

「まだ来ないぞ。あー来た来た。はい閉めました。」

「OK、準備完了です。艇長、それじゃ燃料圧送しますから、アラームが消えたら、浮力調整お願いします。」

「コンソールはもう出してある。いつでも良いぞ。」

「それでは送ります。」

津田はポンベのバルブを僅かずつ開き、規定の燃料圧に調整した。

「艇長、どうですか？」

「まだ回復しない。どうしたんだ？」

「まだ反応膜全部に燃料が浸透していないからでしょう。もう少し待つて下さい。」

「お、アラームが消えた。それじゃ始める。」

艇体の4力所にある、機械的に排水することで浮力を調整するチャ

ンバー内部のブランジャーが動き始める音が聞こえた。まもなく、
コンソールの浮力指示が正になり、艇は浮上に転じた。

復旧（後書き）

第五話でした。

少し端折り気味ですが勘弁して下さい。詳しく書いてると技術説明書みたいになっちゃいます。 > <

用語の判らないところはどうか感想に書き込んで下さいませ。説明を致します。

復旧2（前書き）

ちょっと短いですが第6話です。引き続き第7話も投稿します。

復旧2

「津田、水中翼制御にも電源貰えるか？できればもう少し母船に近づいておきたいんだがなあ。」

「多分大丈夫でしょう。燃料はまだありますから、ブレーカーの接続だけ変えれば、十分いけると思います。」

「それじゃ頼む。」

津田は破損したブレーカーを簡単にバイパスした。一度できた事は簡単に他にも応用できる。

「艇長、電源行きました。コンソールで操作してみてください。」

「うん、アラーム消えて操作アイコンが出た。これ最適値制御させられるのか？」

「うーん、多分だめだと思います。メインコンピューターとはオンラインですけれど、外部センサーが死んでると思いますのでフィードバックデーターが無いですから。」

「なるほどな。それじゃ、えいやっと。ま、こんなもんだろ。」

まったくの山勘ではあったが、経験に裏付けられた野瀬の操作により、艇は浮力を前進力に変換しはじめ、艇は静かに海中を進み始めた。

復旧2（後書き）

筆者旅行のため、中途半端な投稿になった前話の続きです。本編は引き続き第7話として投稿します。

承前（前書き）

第7話です。

承前

「吉村主任、電話ですよ。海自の滝川さんから。」

「ほい、ありがとうございます。みつちゃんいつも可愛いねえ。」

「吉村さん、それって典型的セクハラですけど。お世辞はいいですから、早く出てください。ったく。」

海洋学研修生の八木みどりは毎度の事にうんざりした口調で文句を言いながら、吉村に受話器を渡した。

「まあまあ、そうとんがらずに。へい、毎度、提督。今日は何でござんしょう。」

『おはようございます。滝川です。今日、ちょっとそちらへ伺いたいんですが、体空けて貰えませんか?』

「滝川提督のご要望なら、と言いたいんですが、今日はちと都合がよろしく無いんですが・・・これからドリイのバグ取りがあるんで試験水槽に詰めなきゃなんのですよ。明日にできませんか?」

『それが、天の声でして・・・』

「つつと、幕の辺りから・・・」

『いえ、もつと上でしてねえ。』

「そりやまた・・・判りました。いつでも結構です。体空けます。」

『すみません。無理言つて。それじゃすぐにお伺いしますから。』

「判りました。お待ちしてます。」

「おい、みつちゃん、ドリイの班に今日のバグ取りに参加できないから、勝手にやって、後で報告と改訂分のソースリストこっちにくれるように連絡してくれるかな?使っちゃって悪いけど。」

「はいはい、判りました。ドーセ研修生なんて、こき使われるもんだって諦めてますから、見え透いたお世辞は言わなくても結構ですからね。」

「まあまあ、今日の昼飯おごるから、機嫌直して。」

「モノで釣ろうとしてもダメです。それに、職員食堂のラーメンで

二度も釣られるもんですか。銀座辺りでフルコースってなら釣られても良いけど。」

「お、おい・・・・・・・・・・・・・・・・」

一時間半ほどで海上自衛隊幕僚監部所属の滝川一佐は吉村の前に現れた。

「滝川さん、何ですか、かなり深刻な話のようですが・・・」

普段の吉村からは想像もできない真剣な口調で、挨拶も抜きに切り出した。

「ええ、ま、深刻と言えば深刻なんですがねえ・・・」

「ひよつとすると米軍絡み・・・そういう話ですか？」

言いにくそうな滝川の先を吉村が読んだ。

「ええ、そういう事なんですが、今回は単純じゃなくてですね・・・」

「

「私のスタンスは判っていらつしやる滝川さんだから、今更ごちゃごちゃ言っても仕方が無い。ともかく話を聞きましょうか。」

「そう言ってもらうと気が楽になります。それじゃ・・・・・・・・」

滝川の話をかいつまんでしまうと、米海軍の最新型原子力潜水艦が小笠原東方の海中で消息を絶った、というのが話の骨子であった。

問題はその潜水艦が米海軍が次期攻撃型原潜のプロトタイプとして建造し、評価試験中の艦だった事だった。この艦の持つコンセプトは、これまで軍事的には利用された事が無い、新たな空間、つまり、千mを超える水深の海中における自由な行動であった。最大潜入深度三千m、安全深度二千mという深海潜水艇なみの耐圧船殻と、そのような大深度からも攻撃可能な武器体系を持つ、この新型潜水艦は事実上一般的軍事手段では探知不可能であり、さらにこれを攻撃する手段も現時点では、どの国の海軍も持ち合わせていなかった。従って、現時点でこの艦は無敵と言っても過言ではなく、それゆえ、米海軍内部ですらこの艦の存在自体極秘の扱いとなっていた。

その艦が消息を絶った。米海軍が所有するDSRVの持つ能力を遥かに超える水深の海域で消息を絶ったこの艦の搜索が有為な時間

で可能なのは、一万m級の潜航作業が可能な「かいえん」を持つ海洋調査機構しか無かった。

「なるほど。確かに太平洋の西側ではうちだけですからねえ、そういう能力があるのは・・・しかし、極秘の艦でしょう、いいんですかね？半官とはいえ、民間であるうちに情報を渡しても？」

「背に腹は代えられないって事でしよう。それと、これは噂ですが米政府のかなり高い地位の人間の関係者が乗り組んでいるとか、いないとか・・・」

「まあ、そういうこともあるんでしょうね。で、具体的にはどうするおつもりですか？」「今、「みこもと」は出てるんでしたよね？」

「ええ、都合の良い事に小笠原近傍での海底調査に向けて航行中です。今は相模湾を出る辺りですかね。」

「そりゃ都合がいい。どこか、八丈辺りで便乗者乗せられれば・・・」

「

「事情が事情だから私が直接出向きますよ。「ドリイ」も運ばなきゃなんので、どうせ一旦どこかに入港する予定でしたから。ただ、アメちゃんの指揮下に入るのだけは勘弁してもらいますよ。これだけは譲れない。情報はリアルタイムで流しますが。それと、上との話をお願いします。「ドリイ」を持って私が飛ぶまでは、予定のうちですが、そこからの目的変更は私の一存じゃ無理なんで。」

「ああ、そっちは任せて下さい。もともと一番上から幕へ降りてきた話ですから、問題ないでしょう。指揮権の方は赤坂（大使館）の方がごちゃごちゃ言いそうですが、なにせ吉村御大自らご出馬じゃ譲るわけにも行かない。ごり押しますよ。」

「よろしく願います。で、ブリーフィングとかは？」

「連中（米軍）はやりたいみたいですが、連中だってそう多くの情報を持つてゐるわけじゃない。時間を考えれば、乗船してからで間に合うでしょう。遭難した艦のデータは直接「みこもと」のデータベースへ送れば済む事ですし。」

「そういうことなら、すぐにでも動きましょう。おーい、みつちゃ

ん、ちょっと来てくれる。」

「はい。なんでしょう、主任。」

「えっと、インマルかインターネット経由で「みこもと」に八丈へ入るよう連絡してくれますか？多分、インマルの方が早いな。Ｃならブリッジで打ち出されるから、長野がオンラインゲームで占拠してるネットより早いだろ。」

「了解しました。それではインマルサットＣへメールで送ります。バックアップにネット経由でも同一文を送信しておきます。」

「はい。それで良いでしょう。それじゃお願いね。あ、それと「ドリイ」班の村上君に後で来るように伝言しておいてもらえると有り難いなあ。」

「はい。「みこもと」へメール打った後ですぐに。」

「すみませんね、八木さん。突然忙しくしちゃったみたいで。」

「あ、い、いえ、滝川さんのせいじゃありませんから・・・」

「お、おい、滝川さんと俺とじゃ随分対応が違うじゃないか・・・」

「

「主任、中年のいじけはモテない原因の第一位ですからね。」

「お・・・」

承前（後書き）

時間を遊んでいますので、混乱の無いように。

搜索（前書き）

第8話です。

搜索

翌日早朝、バグ取りの済んだ「ドレイ」と吉村を含む一六名に海自からの連絡員二名、米海軍からの便乗者八名を乗せたC?130輸送機は厚木基地から八丈空港へ向けて離陸した。八丈三根港に入港した「みこもと」への「ドレイ」の搭載と便乗者の乗船は午前中に済み、昼前、「みこもと」は一路小笠原東方海上へと進路を向けた。

昼食後、乗り組み要員へのブリーフィングが行われたが、米海軍からの情報は遭難位置に関する以外、ほとんど意味の無いものだった。付近の水深は三千m程度であることから、艦自体は無事である可能性もあったが、米側の希望でそれは伏せられたまま、一次搜索はサイドスキャンソナーにより海底地形の変化を探知、それをデーターベースに送られた艦型を三次元シミュレートしたものと比較して、可能性のある海底地形へ「ドレイ」を送り実画像で確認、という手順を繰り返すことに決められた。

問題だったのは、米海軍からの便乗者だった。連絡、識別、技術のために来た六名には取り立てて問題は無かったが、その専門がはつきりしない二名が発見後の指揮権を要求したため、吉村と真正面から衝突することになった。すでにCINCPACと在日米海軍司令部からは滝川が手を回して覚え書きを受け取っており、無視すれば良いだけであったが、吉村の性格と事情がそれを許さなかった。この二名が母島二見港で降ろされずに済んだのは滝川から、「米政府の高い地位」からの要請で降ろす事だけはやめてくれ、という一報があったことによる。

実は吉村には、米国を信頼できない事情があった。それは「みずなぎ」開発に関わっていた。吉村は「みずなぎ」開発の主務者として計画に関わり、特に「水中グライダー」技術を、その中心となっ

て推進していた。実験を行ったウツズホール研究所と正式に技術提携を行い、ほとんど基礎データしか無かった「水中グライダー」技術を、Tronと組み合わせて外部センサーフィードバックによる最適制御を行う事で実用可能なレベルにまで発展させたのは、ほとんど吉村の率いたチームだけの成果と言っても良かった。ところが、それを「みずなぎ」に搭載し、いよいよ正式実験開始という段になって、とんでもない問題が持ち上がった。米国南部の田舎町に住む一人の男の代理人から、「水中グライダー」に対する特許使用料の請求が舞い込んだのである。ウツズホール研究所との提携で、商業利用しない限り無制限の技術使用权を獲得しているはずの技術に特許使用料を請求されたのだから、まったくの寝耳に水であった。驚いた吉村はウツズホール研究所と連絡を取り合い、事情を詳しく知ろうと努力したが、ウツズホールでも何も判らず、結局、米国内で訴訟を起こされる事になった。

後になって判明した事であるが、その事情はあまりにもばかばかしい事情だった。ウツズホール研究所がこの「水中グライダー」を実験した新聞記事を読んだこの男は、

その日のうちに原理図を書き上げ、自分のアイデアとして特許申請したのである。ウツズホール研究所は、この方式の実験をスキューバダイビングの補助装置と位置づけて行ったため、その用途としての権利関係については注意をしていたが、実用潜水艇の動力としての考慮はまったくしておらず、盲点を突かれた形で特許が成立してしまった。そして、ウツズホールでは実験結果があまり期待できるもので無かった事などから、すでに忘れられた技術として注意を払っていなかったため、本来なら彼らが獲得すべき特許が他の人間に認可された事を知らずにいたのだった。

当初、吉村は一人でこれに対処するはめになった。技術提携先のウツズホールは、すでに忘れられた技術として、あまり熱心ではなかったからである。吉村は日本と米国の間を飛び回りながら対応していたが、結局最初の裁判では数千万ドルもの特許使用料を支払え

との判決が下される結果となった。ともかくウツズホールが動かない事には埒が開かないというよりも、本来ならば訴訟の矢面に立つべきはウツズホールなはず、と考えた吉村は「水中グライダー」技術の骨子とも言えるTron応用技術とその最適化論理を、時期尚早という部内の反対を押し切る形でウツズホール側に公開、それによつて技術の将来性を認識させる事に成功し、ウツズホールに真剣な対応をさせる事になった。これにより訴訟には勝つたがその将来性を知ったウツズホール側から様々な技術利用制限を押し付けられる事になった。

本来、投げ捨てていた技術にもかかわらず、吉村らの努力でその真の価値が見いだされるや、権利を主張し始める、というウツズホール研究所に限らず、米国の社会的習性ともいえる対応に、日本側ではこれまた日本的な吉村の技術的詳細の提供が原因だから、と責任を追求する動きまで起きては、吉村と言わずともうんざりするのは当然だった。これ以降、吉村とこれに関わったチーム全員は、米国という国家に対する信頼感をまったく喪失し、独自技術による開発を目指す、なぜか米国に対して妄信的信頼を置く人々からは「無駄な努力」「金の無駄遣い」などという非難を浴びせられる事になった。それでも、トラブルによる遅れを取り戻し、当初予定からの遅れも許容範囲に収め、当初予算の範囲内で「みずなぎ」計画を成功させた吉村とそのチームの業績を評価しないわけには行かず、潜水艇による海中調査の第一人者という地位も外力で左右できるものでもなく、現在の地位は当然のものと言えた。

このような吉村であったから、その二人の要求への答えは、「ふざけるな、何様だと思っていやがる。」であった。幸い、日本語はあまり判らないようで、大事には至らずに済んだが、吉村を知る米海軍便乗者の中には失笑を漏らすものまで居た。しかし、このどたばたも滝川からの連絡で吉村が矛を収め、一段落したかに見えた。それでもこの二人は、吉村だけでなく、システム担当の長野にサ-

バーへの root 権限での接続を要求したり、船長にインマルサット F の専用を要求したり、なんとも表現のしような無い行動を展開していた。

しかし、船はどたばた劇とは関係なく行程を進め、二日目の午後には遭難海域とされる位置に到達していた。搜索は最終的に判明している位置とその時点での進路、速度を基準に、いくつかの矩形の区画を設け、そこを一海里幅でジグザグにスキャンして行く。速度を7ノット以上に上げるわけには行かないため、搜索範囲を考えれば非常に時間の掛かる作業だった。搜索はこれ以外にも、発信されていると思われる、音響遭難信号の受信を目的とした艦艇や対潜哨戒機によるソノブイ投下などでも行われており、どこかに出張っているはずの原子力空母「ニミッツ」の搭載機と思われる S ? 3 哨戒機が時折付近に現れていた。しかし、いまだ信号を発見したという知らせは無かった。

「みこもと」は事前に情報に基づいて割り出した予想コース上を10個の一辺10海里の区画に分け、それを一つずつしらみつぶしに搜索する操船を開始した。サイドスキャンソナーの信号は角度が大きくなるに従って歪みが増えるため、両サイド0.5海里程度が実用範囲だった。無理をすれば2海里程度の幅を取れない事も無いが、今回のように三千mを超えるような深度では歪みが大きすぎて実用的ではなかった。時間的節約のため、スキャンでそれらしきものを発見しても、停船せずスキャンを続け、一区画スキャンが終了した時点でコンピューターシミュレーションでの蓋然性が高い順に「ドリイ」を送り込む手はずになっていた。対象の位置精度はGPSが頼りだったが、GPS信号の受信範囲外であるため、精度が問題であった。しかし、米海軍の技術陣が持ち込んだ軍用GPS受信装置からの信号をシステムに取り込む事で簡単に解決してしまった。精度そのものは公表されなかったが、要求される表示精度から考えれば、ミリ単位の精度でもおかしくなかった。

第一区画では14個の「それらしき」目標を発見したが、シミュレ

ーシヨンの結果、蓋然性がどれも10%以下で、「ドリイ」を送り込む優先順位は低く、そのうち数個は出力を上げて再スキャンすることで、軟泥下の構造との連続が確認されたため、岩礁と判断され、結局第二区画へそのまま移行した後に調査という事になった。

搜索（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

異常（前書き）

第9話です。

異常

それが見つかったのは第二区画の走査を半分ほど終了した時だった。

「あれ、なんだこれ。」

ソナー担当の黒岩が素頓狂な声を上げた。リアルタイムで解析をした結果を表示しているスクリーンの一部が真っ白に空白になっていた。ソナー観測室の隅でコーヒを入れていた、もう一人のソナー担当、山崎が「なんだ、お化けでも出たのか」と混ぜっ返したが、黒岩は真剣だった。

「画像の一部が解析不能らしいです。空白になってます。どうしたんです。」

「なんだって？コンピューターがおかしくなったんじゃないか？」

「いえ、他の部分は正常なんです。おおよそ800m四方の区域だけがぼっかり空白になっちゃってます。」

「そりや変だ。主任を呼んだ方が良いな。」

自室に居た吉村はインターカムで呼び出された。インターカムでの簡単な説明を聴いて、システム担当の長野にも呼び出しを掛け、自分ソナー観測室へ急いだ。

「なんだ、何があったんだ。黒岩君。」

「これを見てください。800m四方が空白で出力されてます。」

「ふーん。変だねえ。解析前のソナー信号映像は見たのかね。」

「今、スクリーンに出します。」と山崎がソナーを操作しながら答えた。

「なんだ、こりや？穴が開いてる？まさか？おい、長野君こだけエラーって事は無いのね。」

「コンピューターってのはこういう形ではエラーしないんですよ、普通。なんかのコマンドが入ってこただけ空白にせよ、って命令したなら別ですがね。とにかく、データーをダンプしてみます。」

「それじゃ俺は船長に頼んでちょっと船を戻してもらおう。位置は判ってるんだろ、真上に船を持っていつてもらう。」

吉村はブリッジに連絡して、異常を伝えたと共に船を戻す位置を知らせた。

「あー、なるほど。それで空白なんだ。」データーを見ていた長野が声を上げた。

「なんだ、何か判ったのか？」

「これ見てください。入力データーが閾値を超えてるんです。だから空白が表示される。要するにあり得ないデーターなんですよ。だからコンピューターはエラーとして切り捨ててしまうわけです。こりゃコンピューター側じゃ無くてソナー側の出力信号の問題ですね。」

「で、山崎君、ソナーはどうなんだ？」

「吉村さん、これ見てください。これ空白のエリア部分の録画像ですけど、その空白部分、穴が開いてるように見える部分じゃなくて、その周辺部分なんですけれど、海底地形が乱れて見えるでしょう。」

これ海底地形じゃなくて、相互干渉か何かで反射波の到達時間が変わってるんです。辺縁部の乱れが全周で同じ周期になってるのが判りますか。」

「うん、言われて見ればその通りに見えるな。」

「吉村さんブリッジからです。」長野がブリッジからの呼び出しを取り次いだ。

「お、すまん。はい、吉村です。ただ今直上ですね。すみません、お手数かけます。できる限りで結構です、この位置をキープして頂けると有り難いです。はあ、わかりました。いえ、それで結構です。ダイナミックポジショニングに移行する必要は無いと思いますのではい。それでは観測終了次第連絡します。山崎君ただ今直上だ。ソナースキャン頼む。」

「了解。スキャン開始します。」

「お、やっぱりひどく乱れてるな。長野君、なんとか解析できない

か？」

「ちよつと無理ですね。海中の音響特性がひどく変化しているから、閾値を変えてもだめでしょう。シミュレーションを停止して、歪み修正だけに見てみますが、そう変わらないと思います。ただし辺縁部の正確な形は判ると思います。」

シミュレーションを停止した結果、音響異常の区域が不定形のドーム状に広がっている事が判ったのは収穫だった。穴ではなく海底から盛り上がる形になっていた。

「一応、海底を三千mと仮定して、回折などで信号遅れが生じていると想定した解析結果です。多分、現実の状況に最も近いかも知れません。それと400m付近にいくつか乱れがあります。何かが浮遊しているようです。ソナーでは見えませんか。」

「だめですね。こちらの表示部はそんなに頭良くないですから。」

「判った。ともかく、探査を続行しよう。400付近の幽霊は「みずなぎ」を降ろして調べてみよう。「みずなぎ」なら7ノット程度の速力でジグザグ航行している本船との出会い進路に入るのは簡単だからな。もっと深いドーム部分は区画探査終了後、「ドリイ」に行こう。ソナー班はそのまま続行、長野君は「みずなぎ」とのデータ回線構築を頼む。「みずなぎ」は一号艇、野瀬さんに行ってもらおう。チームは誰だったかな、津田君か？長野君すまんが、野瀬さんに連絡してもらえるかな。俺はブリッジへ説明してから、後ろへ行く。」

吉村は当座の行動をそう指示すると、ブリッジへ上る階段へ向かった。

「お、吉村さん、いったい何が持ち上がったんですか？」

吉村がブリッジに上がると、そこには船長の山下が待っていた。

「船長、こちらでしたか。いえ、ソナーがおかしな反応を捕まえまして。」

「ほう。今回の探し物に関係がありそうなんですか。」

「いえ、まだその辺は判りません。ただ、これまで本船が遭遇した

事が無い現象である事は確実ですね。この直下の海底の相当広い範囲に渡ってソナー反射が異常になる部分が存在しています。解析した結果どうも海底からドーム状に盛り上がる形でそういう部分があるようです。それと水深400m付近にも幽霊のようにつかみ所のない反応が現れてます。少なくとも魚やクジラの類いじゃありませんね。」

「なるほど。それで、どうするおつもりですか。」

「一応、探査はこれまで通りこの区画が終了するまで行い、海底の異常部分へは、区画探査終了後、「ドリイ」を送るつもりです。水深400m付近の異常には、ここで「みずなぎ」を降ろして、調査後本船との出会い進路に入れ、会合点で回収を考えてます。」

「大丈夫ですか、まったくバックアップ無しで。」

「ええ。「みずなぎ」はもともとがそういう用途で作ってありますんで。もつとも状況が許せば、ゾディアックを一杯残しておきたいんですがね。」

「なるほど。ゾディアックはこちらでやりましょう。「みずなぎ」と一緒に降ろせば時間が節約できる。」

「助かります。船長。それじゃ私は後部へ行きますので。」

「はい。ご苦労様です。「みずなぎ」は野瀬さん?」

「ええ。一号艇です。経験じゃ彼の上に出る人はいませんので。」

「そういうことでしょうね。それでは気をつけて。」

「みずなぎ」の発進準備作業が行われている、後部甲板に降りた吉村は、艇長の野瀬を探した。

「野瀬さん、すいませんね、大変な仕事お願いしちゃって。」

「まあ、あんたと仕事する限り毎度の事とあきらめてるから、気にもならんよ。」と野瀬は笑い飛ばした。

「ところで、吉村さん、その調べる対象の予測すらできんのかね。」

長野君から聴いた限りでは、随分とおかしなものみたいだが。」

「ええ。どうにも判らないんですよ。まあ、それで野瀬御大に白羽の矢ということなんですがね。」

「おい、その御大は勘弁してくれよな。まるで年寄りみたいじゃないか。ところで、具体的にはどういう調査するんだね。」

「早い話、上じゃ何も判らんから、野瀬さんに丸投げするつもりなんですがね。海洋学の方から多分、望月君と一緒に行く事になると思いますんで、話し合つてうまくお願いしますよ。結果に文句は付けさせませんから。」

「なんとまあ・・・それじゃ、搭載ポッドの選定もこっちでやるって事かいな。」

「早い話、そういうことになります。」

「みずなぎ」はその外部、艇底部と上部に計4カ所の外部観測装置集合体搭載ポイントが設けられていた。そこへは各種観測機器を搭載できる4種類のコンフォーマル整形された搭載コンテナ、別名「ポッド」が用意されていた。各観測班は、その目的に必要な機器を「ポッド」に搭載し、搭載ポイントへ接続することで、艇内の観測員コンソールヘリアルタイムで観測データが送られ、記録、転送などを「みずなぎ」搭載のメインコンピューターにより処理する事が可能だった。データ転送は「ポッド」自体に用意されたマルチ入力光データ変換装置、アナログ/デジタルで取り込んだ信号を高速光伝送信号に変換する装置を介した後、無接触光ファイバーコネクタを経由して艇内に送られるため、「ポッド」に内蔵できる電源を使用する限り、水圧による制限は「みずなぎ」の潜入深度限界と同じであった。もっとも、観測機器によつては、水中に露出させる必要があるため、そのような装置では、それ自体の水圧限界に束縛されることになったが、観測と言う作業を考えれば許容できる制限だった。

異常（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

異常2（前書き）

少し短いですが第10話です。

異常2

野瀬は作業中の「みずなぎ」に近寄ると、観測窓を叩いて内部のコンソールで作業中の津田を呼び出した。

「なんでしよう、艇長。あ、吉村さん、どうも。」

「ポッドの選択はこっちでやってくれって事だ。おまえさんに任せる。以上だ。」

「あ、あの、任せるっても、私ら観測要員じゃないんで、持つてるのは水中高速データー通信ポッドだけですけど・・・」

「あー、それ搭載しといてくれ。後は海洋学の望月君が来るらしいから、彼と相談して巧くやってくれ。」

「ふえー、また仕事が増えるんですかぁ・・・今回は海が深いからうちら出番なしって聴いてたのに・・・」

「恨むなら吉村さんを恨め。それじゃ頼んだぞ。操縦特性の設定はいつも通りでいいから、少し手が抜けるだろ。優しい艇長を持った事に感謝するんだぞ。」

「手が抜けるって、それでなくてもややっこしいんですけど・・・」

「ほら、あと30分で着水作業だからな。しっかり働け。」

「ほんと、人使いが荒いんだから、もう。えーえー、判りました、やりますよ、やればいいんですよ。艇長こそ着水に遅れないで下さいよ。」

このコンビの準備作業は毎度のこと、爆笑漫才顔負けのやりとりの連続だったが、「みこもと」船内、いや海洋調査機構内でもっとも経験と信頼がおけるコンビだった。二人とも「みずなぎ」の開発段階から関わっており、特に津田は「みずなぎ」の制御部に関しては設計者よりも詳しいと言われていた。

30分後、「みずなぎ」は着水し、すぐに潜航に移った。問題のポッドは海洋学から青緑レーザー海水物性観測ポッドが搭載された。

これはその測定の都合から機器露出型だったが、耐水圧は「みずなぎ」本体より大きかった。

吉村は「みずなぎ」の発進を最後まで見送ったが、なぜかあまり樂觀的になれない自分を発見して驚いていた。

異常2（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちします。

分析（前書き）

第11話です。前節が短かったので、同時投稿します。
ここから時間が現在時に戻ります。

分析

浮上に成功した「みずなぎ」一号艇は、ボンベに最後に残った燃料を使って、ネガチブタンクを排水し、いまや水面から90cmの高さに露頂していた。

上部ハッチから頭だけ出した津田は緊急用VHFウオーキートークで母船と連絡を付けようとしていた。

「みこもと1、みこもと1、こちら、みずなぎ1、感度ありますか。」

「みずなぎ1、こちらみこもと3、浮上したのか？」

以外と強力な信号に驚いた津田は、水平線を見渡した。艇首から右舷30度ほどの方位、水平線上に黒いものが見え隠れしていた。

「みこもと3、ゾディアックですか？」

「その通り。こちらからはそちらが見えない。方位をくれ。どうぞ。」

腕に付けた腕時計型コンパスを瞬時に読み取り、磁方位を計算した津田は、

「こちらからは、そちらが見える。そちらからの方位240度方向、距離は概ね3海里ほどと思う。どうぞ。」

「了解、直ちにそちらに向かう。待機願う。」

「みずなぎ1了解。待機します。」

ほどなく、白波を蹴立ててこちらへ向かうゾディアックが見えて来た。ゾディアックでもこちらを視認したらしく、若干進路を変更して真っすぐ向かってくるようだった。

「艇長、ゾディアックが来ます。すでにこちらを視認したようです。」

「おー、そうか。そっぴや着水時に一緒にゾディアックを降ろしたが、あれか。」

「そのようですね。運用課の先読みに今回は助けられましたね。」

「そうだな。後で船長に礼をしなくちゃな。」

ほどなくゾディアックが接舷し、ウエットスーツを着た回収要員が飛び込んで双方をロープで繋いだ。安全のために「みずなぎ」の乗員は三名ともゾディアックに移り、ハッチを水密にして曳航する事になった。すでに母船へはゾディアックから連絡が取れており、全速力でこちらへ向かっていた。

「いったい、何が起きたんだい、野瀬さん。」

母船に戻った「みずなぎ」一号艇のメンバーは、食事と30分の休憩を与えられた後、観測班会議室での状況説明に呼び出された。運用課からは船長、観測班は吉村、二人の長と、今後の解析に必要と思われるメンバーが集合した会議室で最初に吉村が口を開いた。

「私の方からは起きた事実だけです。青緑レーザーの調整中、海水の異常を見つけて、その確認中に突然あの怪物が凄く早さで動き、前後端で艇を挟んだ。その瞬間、ピカ、ドカーン、電源が落ちて艇内が真っ暗になった。それだけです。詳しい現象の説明は津田君、望月君の方が私より適任でしょう。」

津田、望月もそれに続き、津田は電撃について、望月は海水の異常について、それぞれ説明を行ったが、まったく想定されていなかった現象であり、直後に電源を失った事から定量的な分析が不可能だった事もあり、結局皮相的な分析以上の事はどちらもできなかった。「さてと、事情は判った。これまでの状況説明から、専門的立場で何か判るかね。生物学的見地としてはどうかね、村木君。」

「データが少なすぎて難しいですが、判っている事だけを羅列してみますと、まず、巨大であること、ELによると思われる発光をしている事、この2点と電撃を受けた事を合わせると、相当に高い発電能力を持つようですね。生体発電は普通それ専門の細胞組織が関与しているのですが、ビデオで見る限り、そのような組織は見当たらない。だいたいにおいて、細胞組織があるのかさえ判らないわけ、この辺はまったく謎です。今回の件でサンプルの採取は危険

が伴う事が判ったわけですし、別の手法で解明するしか方法は無いようですね。生物学的には全くの新種、それも今世紀最大規模の発見になると思いますが。」

「生態学の立場からはどうですか、チャンさん。」

「問題は何を食べてるかです。こんな大きな体を維持するのは大変です。食物連鎖のどこに位置するの。いつそ何も食べてくれない方が説明がやさしいです。どのニッチに当てはめるのか、発電能力はいったい何のためか。自分が直接攻撃されたわけではないのに、攻撃行動を取った意味は。本当に謎だらけ。大変興味深いです。」

「吉村さん、ちょっとよろしいですか。」電磁気学の藤村が発言を求めた。

「どうぞ。」

「あくまでも電氣的な見地ですが、海水中でどうやってこんな電圧、電流を扱える絶縁性を保持しているのでしょうか？電撃を受けたという事は、それまでは絶縁状態にあり、艇に触れた瞬間にその絶縁性を喪失した、という事になります。そんな都合の良い絶縁物はこれまで知られていません。強いて言えば半導体でしょうが、生体が半導体になったという事実を知りません。多分、物理的、電氣的物性はこれまで知られていないものかも知れません。宇宙からやってきた生物と断定したいくらいです。」

「私も物理屋のはしくれだから、君の気持ちは判る。しかし、宇宙生物というのは少し棚上げしておきましょう。船長、船の安全の立場から何かありますでしょうか？」

「さきほど藤村さんに予測してもらったんだが、同じレベルの電撃を受けた場合、本船でも何か障害が発生する可能性があるようだ。ただし、「みずなぎ」と異なり、本船の場合全体が金属なゆえ、局部電位は「みずなぎ」ほどは上昇しないらしい。今、地絡保護付き電流制限器と継電器の系統を調べてる。当座、安全性は低下するが、地絡保護無しのものにメインの線路だけでも交換を急がせている。物理的な力は大した事なさそうなのは「みずなぎ」を見れば判るし、

表層まで上がれるのかも不明だから、当面は電源喪失の事態に陥らない対策だけで行こうと思っている。以上です。」

「了解しました。さて、この怪物と海水異常が今回のミッション目的と関連するかなんだが・・・情報が少なすぎて分析が難しいのは判るが、何か意見はないだろうか。」

最初に口を開いたのは津田だった。

「我々が受けた電撃で原子力潜水艦がどうなるものか、その情報が必要だと思います。米海軍の技術の連中に聴いて見たいのです。」

「あー、それはもつともな考えだな。津田君、ちょっと呼んでもらえるかな。あー頼むからあの二人は別にしてくれってな。」

米軍側も今回の顛末には興味があったらしく、潜水艦技術を担任する士官がすぐに顔を出した。転送された生物のビデオと、これまでの顛末を説明された士官はさすがに驚いたようだった。

「ところで、通訳が必要ならチャンさん、お願いします。さて、どうだろう、このような電撃で原子力潜水艦が何か被害を受けるだろうか。」

士官の答えはチャンを通じてだった。話が専門的になるため、片言の日本語では表現しきれないためだった。

「一般的な原子力潜水艦であれば、問題ないでしょう。原子力潜水艦はその原理上、非常に大きな電力の発電を常時行いますから、基準電位保持にはかなり気を使って建造されます。しかし、今回の新型では大深度運用のため複合素材を多用しているという噂です。正確な情報は我々も持ち合わせていません。噂レベルの話では、形状保持に複合素材を、耐圧船殻にはチタン内張をしたCFRPが使用されていると言われています。この場合「みずなぎ」と類似した現象が発生するのを否定できません。」

その時だった。大声で

「Shut up! No more!」

と叫ぶ声がした。例の二人のうち一人が叫んでいた。もう一人が吉

村に詰め寄り、早口に何事がまくしたてた。チャンがそれを通訳したが、もちろん通訳できない4文字言葉は省略してだった。

「なぜ、我々に黙って会合を開いた。資格の無いものが機密情報に触れる事は許されない。即座に解散せよ。」

これを聴いた吉村は、怒るより先に呆れ返った。ボランティアで搜索に参加している他国船舶に乗り込んで、機密保持やら解散命令やら、いったい何を考えているんだ？というのが感想だった。

「船長、すみませんが、保安要員を呼んでもらえませんか？搜索活動を妨害するつもりらしいんで、拘束する事を具申します。」吉村は真顔で船長にそう提案した。

「そうですね。事を荒立てるのは本意ではありませんが、これまでも、不審な動きが多すぎました。拘束して米側と話し合うのが筋でしょうね。保安要員、船長命令。この二人を拘束しろ。自室に拘束、以後命あるまで2名の保安要員を24時間立たせるように。かれ。」

「みこもと」乗り組みの保安要員は常時は4名で接岸時の保安を担当するだけであつたが、今回は事情が事情だっただけに倍の8名に増員していた。どの保安要員も警視庁警備課からの出向で、逮捕術をマスターしている猛者だった。二人は初め抵抗したが、その道の専門家4名が相手では相手が悪すぎた。すぐに取り押さえられ、自室に軟禁される事になった。

この騒ぎで会合は一旦解散、後刻検討の上、再集合することになった。その再集合までの間、自室に引き取っていた吉村に米海軍派遣の残りの6名が面会を求めた。

「吉村サン、我々は抗議シマス。」

「あー、判った、判った。抗議は聴いた。で、本題はなんだ。」

「書類ニシテオイテクダサイネ。」

「どこで覚えたんだ、そんなお役所日本語。ったく・・・」

「英語デイデスネ。」

以下便宜上英語を日本語に訳した形で進めるが、

「一応抗議しておかないと、後でいろいろとうるさいので・・・」
「つましきものは、日米変わらんなあ・・・ご苦労なこった。まず、連中は何者だ。」

「あれは、国家安全保障省の連中です。大使館が司令部にこり押しして、オブザーバーの資格で参加しました。海軍の制服は便宜上です。彼らの兵役経歴は陸軍ではありません。指揮権要求した事を知って、彼らにはあくまでもオブザーバーである旨注意したのですが、無駄だったようです。」

「ああ、その後もサーバーへの無制限アクセス要求やら、衛星通信の占有要求やら、なんかメチャクチャな要求をしていたぞ。」

「困ったもんです。遭難がテロ行為の可能性有りとかの理屈を付けて、何にでも首を突っ込んでくる。」

「こちらでは、一応、横須賀と協議して取り扱いを決めようかと思っっているんだが、君たちの意見はどうかね。」

「多分、司令部でも持て余すと思います。今や国家安全保障省たるや飛ぶ鳥を落とす勢いですからね。キャプテン滝川に任せたらいかか・・・」

「なるほど。しかし、君らは日本人より日本的思考じゃないか。」

「郷に入っては郷に従え。」

「負けた・・・」

分析（後書き）

ここから現時間です。

国家安全保障省の件はある程度実体験だったりします。
ご意見感想をお待ちします。

探査（前書き）

第12話です。「ドリイ」という深海探査ロボットが登場します。

探査

例の二人の処遇を衛星電話で滝川に依頼した吉村は、再度招集された対策会に顔を出した。今回は始めから米海軍のメンバーも参加していた。

「とんだ邪魔が入ったがミーティングを再会する。これまでに判っているのは、遭難した潜水艦とこの生物に関連があるかもしれない、という処までだが、ここまでで何か質問はあるか？無いようなら、もう少し米海軍の方から説明を頂きたい。チャンさんお願いします。」

「ずっと米海軍士官たちと話し合っていたチャンが彼らに代わって説明をおこなった。」

「米海軍としての意見は、遭難した潜水艦の細部仕様は不明であるが、これまでの非公式情報から推して影響を受けた可能性がありまゝす。我々の任務がこの艦の救難であるかぎり、非公式な情報といえど無視はできない。これが第7艦隊司令部と連絡を取った後の公式見解と考えて頂きたい、とのことです。もう一点、ソナー信号の異常が見られる点から、最後に判明している位置までの逆シミュレーションをしたい。ついては、本船メインコンピューターの使用を許可されたい。さらに津田さん、長野さんに協力を願いたい。公式な要請と受け取ってもらって構わないという事です。以上です。」

「了解した。観測用メインコンピューターについては私の権限で無制限な使用を許可します。津田君、長野君、それからソナー担当として山崎君も参加してくれ。それと、時間は無いと思ってくれ。細部に涉つての解析は必要ない。蓋然性が証明できた時点で、異常海域の捜索に入る。それではかかってくれたまえ。」

「こういう状況での吉村の指揮能力は群を抜いていた。普段の「オジさん」からは想像もできない状況把握能力と決断力を垣間見せていた。」

分析とシミュレーションは1時間もせずに終わった。シミュレーションすら必要なかった。横須賀経由で入手した次回位置通報点の座標が滝川から送られて来たことで、単純に海図上に線を引く作業だけでも判る蓋然性、最終位置判明点から次回位置通報点まで引いた直線上に現在位置があつたからだつた。

「みこもと」船上では遠隔観測担当の田中が「DORII」の準備に追われていた。

「田中君、もう発進できそうか？」

「あ、吉村さん。あと15分くらいです。今回はケーブルを引くんで、操縦特性の設定が厄介でして。」

「『みずなぎ』の状況を考えれば、いくら利口な「DORII」とはいえ、自律制御はちと無理がある。音響モレーザーもため、となればケーブル引くしか無いからなあ。」

「はあ、それは判つてます。別にケーブル引いた事がないわけじゃないかもしれませんが、その辺に問題はありません。問題なのは「DORII」自身が進歩しちゃって、昔のデータじゃ不足がある事でして……。」

「あー、なるほどね。こいつは頭がいいからなあ。ケーブル引いたのはほんの初期だから、今のこいつにしてみれば、高校生に小学一年レベルの計算で行動を規定しろ、っていつてるようなもんか……。」

「そういうことです。足りない分は人間が補うしか無いけれど、最近じゃこいつ僕より頭が良いみたいで……。」

「頭の良い恋人だと思えばいいんじゃないか？便利だぞ、そういうのって。」

「時間が無くてまだ本物の恋人も居ないのに、そりゃ酷なお言葉……。」

「まあ、腐らずにしつかり準備しておくれ。」

「了解……グスン。」

まったくはた迷惑な吉村ではあつたが、準備は怠り無く進み、「D

ORII」は海中深くその姿を沈めた。

吉村が観測室に戻ってみると、すでに操作担当の田中、村上だけでなく、観測メンバーのほとんどが顔を揃えていた。

「田中君、どう、順調？」

「ええ、いままでの処問題はありません。例の生物は極力避けて潜らせますが、向こうが動いたらケーブル引いて機動性が落ちてますから、避けるのは難しいと思いますが・・・」

「ま、そりゃ仕方が無い。ケーブル切り離しても自分で浮上はできるんだろ？」

「はい。それは問題ありません。こちらから切り離しても、不測の事態でケーブルが切れても、自動で浮上します。もし、浮上経路に障害があるようならば、それを避けて浮上も可能なようにプログラムしてあります。」

「200m通過。」

制御担当の村上が緊張を孕んだ声で深度を読み上げた。CCDカメラは動作していたが、照明は落としてあるため、スクリーンは漆黒のままであった。

「400m通過。」

「そろそろ、例の生物が視野に入るんじゃないか。」

緊張を破ったのは生物学の村木だった。

「それじゃカメラを振ってみましょう。照明は無使用。」

画面、かなり遠くに発光が見えた。

「ソナーでの距離は約300m。」

「近づいているのか？」

ソナー映像を今は担当している長野に吉村は聞いた。

「いえ、目立った動きはありません。相変わらず中層流の流れに任せて動いています。」

「ならこちらが上流側だから問題無い。変化があれば即座に警告してくれ。それでは続行。」

「DORII」は水深2000mで搭載されている音響測深儀を動

作させた。その画像は観測室に表示された。

「250mほど下に疑似海底みたいな反応が出てます。非常に微弱。」

音響観測担当の山崎が緊張した声で報告した。

「これが、例のドーム状になった異常部の始まりと考えていいのかな？」

「はい、吉村さん。本船ソナー映像で読み取れる限り、そう考えて良いと思います。」

長野が「DORIE」の音響測深データを取り込みながら答えた。

「長野君、海水のデータをどつかのスクリーンに出してくれるかな？」

「メインスクリーンにオーバーラップさせます。」

海水の塩分濃度、温度などがメインスクリーンの端に表示された。

「現状、それほど異常とは思えんなあ・・・」

「吉村さん、比重を見てください。あの怪物付近では比重が大きくなっていた。」

「長野君比重は出せるの？」

「はい。今出しました。」

明らかに通常の海水よりも比重が大きくなっていた。

「やつぱり。しかし、温度はあまり変化が無いのに比重だけが大きくなるのか？海水物性としてはどうなのかね、望月君。」

「火山性の熱水チムニー付近で重金属が多量に存在する事で比重が大きくなるケースはありますが、透明度に変化があまり無いのが不思議です。普通は濁ると思うんですが・・・それと海水粘度にも変化があると思うのですが、これだけはサンプルを分析しないと・・・」

「諸君、このまま異常水域へ潜入するが問題は無いかな？」

「異常水域での海水比重が不明ですから、一旦異常水域手前で停止して比重測定行う方が良いかと思えます。浮力調整が崩れかねません。」

「その方が安全だろうな。田中君、ではそのタイミングは任せた。」

よろしく頼む。他に何かあるか？」

「生物学的調査が可能ですか。」

「村木君、残念だが今回は無理だ。海水サンプルだけは持ち帰るつもりだから、それで我慢してくれ。本潜水の第一義は遭難潜水艦の発見だ。ほかに意見はないかな？それじゃドリイを異常水域に入れてくれ、田中君。」

「了解」

探査（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちします。

DORII（前書き）

第13話「ドリイ」の活躍です。

DORII

数分後、「DORII」は異常水域に到達していた。それでも徐々に海水比重、密度の変化は連続していたが、この深度を境に不連続面とも言える部分が形成されていた。「DORII」はその深度に一旦停止し、直下にある不連続面下層の海水採取とその分析を開始した。

「うわっ、こりゃ海水ってよりも、ゼリーに近いですよ。粘度が飛躍的に大きくなってます。海水採集プローブが沈んで行かないですよ。」

田中が言った通り、境界面でプローブが止まっているように見えた。「『DORII』は潜入出来ると思うかね。」吉村が聞いた。

「別に物理的な壁があるわけじゃありませんから、時間をかければ潜入するとは思いますが、沈下速度は粘性抵抗で極端に遅くなると思います。粘性抵抗はある程度形状依存しますから、『DORII』のような外部突起物の多い形状では避けようがないですね。」

「何か方法は無いのかね、その、もう少し早く沈める方法だが・・・。」

「これまでも、徐々に海水比重が上がる事で、余分なバラストを取り込んでますから、あまり余裕は残ってません。浮力調整による潜人には限界がありそうです。あとはケーブルが繋がってますから、動力潜入くらいしか・・・。」

「田中君、『DORII』の音響観測装置は下へ延ばせるタイプでしたよね。とりあえず音響観測プローブだけでも下げて見て、不連続面以下の音響特性がどうなってるのか調べて見たらどうでしょう。その結果次第では『DORII』を潜入させる必要がないかもしれないし・・・。」と望月が提案した。

「お、それやってみる価値がありそうだ。田中君、可能かね。」

「はい。出来ると思います。ただし、サイドスキャンのような精度

はありませんが。」

「それ、こちらにもメリットありそうですよ。田中君今の状況で、プローブの3次元位置はどのくらいの精度で判るの？」ソナー解析を行っている長野が聞いた。

「そうですね、今の状況ならcm単位で判ると思います。でもそれで何か判るんですか？」

「うん、搭載ソナーの問題はこの異常水域の屈折率が判らなかった事なんだ。でも異常水域の中、正確に判明している位置に発音体があれば、屈折率が正確にわかるでしょう。ならば、後はその分補正すれば、それなりの精度の海底地形が得られる。ま、これ以下に不連続面が無いと仮定しての話だけれど、ともかく『DORII』からプローブ下ろせば、その辺も判るわけだし、かなり有用ですよ、このアイディア。」

「よし、判った。田中君、『DORII』を不連続境界面で潜入停止、音響プローブを下ろしてくれませんか。」

田中は準備を完了すると同時にプローブを繰り出し所定の位置に固定する操作を開始した。抵抗を低く抑えた形状であるにも関わらず、プローブはなかなか所定の位置に到達しなかった。それでも、「DORII」そのものを沈めるよりは遥かに短い時間でしかなかったが。

「所定深度です。発振開始します。」田中は音響プローブの発音体を稼働させ、海底に向かって超音波探信を開始した。それと同時に長野は音響プローブからの直接波を「みこもと」搭載の受聴装置で受信、屈折率の測定を開始した。

「DORII」の音響プローブによる探查結果は明るいものだった。現在の不連続面以下に新たな不連続面は存在しない事をそのデータは示していた。粘度は非常に高いが、これより以下では密度、比重等の大きな変化は無いようであった。この結果を受け、これまでに観測されたサイドスキャンソナーのデータを観測された屈折率

に基づいて再解析した結果、本来の精度ではないものの一応理解可能な形で海底地形が判明した。そして、その新たに作成された3次元海底図には非常に興味深いものが映し出されていた。

「吉村さん、ちょっとこれ、見てもらえますか？今、そっちのスクリーンに出します。」

長野は吉村を呼ぶと、それまで作業を行っていたスクリーンから、メインの大スクリーンに画像を切り替えた。

「なんか見つけたのか？」そう言いながら、吉村が大スクリーンを見ると、そこにはサイドスキャン特有の線図で構成された海底地形が表示されていた。

「今出しているのは、3000mから俯瞰した、異常水域中央部の再構成海底地形です。画面丁度中央右寄りに他のピークよりも横長のピークが見えます。これ非常に怪しい。現在拡大再構成中ですが、長さから言って潜水艦に非常に近いです。」

「長野君、すると、このピークが着底した潜水艦ではないか、という事なのか？」

「はい、その通りです。おおむねこの海域の海底は平坦で、顕著な海底の突起物はあまり見られません。ですから、この再構成図に現れている海底地形の大半は異常水域の境界面の揺れ、内部波などによるものですが、から来る屈折率誤差に起因するものと考えられます。だとすれば、横長の海底地形は実際の地形を表している可能性が強い。そういうことになります。」

「なるほど。田中君、『DORII』から確認する方法はないかな？」

「『DORII』をその地形らしきものの真上に移動して、今回と同じ、音響プローブで確認するのが一番早そうに思います。少しずつ移動してみればもつとはつきりしますが、プローブを下ろしたまま移動するのは海水の粘度を考えるとちょっとどうかと・・・」

「判った。しかし、他に方法が無いなら最悪『DORII』そのものを近くまで下ろす事も考えておかないとだめだろう。ともかく直

上と思われる位置まで『DORII』を移動させよう。田中君、始めてくれ。」

「了解。」

「DORII」の移動そのものは簡単だった。音響プローブを巻き上げ、現在位置から1／4海里ほどの距離を水平移動するだけに過ぎなかった。問題が起きたのはその直後だった。

「吉村主任、乱流があるようです。『DORII』の制御がうまくゆきません。」

リアルタイム映像のスクリーンもそれを裏付けるようにマニピュレーターが振動している映像を映し出していた。

DORII（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

DORII 2 (前書き)

第14話です。

DORII 2

「一旦境界面から離れます。このままでは横転する可能性があります。」

そう言うと田中は「DORII」を一気に5mほど上昇させた。

「なんだ、内部波か何かなのか？」

「いえ、上昇乱流のような感じでした。現在境界面の上5mで安定しています。リアルタイムカメラを境界面に向けてみます。」

カメラの映像が映し出したのはチムニーから吹き出す熱水のような陽炎のような映像だった。およそ差し渡し10mにも及ぶかという範囲が陽炎のように擾乱しているのが映像から確認できた。しかし高さはさほどでもなさそうで、境界面と思われるところから、1mほどで擾乱は終わっているように見えた。

「擾乱部にセンサーを下ろします。何か少しは判るかも知れません。」

「ああ、やってみてくれ。」

センサーの表示は上昇流であることを示していた。そして、温度が周囲の海水よりもコンマ数度高い事も同時に。

「吉村主任、これは熱上昇流です。この下に何か熱源があつて、それによって発生した熱上昇流が境界面の擾乱をおこしているようです。」

「うん、そう見えるな。望月君、君はどう見る。」

「確かに熱上昇流と思えます。問題は熱源ですね。この海域にはホットスポットは知られていません。もちろん、調査が未だ進んでいない海域ですから、知られざるそれも無いとは言いませんが、この調査区画前後の区画ではそのような兆候はありませんでしたから、ほとんど点熱源という事になります。それは非常に考えにくい。原潜の原子炉廃熱と考える方がはるかに合理的です。」

「うなづける見解だ。長野君、この擾乱を要素に加えた場合、ここ

に潜水艦が沈んでいる蓋然性はどのくらいになる。」

「ソナーデーターが信頼できませんから、誤差が大きい事を承知願った上で、単純推測演算の結果は78%の蓋然性という結果が出ています。データー誤差による低下を30%と見積もっても50%近い蓋然性を有している事になります。」

「判った。十分調査に値する目標であると判断して良さそうだな。」

それでは、田中君、『DORIE』を動力潜入で境界層以下へ潜入させてくれたまえ。喪失等の最悪の事態についての責任は全て私が持つ。従って慎重かつ大胆に実行してくれ。」

「了解」とだけ田中は答えると、村上にピッチ、ロール軸の安定操作を任せ、『DORIE』を一気に30mほど上昇させた。垂直方向の最大速度である3ノットの速度を稼ぐためだった。慎重に位置決めを行った後、全てのスラスタを上に向け、全出力で『DORIE』を擾乱の中心部に向けて降下させた。熱上昇流の中を降下させるのは、若干でも海水の粘度が低くなっていると思われるからだった。

高粘度域に突入した瞬間、4基のスラスタ全てに一瞬過負荷警報が現れたが、すぐに自律制御がモーターへの電流を制限し、続いて最適化制御を行う事で、安定した推力を持続するように働いたため、姿勢の大きな崩れは無かった。さすがに粘度の高い熱上昇流の中では実質降下速度は1ノット以下に落ち込んだが、それ自体は織り込み済みであった。しかし、高粘度域へ潜入するにつれ、曳いているケーブルの粘性抵抗が増大し、速度がさらに低下すると同時に操縦の自由度も次第に失われはじめた。結局、約800mを降下し、海底に接近した頃にはケーブルは先端の5mほどを除いて、ほとんど自由度を失っていた。

「海底まで25m。フラッドライト点灯します。」

それまで暗くなっていたメインスクリーンが明るくなり、CCDカメラの映像が映し出された。しかし、擾乱による散乱のためか、海底までフラッドライトが届かない様子で、スクリーンには陽炎のよう

な擾乱の様子だけが映し出されるだけだった。

「どうも良く判らん。やはりもつと下がらないとだめなようだな。」

「吉村主任、ケーブルを曳いている限り、この辺が限界です。現在、スラスタフル稼働で、降下速度はほとんどゼロ、前後左右の動きも非常に制限されています。」

「何とかならんかね、田中君。せめて擾乱部分から出る事は出来な
いかな。」

「ケーブルを切り離さない限り無理だと思います。ただし、ケーブルを切り離した場合、スラスタの消費電力から言って、内蔵の電池だけでの持続時間は良くて25分程度になります。現在でもモーターは過電流ぎりぎりのレベルで働いてますから。」

「やはり、切り離さないと無理か。よし、切り離そう。『DORII』の自律能力と学習能力に賭けよう。もともとそういう目的で作られたロボットだ、この程度の異常事態程度、自力で乗り切ってデーターを持ち帰らなけりや、作った意味が無い。」

「しかし、吉村さん、この状況ではまったくデーターのやりとりができません。船上からのコマンドバックアップも無理です。ケーブルを切り離れた瞬間、『DORII』は完全独立で行動する事になります。これまで、一度もそういう状況での試験をしていませんが？」

「田中君、判ってるよ。しかし、『DORII』は君らが手塩にかけたロボットだ。君らが一番彼の能力を知っているんじゃないのか？たしか、シミュレーターでは完全独立運行もやってるはずだと思
ったが？」

「シミュレーターでは確かにやっています。しかし、あくまでも普通の海水での状況で、こんなに異なった環境でのシミュレーションはさすがにやった事ありません。」

「その辺は『DORII』の自律能力と学習能力に期待しよう。田中君、大丈夫、きつと『DORII』はうまくやるよ。」

「判りました。吉村さんがそうおっしゃるなら、完全独立制御に入れてみます。村上、独立制御のプログラムを入力して、ケーブルが繋がっているうちに試験してくれ。俺の方は擾乱域の脱出時間とその後の海底観測時間がどうなるか、シミュレーターを走らせる。制御特性はもう十分にデーターがあるよな。それ、こっちにダンプしてくれ。長野さん、すみません、シミュレーターの方、手を貸して頂けますか。」

「ほい。引き受けた。」

準備は30分ほどで終わった。最大の問題は観測プログラムだった。擾乱域からの脱出時間が計算出来ないため、最も短い観測時間で結果が得られるように設定する必要があった。現在深度で擾乱域を脱出、10m降下して海底をCCDカメラでスキャン、電源容量一杯までそれを行って、バルーンにより浮上という手順が最も妥当と思われるが、電源の残量が不明なため、海底のスキャンは賭けに近い事やバルーンによる浮上が高粘度海水中でも可能かどうか、など未知数の問題を多く抱えていた。

「プログラム完了。脱出、降下、撮影、バルーン放出、の手順です。電源残量が少ない場合は10m降下を省略、25mから一発ストロボでの撮影になります。」

「了解。村上君もいいな。それでは、独立行動モード起動、ケーブルを切り離してくれ。」

「独立行動モード起動完了。すでにケーブルからの制御を離れました。ただいま待機中。ケーブル切り離し後の予測浮上時間は1時間55分後。それではケーブル切り離します。観測プログラム起動、3、2、1ケーブル切り離し。・・・ケーブルモニターでは切り離しは成功です。」

「ご苦労様。とりあえずこれまでのデーターを各自持ち帰って、分析してくれ。特に高粘度海水の素因についての検討が欲しい。望月君よろしく。それでは『DORII』浮上後、もう一度ここへ集合してくれたまえ。以上。」

潜水艦発見（前書き）

第15話です。

潜水艦発見

「DORII」の孤独な戦いは、擾乱域からの脱出行動で始められた。熱上昇流による上向き加速度を相殺した上で、最大の前進力が得られる最適スラスト角を計算、擾乱によるヘッディングの狂いを細かく修正しながら、音響観測で得られた最近の擾乱境界面に向かって移動を開始した。10分後、約5mを移動して、擾乱域から脱出に成功、そのままスラストによる動力沈降に移行したが、海水の粘性抵抗が予測より大きかったため、6m降下した時点で電池残量が10%以下となり、降下を停止、深度維持しながら海底をストロボ撮影、14ショット撮影した時点で電池残量が機能維持最低限に迫ったため、バルーン放出、海面への上昇を確認したあと、バツアップ以外の全電源を遮断、海面までの眠りについた。

海面までの上昇はおおむね無事といっても良かった。高粘度海水の部分ではバルーンの抵抗が上昇速度を減殺し、非常にゆっくりとした浮上速度だったが、高粘度域を抜けてからは正常な浮上速度に復帰した。途中、例の怪物に接触しそうな状況もあったが、なぜか怪物の方が避けるように収縮し、事なきを得た。しかし、そのようなスペクタクルがあった事を、「DORII」自身も、船上で浮上を待つ吉村たちも知る術は無かった。

海面に浮上した「DORII」は空気を取り込む事で機能する、空気電池が動作することで目覚めた。最低限の機能しか覚醒させなかったが、内蔵されているアンテナを延ばし、ビーコンを発信する程度の作業には十分すぎるほどだった。不慮の事故による沈下を防ぐための浮力体が2酸化炭素ガスによって膨張し、アンテナ基部が水面上に露出すると、直ちにビーコンを発信し始めた。

「ビーコン受信、『DORII』浮上しました。」

先刻から「DORII」のビーコン受信装置にかじりついていた田中が叫んだ。今にも泣き出しそうに顔をくしゃくしゃにしている。

「おお、無事だったか。」吉村もさすがに安堵の表情を浮かべていた。

「吉村さん、それじゃ早速回収班を向かわせます。」

「ありがとうございます、船長。宜しく願います。」

レーダーで位置を特定した後、回収班は「DORII」浮上点に向かった。重い「DORII」をゾディアックに回収するのは無理なため、2隻のゾディアックで曳航して「みもと」の揚収ベイに引き入れ、走行クレーンでデッキ上に引き上げられた。

デッキへの収納をじりじりしながら待っていた田中は、固縛装置の締め付けを待たずに「DORII」によじ上り、耐圧構造の外部電源接続缶を開き、外部電源を接続した。さらに、非接触式データ端末接続点にラップトップを接続、「DORII」の覚醒作業に入った。

「いい子だから、無事に起きてくれ。」祈るような言葉をつぶやきながら田中はスリープモードの「DORII」AIプロセッサを覚醒させた。

「DORII」の覚醒に問題はなかった。何事もなかったかのように、覚醒後のルーチン点検結果を田中が接続したラップトップに吐き出し、ワイアレス端末を起動して、待機モードに入った。田中はTCP/IP接続が確立したのを確認して、制御室に戻り、画像データの回収に入った。

14コマ撮影された画像は圧縮されずにビットデータの形でメモリーに取り込まれていた。たった14コマにも関わらず、300Mbを超えるデータ転送はUWBを使った高速無線伝送でもそれなりに時間のかかる作業だったが、解像度とのバスターなら価値があった。

「吉村主任、ビンゴです。「DORII」の撮影した画像に潜水艦の一部らしきものが写ってます。」

「DORII」浮上から2時間後、画像解析を行っていた田中が、制御室に現れた。

「うん、良くやった。早速、米海軍の連中に見てもらおう。」
「はい。とりあえず、制御室の大スクリーンに出せるよう、データ
ー転送はすでに行っています。ただし、一次解析ですから、あまり
詳細な部分までは判りません。詳細な解析はすでに長野さんが始め
ています。」

14コマの画像のうち、直感的に何かの物体が写っていると判るのは6コマあった。吉村に呼び出された例の二人を除く米海軍オブザーバーたちは、一次処理されただけの、その画像を見ただけで、それが潜水艦の一部であることを判別、確認した。しかし、実際にその艦を見ていない彼らにそれ以上の事を期待するのは無理だった。
「吉村主任、解析結果が出ました。ご覧願えますか。」長野からそう連絡があつたのは深海探査艇「かいえん」艇長、長崎と捜索法についての検討を行っていた時だった。

深海探査艇「かいえん」は「しんかい6500」で培われた日本の深海探査艇技術を究極のレベルまで発展させた結晶とも言えるものだった。主要な要目は、

全長	13 m
全幅	1.8 m
全高	3.1 m
最大潜入深度	1万3000 m
安全潜入深度	1万900 m
最大前進速度	3.5 Kt
安全潜入速度	110 m 毎分
動力装置	純水封入型高効率交流水中電動機 4基 軸出力合計 8.4 kW
推進装置	全周回転式可変ピッチ・ダクテッド・プロペラ 4基
電力装置	リチウム銀イオン複合型蓄電池集積体 2基 96 V / 4500 Ah

同	リチウム触媒燃料改質型燃料電池集積体	2基	出力6 kW
同	高効率交流インバーター	1基	出力12KVA
観測装置	16関節AI制御マニピュレーター	2基	
同	高解像度カラーCCDビデオカメラ	3基	
同	2kW フラッドライト	3基	
青緑レーザー／音響複合型多目的水中データー通信装置	一式		
その他観測装置は計4カ所のベイにミッション別に搭載。			
潜行可能時間	深度1万mにおいて70分		

というものであったが、表に現れない部分に用いられた新技術やノウハウはまさに最先端技術の結晶と言えるものだった。例えば、1万メートルの深海の水圧に耐える浮力体や4基の推進機を操縦者の意思に従って常に最適化するAI技術など、深海底での安全性と機動力を高いレベルで統合するために用いられた高度な技術により、1万メートルの水深でも100メートルでのそれと同じ操作性を保つ事に成功していた。

潜水艦発見（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

接触（前書き）

第16話です。明日以降週末以外、時間が取れなくなるかも知れませんが。更新が遅れるかもしれませんので、先にお断り致して起きません。申し訳ありません。それでは続きをどうぞ。

接触

「お、早いな。すぐ上がる。それじゃ長崎さん、後よろしくお願いします。」

吉村が観測室に上がるのを待つて。長野はメインスクリーンに2次解析の終了した6枚の映像を分割表示させた。

「最初の3枚には規則的に交差する線が写っています。米海軍オブザーバーによれば、遮音タイルの継ぎ目ではないか、という事です。また5枚目の写真を見てください。はっきりしませんが、何か構造物のように見えます。コントラストを強調し、輪郭線だけを抜き出したものがこれです」長野は5枚目の写真を拡大し、それに輪郭線を重ねた。

声を上げたのは米海軍の連中だった。チャンが同時通訳をする。

「うわ、これ、非公式に出た想像図のセイルそのものじゃないか。」

二世代ほど前のロシア潜水艦のそれに似た、流線型のセイルを斜め後ろから写したらこう写るだろう、という形がそこには現れていた。

「では、最後に決定的と思われる写真です。」

長野が表示した写真は最初の6枚とは違うものだった。

「これは番号で言えば12枚目になります。よく見てもらうと判りますが、中央左下に何か黄色いものが小さく見えます。拡大したものがこれです。」

黄色のしみのような部分を拡大したものがスクリーンに映し出されると、観測室に集合した面々からどよめきが起きた。それは、黄色の円の中に書かれた赤い文字だった。拡大しているため、文字の輪郭がぼやけ、判読は難しいが、それが何かの注意書きであろうことは、誰の目にも明らかだった。

「判った。長野君ご苦労さんでした。チャンさん、米海軍のメンバーもこれに疑問は無いと思いますか？」

「はい。彼らももつ間違いない、と言っています。至急、『ニミツ

ッ」に連絡して、この海域に艦艇を集結させたいそうです。」

「了解した。どれでも可能な手段で連絡してもらってかまわないと伝えてください。ただし、『かいえん』を使う場合の指揮権は譲らないと伝えてください。その他要望があればできる限りの協力は惜しみません。」

そっけないながら、ブリッジ直通電話で船長を呼び出した。

「吉村さん、写真はどうでした。」

「船長、たびたびすみません。米軍の連中が通信機を使用したいそうです。どれでも彼らの希望するものを使わせてやっていただけますか。写真は決定的でした。」

「そりゃ、大変だ・・・通信機は問題ないです。短波でもインマルでも好きなものを使って結構です。」

「すみません。すぐに行かせます。」

吉村の言葉が終わらないうちに、二人の米海軍オブザーバーは駆け足でブリッジに向かった。

「さてと、米軍はこれで良いとして、問題は『かいえん』を潜らせて何をするのかだが・・・」

「基本的に言えば、生存者の確認、生存者が確認できれば通信の確保、この二つが最優先だろうな。救助の具体的手段は状況が把握できてから、ということだろう。」

潜行準備作業をペアの一の瀬に任せて、観測室に顔を出していた「かいえん」艇長の長崎が自らの作業の優先順位の確認も兼ねて発言した。

「しかし、吉村さん、この潜水艦が我々が遭遇したのと同じ状況だとしたら、一般的な通信手段は全滅、ってこともありえますよ。」

「ああ、津田君の言う通りだろうな。さりとて、3kmの海底で、スパンで船体を叩くわけにもゆかん。頭の痛い状況だな、こりゃ。」

「いや、そのスパンで叩くつての、できるかも知れんぞ。誰か艇まで行って、一の瀬を呼んで来てくれんかな。」

長崎に呼ばれた一の瀬は、自分がなんて呼ばれたのか判らないまま

観測室に現れた。

「おい、一の瀬、お前、マニピュレーターでサンバのリズム叩けるって自慢してたよなあ。それ、水深3kmでもできるか？」

「い、いきなり何ですか、長崎さん。あれは例えの話ですよ。まあ、出来ないって訳でもないですけど・・・そ、その3kmって何の話です？」

「いやな、なんで『かいえん』が潜るか判ってるだろ。で、多分、他の通信手段は死んでるだろうから、船体をぶん殴って、生存者の確認をしようってわけだ。できるよな？」

「ああ、そういう事ですか。水深3千で、しつかり音が伝わるほど船体を叩こうってなら、かなり重いものでないとダメですから、サンバのリズムは無理だと・・・」

「バカ、通信できりゃ良いんだから、サンバのリズムは忘れる。ともかく、船体を何か重いものでぶん殴るのは可能だよな。」

「ああ、そりゃ可能です。『かいえん』のマニピュレーターは空気中でも20Kg程度の重量を扱えますから、水中ならそれで船体叩くのはできますよ。」

「おし、ほんじゃ、工具バスケットに大モンキー突っ込んで。それでぶっ叩く。」

「ハンマーの方が良いんじゃない？」

「馬鹿やろ、潜水艦殴るのはモンキーって決まってるんだ。おまい、映画も見えてないのかよ。」

「・・・・・・・・」

「まあ、通信手段は確保できたわけだが・・・・・・・・」吉村が吹き出しそうになるのをこらえながら先を続けた。

「さて、高粘度海域だが、ちょうどいい、長崎さんどう思います。『かいえん』は潜入できると思いますか。」

「そりゃ、『DORII』が行けたんだから、『かいえん』だつて行けるだろ。それに『DORII』は上昇流の中を下ったが、今度の高粘度水域の辺縁を目的深度まで下って、横移動で行って見よう

と思う。高粘度域に入ったところで、浮力調整さえ決まれば、あとは横移動のエネルギーだけだし、浮力調整もこっちは『DORII』より大きいから、何とかなると思う。距離的には近いしな。」

「ま、長崎さんがそういうなら、お任せします。ところで、長野君、『かいえん』との通信はどうするのかね。」

「ええ、青緑レーザーでは自殺行為でしょうから、音響だけになりますが、それだと不連続面を越えられない。で、考えたのですが、『DORII』が曳いたケーブルがありましたよね。あれにトランスデューサーを付けて不連続面の下へ下ろしたらどうかと。『DORII』のときの音響観測では、内部に別の不連続面は無いようですから、データは無理でも、音声通信は行けるんじゃないかと思うのですが。」

「お、そりゃ良いアイデアだ。早速用意できるかね。」

「あ、すでに準備はしておきました。『金魚』に使っているトランスデューサーの予備がありましたから、それにウエイトを抱かせてできれば不連続面から100m程度は下まで行きたいと・・・」

「なんと、いつもの長野と違って随分手回しが良いじゃないか。それじゃ、先にそれを下ろそう。サイドデッキのクレーンで扱える重さだろ。」

「はい。100Kg程度ですから十分扱えます。巻き上げも『DORII』のラインローラーが空いてますから、それを使います。」

「うん、すぐ掛かってくれ。それじゃ長崎さん、『かいえん』お願いします。準備でき次第、すぐに潜行作業に入っていただいてかまいません。ただし安全だけには十二分に注意をお願いします。」

「了解。一の瀬行くぞ。ほれ。」

長崎はまだ状況が飲み込めていない様子の一の瀬を引き連れ、風を巻いて「かいえん」に向かった。

「さてと、『かいえん』は長崎御大に任せるとして、米軍の方はどうなんだね。チャンさん。」

「現在、『ニミッツ』基幹の第57任務群が集結中です。ただし空

母は航空機運用のため、走り回る必要があるので、こちらには接近しないとのことです。群司令官は『ブルーリッジ』に座乗してこちらに向かいつつあります。早期警戒機と駆逐艦で海域を半径100海里に涉つて閉鎖するそうです。『みこもと』の作業に一切の邪魔はさせない、と司令官自らが命じたそうです。」

「なんとも、ありがたいことで・・・いつでもそうなら感謝もするんだが・・・まあ、皮肉は置いて、本船に通信機材を設置するなら、私の責任で船長に許可をとります。自由に設置してもらつてかまいません。ただし、『かいえん』を運用するとなると、割ける人手は皆無と言つていいので、要員は米軍の方から派遣願いたい。10名程度なら研究員部屋が空いてるんで、そこに受け入れられる。『かいえん』への便乗は第二回潜水以降受け入れます。初回は未知の要素が多すぎる。慣れた二人に道を開いてもらつてからでも遅くないでしょう。」

「米軍側はそれで了解しています。あと、『かいえん』のペイロードについて質問が来てます。どうも第二回潜水以降、何らかの機器を持ち込みたいようです。」

「『かいえん』のペイロードは公表されたものが、掛け値なしの数値です。そのように伝えてください。それから持ち込む機器が爆発物などを含むような場合や、電力の消費が大きい場合などは事前に打ち合わせしたいですね。」

「了解しました。そう伝えます。米海軍からは、現在の進捗状況に大変満足しており、感謝に堪えない、という謝辞を戴いておりますので、ご報告しておきます。」

「ああ、それは素直に受け取っておきましょう。それでは『かいえん』の支援体制に入りましょう。」

接触（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

「かいえん」(前書き)

第17話です。

深海潜水艇「かいえん」が活躍します。

「かいえん」

「かいえん」潜水作業支援のため、「みもと」はダイナミック・ポジショニングに移行し、GPSデータに基づいて、船を地球上の一点に数メートルの誤差で停止させた。デッキでは通信用のトランスデューサーを降ろす作業と、「かいえん」の進水作業が平行して行われているため、戦場のような有様だった。ほぼ潜水艦の直上と考えられる位置の上流側で停止している「みもと」から3kmにも及ぶケーブルを繰り出し、ほぼ潜水艦の直上にトランスデューサーを位置させるには、緻密な計算と勘の高度な統合が必要だった。このような作業に山下船長は最適任だった。長年のサルベージ・ボート勤務が培った経験に勝るものは多くない。

「長野君、位置はどうかね。微調整必要かね。」

「あ、船長、いえ、どんぴしゃりです。このままなら潜水艦のセイルに届きますよ。」

「そりゃ結構。それじゃこのまま続行でいいですね。」

「はい、お願いします。」

一方の「かいえん」は船尾ベイからガントリー・クレーンによって進水していた。電池の節約のため、潜入開始点である、潜水艦位置至近の境界面付近まではゾディアックに曳航されて向かっていた。切り離し式の浮力体と余分のバラストを外部に搭載したため抵抗が増え、曳航はゆっくりしたものにならざるを得なかった。しかし艇の内部では、そののんびりした曳航風景とは裏腹に、忙しく機器チェックを行う男たちがいた。

「艇長、動力系全て正常値です。動作試験良好。」

「おう、了解。通信系、音響、無線、問題なし。現時点ではデータ系も稼働できる。伝送速度9600bpsまではBER許容値以下。あとは潜ってからだな。ん、なんだ、一の瀬、顔色悪いぞ。」

「いえ、なんか船酔いしたみたいで・・・こんなに長く曳航された

のつてあまり無いですから・・・」

「潜入するまでの辛抱だ。ちょっと休め。あと10分くらいのもんだろ。」

「ええ、まあ大丈夫だと・・・ウブツ・・・」

「あーあ、しょうがねえなあ。こんな処で吐くんじゃねえぞ。ハッチから頭出してろ。」

20分後、潜入開始点に到着したときには、ハッチから半身出した、死にかけたマグロが一匹・・・

「一の瀬、潜るぞ。頭引っ込めて、ハッチ閉める。」

「りよ、了解。ウブツ・・・ハッチ閉鎖、潜入用意よし。」

「潜入開始。深度10で浸水チェック。」

「了解、深度10で中性浮力、浸水チェック。」

「深度10、中性浮力よし、浸水なし。」

「潜入続行。1100まで一気に下るぞ。1100で各機能チェック。」

「了解。」

「ん、なんだ、潜入と同時に顔色がよくなってやがる。」

「ああ、やっぱり水中の方が良いなあ。揺れない船つてのは作れないもんですかねえ。」

「つたく、しょうがねえやつだなあ、お前は、ほんとに。」

艇内の騒ぎとは関係なく、「かいえん」は潜入を続けた。

「ただいま1000、中性浮力とします。」

「了解、1100で沈下停止、機能チェック。水の出し入れだけで沈下止めてみせるよ。スラスタは使わんからな。」

「任せてください。1090、1100沈降速度ゼロ。」

「よくやった。電力系チェック。」

「充電97%、燃料電池出力10%、電力系異常なし。」

「スラスタ4基異常なし、推進系チェック。」

「水密チェック異常なし、艇環境は問題ありません。」

「おう、それじゃ通信系チェック。音声は継続して通信ができてる

から省略、データ系で本船と繋いでみてくれ。」

「了解。本船サーバーに接続、異常なし。」

「よし。それじゃ観測系チェック。」

「マニピュレーター動力チェック、動作正常。CCDカメラモニターに出します。フラッドライト点灯。」

「うん、問題ない。それじゃ目的深度まで一気に行くぞ。」

「了解。低光量カメラの映像だけ、モニターに出しておきます。」

「かいえん」は順調に潜入を続け、海底から5mの深度で垂下させておいたテザーが海底に接触、下降速度を相殺するために自動制御になっていた推進装置が動作した。

下降速度がゼロとなった時点でテザーを切り離し、中性浮力に再度調整した「かいえん」は横移動を開始した。

「さーて、高粘度海水域とやらに突っ込むぞ。比重が違うらしいから、浮力調整は気合い入れていけよ。」

「了解。一発で決めてみせますよ。」

「かいえん」は1.5ノットの速度で高粘度海水域に進入した。急激な粘性抵抗の増加でスラスタが一瞬過負荷になったが、即座に自動制御により適切な負荷状態に調整された。浮力調整は問題なかった。海水粘度が高いため、艇は緩慢な動きしか出来なかったからだ。しかし中性浮力とすることもまた難しかった。長崎は動きが緩慢であることから、厳密な中性浮力を求めることなく、前進を開始した。25分後、それはフラッドライトの中に現れた。

「一の瀬、モニター見て見る。」

「は、はい、あ、見つけましたね。」

「おお、見つけたよ。さてと、バスケットのモンキースパナは健在か？」

「すぐ準備します。」

一の瀬は、バスケットのモンキースパナをマニピュレーターで掴み、取り出した。

「それじゃ、後部ハッチ近くに持って行くから叩いて見る。」

長崎は後部ハッチへ接近すると、マニピュレーターの届く距離を保って艇を静止させた。

「ほれ、叩け。」

一の瀬は器用にマニピュレーターを操り、ハッチを叩き始めた。最新型潜水艦だけあって、遮音がしっかりしているため、海中ではあまり大きな音に聞こえない。15〜6回叩いた頃だった。

「艇長、何か聞こえませんか？」

「おう、ちよつと待て、水中マイクを切り替える。」

水中マイクを超音波通信用から、海中音響採取用のものに切り替えると、今度ははっきり聞こえた。

「返信して見る。」

「了解」

相手の音響が止むのをまつて、また叩くと、今度はすぐに返答があった。

長崎と一の瀬は、英文モールスで簡単な質問を叩いた。短点は叩いた後スパナをハッチに押しつける。長音はすぐに離す事で可能だ。しかし、ゆつくりしたモールスなので、あまり複雑な質問はできない。それでもかなりの事が判明した。

それによれば、

潜水艦内は問題ない。独立回路の艦内空気循環系は正常に働いている。

動力は原子炉がスクラムした。現在、再臨界前のルーチン点検中。

配電盤がほとんど全て焼損しているため、遠隔操作ができない。

電力は非常用バッテリーで賄っているが、もうすぐ限界になる。

乗員は負傷者数名の他は無事。空気は原子炉が動けば問題なくなる。動力装置はメインの電動機が焼損したかも知れない。

メインタンクのベント弁が故障している。

現在水中電話を復旧させるべく努力中。

などが判明した。すでに潜水艦近くまで下ろすことに成功していた

「ドリイ」のケーブルに繋がった「金魚」を用いて、この情報を「みこもと」に送ると、米海軍のメンバーは大騒ぎとなった。すでに遭難してから2週間近くが経過しているにもかかわらず、全員が無事という知らせなのだから、無理もない事だった。

「かいえん」は一旦この深度を離れ浮上することとなった。次の潜水には米海軍の要員が同行するためだ。高粘度海水の中をゆっくり浮上した「かいえん」は、不連続面を通過すると、通常の浮上速度で海面に向かった。

「かいえん」(後書き)

多分、日曜日に次の投稿が可能だと思いますが、来週はちょっと本業の都合が判りません。火曜日は確定ですが、それ以外の日がどうなるのか、まだ不明です。すみません。来週1週間、投稿不可になるやもしれません。

宜しく願います。

ご意見ご感想をお待ちしています。

プリオン（前書き）

第18話です。

プリオン

その頃、「みもと」の生物学実験室では、「みずなぎ」の持ち帰ったサンプル海水の分析が進んでいた。

「村木さん、これ見て貰えますか？」

「何か判りましたか、望月さん。」

「ええ、この海水サンプルですが、こりやポタージュ・スープですよ。中はタンパクで一杯です。このまま火を通せば、塩辛いですが美味いかも知れませんよ。」

「つてことは、タンパク分子塩水溶液つて感じですか？なんか醤油か醤醢みたいだな。」

「当然ですが、この溶液に大出力のレーザー通せば、経路のタンパクは熱で変成して白濁するわけです。で、そのタンパクなんですけど、こういうものです。」

望月は電子顕微鏡で海水サンプルを見た映像をモニターに出した。

「ありや、これウイルスですか？」

「いえ、遺伝情報は持つてませんから、プリオンというのが正しいでしょう。それよりも、こちらの結果が面白いですよ。実は電撃の由来を調べるための実験だったのですがね。」

望月はさきほど終了した実験映像をモニターに出した。

「これ、プレパラート上に海水サンプルを置き、両端に約1Vの電圧を掛けた結果です。」

「こりやまた、きれいに整列しましたなあ。」

「ええ、電圧を掛けると、このプリオンみたいなものは、整列します。一種の液晶とも言えますか・・・その上で、画面の右上の表示を見て欲しいんですが、整列前は普通の海水電気伝導度なんですけど、整列した後、急激に伝導度が下がり、逆に起電していることが判りますか？」

画面右上の数字が整列と同時にマイナスになっていた。つまり、こ

のプリオン類似タンパクは、整列すると発電作用がある事を示唆している実験結果だった。

「望月さん、こりゃ、普通の生物学者じゃ手が出ませんよ。分子生物学で扱う分野です。」

「そうだと思います。ともかく、ここで出来ることには限界があります。研究室へ帰って厳密な条件で調べないと本当のことは判らないと思います。」

「僕の方もどうもこのサンプルは集合体として動くように思います。染色剤で着色してサンプルを一般の海水に入れると、凝集するんです。何に反応しているのかまではまだ判りませんが。」

「整列すると起電する事に何か関連がありそうな気がしますね。」

「ともかく、ここでは限られたことしか判りません。今、潜水艦救難に必要なのはどんな刺激に反応して放電するかが優先されると思います。限られたサンプルしか有りませんので、深く追求は出来ませんが、ともかく刺激を与えて見ましょう。」

この実験の結果、このプリオン類似タンパクは、タンパク凝固を発生させる現象、つまり熱に反応して凝集する事が判明し、電位差を与えると整列し起電する事も判った。また、この時、凝集範囲内に導電性の物質が有った場合、そこで発生する電位差により整列が発生し、現在海中にあるような膨大な量では、整列の完成と同時に強烈な起電力が起き、それによって、瞬間的な電撃が発生することも判明した。

このことから潜水艦が電撃を受けた原因が特定できた。つまり原子炉温排水により、凝集が発生、艦外に露出した金属部分による電位差で整列した事で電撃を受けたのである。これが原因ならば、潜水艦は2次冷却水の流量を増やして温度をタンパク凝結温度以下にする事で、このプリオン類似タンパクの凝集行動を引き起こさずに動力を得られる事になる。しかし、これで潜水艦の脱出は可能になるかも知れないが、「みずなぎ」が受けた電撃は説明不可能だった。タンパク凝集体が自律行動を起こしたように見える事は説明できない。

い。

それでも、この実験結果は貴重であることに変わりは無かった。二人は吉村に実験結果を報告した。

「それじゃあ、この海水はスープみたいなもんというわけかい。」

「そういうことになります。ただし、電撃を引き起こせるスープです。」

「なんか物騒なスープだな。あまり食卓では出会いたくないなあ。」

「そんなことより、早く米軍に知らせなくて良いのですか？」

「おお、そうだ。望月君、ちよつと呼んできてくれ。」

米海軍の技術士官はすぐに顔を出した。吉村は実験結果をかいつまんで説明し、温排水についても排出温度を摂氏60度以下、できれば50度以下に保つようにすることで凝集を回避できる事も説明した。実験映像と説明を聞いた米海軍士官は信じられない、という顔をしていたが、「みずなぎ」に加えられた電撃の結果を実際にみているからには、信じるほか無かった。何より、電力さえ復旧すれば、自力で状況を脱出出来る可能性があるのだ。すでに潜水艦乗員の生存は「かいえん」からの連絡で判っていた。しかし、この深度では救出の方法が無いのだ。DSRVは安全潜行深度900m程度、無理しても1200mより深いところでの救出活動は不可能だった。それゆえ、潜水艦が自力で脱出出来る可能性があることは、大きな朗報だった。

ほどなく、「金魚」の複合トランスデューサーと「ドリイ」の制御ケーブルを用いて高粘度海水ドーム下に下ろした簡易音響情報収集装置が、米海軍使用の海中通話装置、今も昔も、変わらず「ガートルード」と呼ばれる装置の発する変調波と思しき信号を捉えた、とシステム担当の長野から連絡があった。

米海軍技術士官が持ち込んでいた「水中通話装置」の送受波端に「ドリイ」制御ケーブルのうち、音響信号伝送用の4本の線を繋ぎ込むと、通話装置のスピーカーから、高域と低域の双方を酷くカット

した（それゆえガートルードと呼ばれる。）音声が届いた。

米海軍士官6名は全員が「ドリー」制御室に集合して、潜水艦との通信の成功を喜んだ。通信によれば、すでに潜水艦はスクラムした原子炉の再起動ルーチンに入っており、数十分で原子炉を臨界状態にできるようであった。米海軍技術士官は、望月と村木の実験結果を潜水艦に知らせ、2次冷却水排水温度を50度以下に保つよう、注意を促した。潜水艦側は、それを了解し、発電開始後、2次冷却水流量を増加させ、熱排水温度を低く抑える対策を検討すると返信してきた。一般に軽水原子炉は出力調整が簡単ではないため、ほぼこの対策以外、有効な対策はないと言う意見で、「みこもと」側も潜水艦側も一致していた。

その他、現在位置の海水粘度が異常である事、その原因が異常なほどに凝集したプリオン類似タンパクによるものであること、などの情報が伝えられ、また、海上には第7艦隊の空母任務群が待機している事、負傷者、疾病者などは、浮上後空母への緊急移送が可能であること、この回線はその他の通信が復旧するまで、24時間体勢でモニターする事などを伝達して、最初の交信は終わった。

異変（前書き）

仕事出発前に時間ができましたので第19話投稿します。
今週末まではどうもインターネット環境はありそうですので、
でき次第投稿しようと思います。
今回は少し長めにしてみました。

異変

交信を終えた数時間後、潜水艦は浮上した。その頃には空母とその護衛を除く、ほとんどの艦艇がソナーで捉えた潜水艦をトレースしており、その浮上点付近に蝟集していた。「みこもと」はその蝟集した艦艇の中心部にあった。潜水艦の動力装置が異常をきたしていたため、タンクブローのみで浮上した事で、必然的に「みこもと」至近に浮上する事になったからであった。

「いや、何とも壮観ですなあ。これだけの米艦艇に囲まれるってのは、あまり有ることじゃないですからね。」

船長の山下はブリッジで潜水艦の浮上を見守っている吉村に言った。「ええ、全く同感ですねえ。ちよつとした観艦式なみの数ですから・

・・」

現在、「みこもと」は事後作業の真つ最中である。使用した潜水艇、観測機器の一次メンテ作業、ケーブル等の巻き取り、などの片付け作業と、生物学的に重要な意味を持つと思われる、高粘度海水および浮遊生物の調査を、主に音響観測機材を使って行っていた。潜水艦はセイルだけを水面に出して「みこもと」から300mほどの処に浮上している。

その時だった。3隻の駆逐艦の後部甲板がにわかに慌たしくなり、数分後、3機のヘリコプターが離艦したのだ。そしてその直後、「みこもと」船橋のVHF通信機から米軍艦艇からの通信が流れ出した。

「こちらは第7艦隊駆逐艦「ステザム」、現在使用中の音響観測装置の即時停止を要請する。」

山下船長がこれに応答した。

「こちらは観測船「みこもと」船長、山下です。要請は了解。差し支えなければ理由をお聞かせ願いたい。」

「こちらは駆逐艦「ステザム」艦長、ダラク中佐。「ニミッツ」搭

載機がこの海域で潜水艦を探知した。現在、当艦を含む3隻が対策担任艦に指定された。貴船のソナー発信が探知の障害になり得るため、停止を要請する。」

「了解した。直ちに発信停止措置を執る。以上。」

「感謝する。「ステザム」通信終わり。」

「吉村さん、聞いたとおりです。一時的なものと思いますが、音響観測の停止をお願いします。」

すでに吉村は音響観測室への電話を繋いでいた。

「黒岩、音響観測即座に中止だ。他国の潜水艦が居るらしい。ああ、そうだ。宜しく頼む。」

1分と掛からず、「みこもと」からの音響発信は停止した。しかし、水中聴音機は生きていた。

船橋で船長と吉村が米艦の慌ただしい動きを見守っていたとき、突然船橋の電話が鳴った。

「はい、ブリッジ。吉村さん、音響観測室からです。」

「すみません、船長。吉村だ、どうした？」

「黒岩です。本船から方位220度方向、えらい騒々しい潜水艦が居ます。距離は「金魚」流さないと判りませんが、音響レベルの変化からいつて接近しています。深さは現在の温度跳躍層より上ですから、250m前後と思います。」

「了解。一応米軍には連絡しておく。」

「船長、方位220度方向に潜水艦発見。距離は不明、深度およそ250m。先ほどの駆逐艦に連絡願います。」

「了解。駆逐艦「ステザム」、こちら「みこもと」オーヴァー」

「こちら「ステザム」何かあったか、「みこもと」」

「こちら「みこもと」船長。本船水中聴音機にて、潜水艦と思われる目標探知。方位本船から220度、距離不明、深度およそ250m。」

「「ステザム」了解。ご協力に感謝する。以上。」

「「みこもと」以上。」

すでに離陸していたヘリが「みこもと」から220度方向へ集まり始めていた。

船橋には米海軍からの派遣士官も登ってきていた。

「吉村サン、どうしました。」

「ああ、「ニミッツ」の搭載機が潜水艦を発見した。「ステザム」以下3隻が対策担任に指定され、動き始めてる。本船水中聴音機でも捕捉した。220度深度250だ。」

「ああ、それで。しかし本船聴音機なかなか優秀デスね。」

「そりゃ、海中生物や海底変動の音を聞けるように作られてるんだ。騒々しい潜水艦なんぞ、それから比べたら、楽隊が来たようなものだ。」

「それじゃワタシの仕事なくなるから、困リマス。」

「別にうちの水中聴音機は隠しては居ないよ。全部市販部品で構成されてるしね。」

その時、また船橋の電話が鳴った。

「ブリッジ。吉村さん、音響観測室からです。」

「船長すみません。吉村だ。何か判ったのか？」

「黒岩です。どうも潜水艦がもう1隻居るようなんです。」

「なんだ、もう1隻つてのは？別の音響が聞こえるって事なのか。」

「ええ、310度方向から別の潜水艦らしき音が聞こえます。」

「もう少し正確に判らんか？」

「固定聴音機じゃこれが精一杯ですね。「金魚」を流せば、もう少し判ると思いますが。」

「パッシブだけなら問題にならんと思うから、出してみるか。」

「了解。山崎を後部に向かわせます。一応そちらから船の方への依頼をお願いします。」

「判った。船長、忙しくて申し訳ありませんが、「金魚」を出したいのですが。」

「ああ、そうくると思ってました。もう作業員は他の作業を終わってますから使ってもらって構いませんよ。こちらからチョッサーに

連絡しておきます。」

「すみません。なんか黒岩がもう1隻潜水艦が居るようだと言っんですよ。」

「ああ、そりゃ本当なら大変だ。作業急がせましょう。」

「お願いします。ジョーブ中佐、艦隊への連絡をお願いできますか。」

「判りました。「みこもと」の探知レベルは思ったより優秀なんで艦隊も助かると思います。」

「それじゃお願いします。私は電話に張り付いて観測室と繋いでおきますから。」

船尾からケーブルに繋がれた「金魚」を下ろす作業は手慣れた作業員総出だった事もあり、あっという間に終了した。

「黒岩、どうだ、何か聞こえるか？」

「ええ、やっぱり潜水艦だと思います。方位311度、距離は余り精度良くないですが、8海里+/-0.5海里、深さ312mです。かなり静かですね、こっちは。」

「判った。中佐、方位311度、距離約8海里、深さ312mに潜水艦らしき音響。」

「了解。」

中佐が艦隊に連絡をすると、先ほど離陸した3機のうちの1機が311度方向に向かった。220度の目標はすでに捕捉しているらしかった。

「中佐、一体どこの潜水艦だろう？」吉村はジョーブ中佐に聞いた。
「220度のは多分、中国でしょう。相当に騒がしいようですから311度のはロシアの新鋭原潜じゃないかと思います。」

「なるほどねえ・・・第7艦隊の艦艇総ざらえだもの、興味はあるだろうわな。しかし、例の潜水艦はもう浮上してるし、動力は動いてないから、潜水艦じゃデーターは取れませんがな。ん？さてよ、するとこの船が参加しているのを知られない方が良いのか。」

「そうですね。「みこもと」の能力は公開されてますから、第7艦

隊がそんな深いところで、何シテルって事になりますね。」

「うゝむ・・・」

「音響観測室か、黒岩頼む。」

「黒岩です。」

「おい、この船はかなり静かだったよな。特に「金魚曳き」の速度だ。」

「ええ、航走音がうるさいと観測の邪魔になりますから。」

「仮に相手が潜水艦だった場合、どのくらいの距離で探知できる？」

「さあ、潜水艦の機器には詳しくないんで、よく判りませんが、海自の知り合いは1海里くらいかな、と言ってました。」

「おう、ありがと。」

「ジョーブ中佐、海自の潜水艦で1海里程度の探知距離らしいですが、どうなんでしょうね。」

「オオ、JMSDFが1海里なら、今探知された潜水艦は、船の真下でも「みこもと」を探知できないと思います。」

「それなら少しは安心できそうだな。」

その時だった。黒岩が船内放送で吉村を呼び出した。

「吉村主任、至急音響観測室へ。」

まだ放送が終わらないうちに吉村はブリッジを飛び出した。

音響観測室では黒岩が真剣な顔でヘッドセットに全感覚を集中していた。

「どうした。何があった黒岩。」

「ああ、吉村さん、実は220度の潜水艦の航走音が消えました。」

弱いドーンという音の直後、推進器が止まったみたいです。騒々しいほどの音をまき散らしていたんですが、突然消えました。」

「消えた?!、消えたってのはどういうことだ？」

「推進器の回転が止まった事は確実です。それと同時に多分原子炉への冷却水循環ポンプも止まったと思います。つまり、突然、動力音が消えたって事です。」

「と言うことは、潜水艦はどうなるんだ？」

「どういう浮力状態だったかによりますね。沈むか、浮くかのどちらかです。動力を失ったように見えますので、流体力学的平衡は失われていると思われそうですから。」

「それ、聴音で判るか。」

「今聞いてますが、もうほとんど音がしません。」金魚”曳いてですから、かなり難しいですね。」

突然、音響モニターから、ゴーンという、軍用アクティブソナー特有の低周波音が鳴り響いた。ヘッドセットを外して肩に掛けていた黒岩は胸をなで下ろした。ヘッドセットを耳に付けていたら、ただでは済まなかったろう。

「アクティブ・ピンです。」

「米海軍も動力音が消えたのはモニターしていたんだな。上に行つてジョーブ中佐と話して来る。何かあったら上に連絡くれ。」

「了解。」

吉村はまたブリッジに引き返した。

「中佐、今、音響観測室で誰かがアクティブ・ピンを打ったのを聞きました。何か情報はありますか？」

「吉村サン、こちらには何も知らされていませんヨ。」

「実は220度方向の潜水艦の動力音が突然消えまして、それで私が呼ばれたのですが、推進音と同時に冷却水ポンプの音も消えまして、”金魚”の聴音装置でも突然消えた状態になりました。」

「ナルホド。それでアクティブ・ピンを打ったわけですか。この辺は普通のVHFではマズイですね。隊内通信で聞いてみましょう。」

中佐はすでにブリッジに仮設置済みであった、秘話装置付きの軍用通信機端末に向かい、英語で交信を始めた。後に判明したことであったが、この時、ロシアのものとされる航空機が周囲100海里の閉鎖圏内に接近していることが「ミニッツ」のAEWから報告されており、ジョーブ中佐はすでにこの情報を知らされていたため、軍用通信端末を用いて交信したのだった。

異変（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

圧懷（前書き）

まだインターネット環境がありますので更新。
来週は本当に判りません。運が良ければ衛星経由のインターネット
環境があるかも・・・
それでは第20話です。

圧懷

交信の結果によれば、やはり米軍側もヘリのディッピング聴音とA-3対潜機からのソノブイにより、潜水艦推進音の消失に気づいており、その為対潜艦からアクティブ発信を行ったのだった。すでに最初のアクティブ・ピンから数えて3回発信されており、それによれば、潜水艦は動力を失って、かなり急速に沈降している、ということであつた。米海軍の予測では、このまま沈降が止まらなければ、30分程度で圧懷深度に達するようだった。潜水艦は音紋照合により、中国の「漢」級潜水艦と判明しており、このままであれば、「みこもと」から約4海里ほど離れた水深3200mの海底に着底すると思われた。

米海軍は状況をかなり深刻に受け止めており、艦隊のデフコンを一段階引き上げていた。

「ジョーブ中佐、これはうちの「みずなぎ」や、そちらの潜水艦がやられたのと同じ感じがしますが・・・」

「吉村サン、同感デス。しかし、このままこの潜水艦が失われたなら、事実何もデキマセンが、軍事的緊張状態になるかも知れません。」

「それはまずいですねえ・・・特に”みこもと”の存在が明らかになると、特殊法人とは言え、半官半民の政府外郭団体ですから、日本に対しても何か言ってきそうですね。」

「こちらも困つてマス。この状況で潜水艦が沈んだ原因がこちらからの攻撃では無いと証明デキマセン。」

ブリッジの電話が鳴った。観測室からであつた。

「吉村だ、どうした。」

「あ、吉村さん、どうも圧懷音らしきものが聞こえるんですが・・・」

「すぐ行く。中佐、同行願えますか？」

「OK、ユキマシヨウ。」

観測室に降りた吉村達を待っていたのは、音響モニターから聞こえる形状しがたき音だった。

「音響方位235度、距離約4.5海里、深度900m」

黒岩が「金魚」で観測したデータを読み上げる。

「これはホントウに圧懐音デス。私は古いスキップジャック級を処分した時に聞いてマス。」

「ということは、この潜水艦はもう助からない？」

「ソウデス。中の乗組員もネ。」

「吉村さん、圧懐音に隠れていましたが、もう1隻の潜水艦の推進器音も止まってます。ただし、循環ポンプの音らしきものは聞こえますから、単に停止しているだけと思います。ひどく静かですから、あまりはつきりとは言えませんが。距離約7.5海里、水深は320m。方位は325度です。」

「多分、圧懐音に気づいたな。それで停止して無音状態になっているのかも知れん。黒岩君、これまでの聴音記録は取つてあるのか？」

「はい。固定聴音開始から、”金魚”を下ろして現在までの聴音結果は全てデジタル化してメモリーに残してあります。」

「ジョーブ中佐、うちの聴音結果のコピーを提供します。沈没原因が攻撃によるモノで無い事の証明の一助になるかも知れません。」

「Oh、Thanks. それはかなり強力な証拠になると思いマス。感謝します。」

「どうしますか？ハードコピーで司令部に持ち帰りますか？ならばすぐにでもハードコピーしますが。長野君、出来るよな。」

「はい。すでにSDメモリーカードに落としてあります。一応、3枚複製を作っておりますから、いつでもどうぞ。」

「おお、なんかいつもの長野と違うな。今回のミッションはいやに手際が良いな。」

吉村はそう言つて、長野から受け取った3枚のSDカードの一枚をジョーブ中佐に渡した。

「アリガトウ。スミマセン、船内放送でスカンロン大尉を呼んで貰えませんか？彼に旗艦に届けさせます。」

現在「みもと」に残っている2名の米海軍士官の一人を呼び出した。最初に乗船した8名の海軍士官（2名は便宜上だが）のうち、技術系の4名は浮上した潜水艦に乗り込み、また例の問題を起こした2名は、潜水艦の浮上と同時に旗艦のブルーリッジに移っていた。残っていたのは艦隊と行動を共にするために必要な連絡士官2名だった。そのうちの1名が聴音記録をデジタル化した情報の入ったSDカードを持ってブルーリッジに飛ぶのだ。

船内放送で呼び出されたスカンロン大尉は、すぐに音響観測室に現れた。ジョーブ中佐が経緯を説明し、ブリッジの軍用端末を使用して「ニミッツ」搭載のUH60を迎えに来させた。波浪貫通型双胴船形で後部甲板は普通の観測船より広いとはいえ、さすがにヘリの着船までは考慮していない「みもと」からヘリに乗るためには、低空でホバリングしたヘリヘスリングラインを使って乗り込むしか無かった。

吉村達はスカンロン大尉がヘリに乗り込んだ後、また音響観測室へ戻り、もう1隻の潜水艦の動向に注意を集中していた。

その頃、中国籍潜水艦の着底点直上に到着した駆逐艦「ステザム」では大騒動が巻き起こっていた。それは二つの事が同時に発生した結果の大騒動だった。一つは、圧壊した潜水艦からのものと思われる救難ブイの浮上と、それからの衛星向け救難信号の発信だった。それは30秒ほどの時間、救難信号を発信し、自沈した。これで中国海軍は自国潜水艦の沈没とその位置、仮に含まれるとすればその原因を知る事になる。

もう一つは、着底点海面に浮上してきた大量の気泡から、大気中に放射性物質が拡散したことを検出した事だった。この意味は、圧壊で原子炉区画が破損したことを示していた。検出された放射性物質は空気1立方メートル当たり、7万ベクレルに及ぶものだった。

検出された核種から、最低限1次冷却水系が海中に解放されている可能性が高いと判断され、周辺海域が深刻な核汚染に陥った事は明白だった。

この情報は即座に周辺全艦艇に通報され、周辺艦艇は即座にABC防護の体勢に入った。「みこもと」にもこの情報は伝達され、ABC防護システムを持たない「みこもと」は深刻な核汚染に陥らないうちに、即座にこの海域を離れるよう、要請された。

要請を受けた「みこもと」では、曳航していた「金魚」を直ちに巻き上げ、着底点海面から風上に当たる方向に、静粛を保てる最大速度で移動を開始した。また、甲板作業に従事していた乗組員のスクリーニングが実施され、その結果幸いにも汚染された乗組員が居なかったのは不幸中の幸いだった。スクリーニングは第7艦隊全艦でも同様に実施され、直上に居た「ステザム」で外部作業に当たっていた5名の乗組員が体表面1平方m当たりで数百ベクレルレベルの汚染を受け、洗浄措置を取った以外、汚染は発生していなかった。曳航中の新型潜水艦を含む艦隊は可能な最大速度で風上側に待避を行い、現場から16海里以上離れた海域からヘリを発艦させ、着底点海域周辺のモニタリングを行った。

志願により求められた正副操縦士は防護服に身を包み、各部開口部を密閉した上で、後部席に搭載した圧縮空気ボンベにより機内圧を外気圧より高く保ち、半径5海里から、各方向へ通過飛行をしながら空気中の線量をモニターした後、着底点直上でホバリングにより特殊容器に海水サンプルを採取、空母に戻るパターンを4回繰り返し返したところで、ヘリ外部の汚染が洗浄しても除去できない状態になったため、このヘリは海中に投棄された。

第7艦隊司令部はこのモニタリングを、24時間以上継続し、放射性核種の拡散状況をシミュレートするための基礎情報を収集していた。海域は北西太平洋のど真ん中であり、主権問題は発生しなかったが、今後の拡散状況によっては太平洋両岸に影響を及ぼす恐れがあり、今後の天候の変動、海流などを勘案したかなり精密な拡散状

況のシミュレートが必要だった。幸いなことに、この海域を流れる海流は、黒潮や親潮などの沿岸流から離れた、太平洋中央部で収斂する随伴流や反流が主だったものだったのは幸いであった。

圧懷（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちします。

核汚染（前書き）

仕事に来てみて驚いた。最近の衛星回線って凄いのね。自宅より早かった。^^；
では第21話をどうぞ。

核汚染

中国籍と思われる潜水艦の圧壊から約30時間後、中国政府は救難ブイの信号から割り出したと思われる、自国海軍潜水艦の喪失を發表した。その中かなり明確な表現で、「撃沈の可能性」に言及していた。これは日米両国、特に米国にとって大問題であつた。發表された喪失位置は概ね正確で、それはすでに公表されている閉鎖水域の中心に近かつたのである。この水域に米第7艦隊の多数の戦闘艦が蟄集していたのは隠しようのない事実であり、中国は潜水艦喪失の調査のため、この水域に水上艦艇群を派遣すると發表していた。その頃「みこもと」は、第7艦隊から離れ、200海里以上海流を下つた海域に到達していた。海水汚染のモニタリングのためである。核汚染発生直後、内容秘匿のため米海軍の衛星回線を通じて日本政府にも汚染発生が通知され、「みこもと」には、文部科学省から公式ルートを通じて、海域汚染のモニターを行う政府命令が下つていた。米国からの依頼によるミッションそのものは、一応の成功をもつて終わつていたため、軍事的秘匿の理由以外、「みこもと」の行動を制限する理由はなかつた。そのため、「みこもと」は第7艦隊との共同体勢を解いて、単独で核汚染モニタリングの調査に入つていた。

核汚染のモニタリング自体はすでに東北関東大震災での福島第一発電所災害対策として茨城県、千葉県沖合で実施していた手順を踏襲するだけであつたため、問題は無かつた。潜水艦の着底点周辺100海里はいまだに米海軍による閉鎖水域となつていたため、海流の下流方向に100海里進んだ点から、海流を下りながらモニターを実施していたが、この海域では目立つた汚染はこれまで検知されていなかった。この海域での海流は沿岸流の黒潮などと違い、時速0.6ノット程度と遅いため、まだ汚染水が到達していないものと思われた。そのため、200海里以上離れた海域で汚染水の到達を待ち、

その位置を維持していたのだった。

「しかし、大変な事になりましたねえ・・・」

システム担当の長野は、手持ちぶさに自動放射線モニターの数値を追っている主任の吉村に話しかけた。

「まあなあ、中国があそこまで強硬な態度に出るとは思わなかったからなあ・・・」

中国の水上艦部隊の先鋒は3時間ほど前に第7艦隊の航空部隊と接触していた。

「しかし、米艦隊に『搜索をするからそこをどけ』などという通告をするとは思ってもいませんでしたからね。」

「米艦隊としちゃ、すでに目的は達したから、場所を空けるとは思っけれど、曳航している潜水艦を見られたくはないだろうから、航空機も含めて接近は許さないだろうからなあ。」

「しかし、中国側はあの海域の特殊な状況を知りませんから、さらに被害が出るんじゃないかと・・・」

「彼らも国内事情が、節を曲げてでも情報の提供を乞う事を許さないだろうし、現場だけで秘密裏につても、乗り組んでいる人間の教育に問題があるから、難しいだろうなあ・・・」

「しかし、あの沈んだ潜水艦、やっぱり例の『幽霊』にやられたんですかね。」

「前後の事情を考えれば、そうとしか思えないからね。ダメコンでは多分世界一の米海軍の最新鋭潜水艦があの状態なんだから、いくら複合素材を使わない金属製船体だからと言っても、ある程度のダメージは食らうだろ。それが生死に直結しない部分なら問題なかっただろうが、聴音データだと推進器どころか原子炉の冷却動力さえ止まったようだから、どうにもならなかったんじゃないかな。それと潜水艦乗員の練度の問題もあるだろうしな。」

「中国海軍の潜水艦って練度低いんですか？」

「そりゃ、潜水艦の運用に支障が無い程度の練度は持っているだろうさ。しかし、あの国は日米英独仏露とか北欧諸国みたいに戦前か

ら潜水艦を運用してきた国じゃ無いし、元々、下級乗員の程度が高い訳じゃ無い。今時の潜水艦は最新技術の塊みたいなもんだから、日本の自衛隊だって専門職として扱われるほどの知識を必要とするのが潜水艦乗りで、いくら通常運用が出来るといって、突発事態、それも予想もしてない突発事態に対応しろ、と言う方が酷だよ。」

「なるほど。海洋調査機構随一の潜水調査艇乗りの能瀬さんですら、やられたんですから、当たり前か・・・」

「ま、そういう事だ。問題は政治が未来永劫、それを理解できない事だろうな。」

その時、観測室の電話が鳴った。吉村が電話を取った。

「はい、観測室。あ、船長。はい、船長室ですね。すぐに伺います。長野、船長から呼び出しだ。ちょっと行ってくる。」

「了解。」

吉村が船長室に顔を出すと、すでに一等航海士、二等航海士、機関長、運用長^{ボス}が顔を揃えていた。

「吉村主任、ご足労願って申し訳ありません。」

「いえ、で、何かあったのですか？」

「ええ、テーブルに、先ほど機構本部から受け取ったメールのコピーがありますから、目を通して下さい。他の諸君もお願いします。」通信文にざっと目を通した吉村は、

「船長、これ、かなり深刻ですね・・・」

「ええ、それで船の幹部に集まってもらったわけなんで・・・」

通信文には米海軍が通告した立ち入り禁止海域についての情報が記載されていた。それによれば、東経156度から160度、北緯30度から34度の範囲を軍事的理由から一般船舶の立ち入りを制限するとされていた。現状に鑑みれば、中国海軍との戦闘行為を想定しているとした受け取れなかった。「みこもと」の現在位置はこの閉鎖海域の南端に位置していた。

テーブル上のもう一枚の通信文には、「みこもと」の安全確保のた

め、自衛艦2隻が出港したこと、第7艦隊から駆逐艦が1隻随伴のために派遣される事、「みこもと」は所定の核汚染モニターが終了次第、すみやかに母港へ自衛艦と共に帰港すること、などが記載されていた。

「吉村さん、そういうわけですので、観測調査部員にも周知願いたいんですが。」

「判りました船長。この後すぐにミーティングを開きます。」

「お願いします。他の諸君も同様に願います。まだ戦闘が始まった訳ではありませんので、くれぐれも冷静に対応をお願いします。本船航路としては、この閉鎖海域を速やかに出るため、取りあえず南下、閉鎖海域の外側で72時間のモニタリングを行い、汚染検出の有無に拘わらず、航路を西へ向け、海域を迂回、小笠原西側近海を北上して帰港するコースを取ろうと思います。何か意見はありますか？」

「観測調査からは特にありません。」

「機関科からも特にありません。」

「それでは、この航路予定で進めます。第7艦隊の駆逐艦と会同するまで、現在位置を保持、その後南下、海域を出て72時間漂泊、放射線モニタリングを実施、その後進路270度で東経140度付近まで、そこから北上するコースを取ります。吉村さん、航走中でもモニタリングは可能ですか？」

「ええ、可能です。ただし、海流の詳細が判りませんので、拡散予測モニターとしてはあまり意味が無くなりますが・・・」

「了解です。しかし、最悪、そのような形になることも了承願います。」

「判りました。出来る限り意味のあるモニターにするよう、海流データの精密度を上げておきます。」

「機関長、燃料は大丈夫ですね。」

「取りあえず、閉鎖海域の迂回には十分です。もちろん帰港にも不足はないですが、出来るならどこかで多少補給はしたいと思います。」

「

了解。それは小笠原近傍でもう一度判断しましょう。最悪海自艦

からも都合は付けて貰えるかも知れませんし。」

「その他何もなければ解散。宜しく願います。」

核汚染（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

制限海域（前書き）

出先から帰ってきて自宅から更新しようとファイルを開いたところ、ファイル破損と表示され開けなくなりました。バックアップはすでに掲載した分までしかありません。仕方なく思い出しながらまた書いています。およそ4話分くらいのデータが飛びました。ふう・・

第22話です。

推敲が甘くなっています。誤字、脱字等あると思います。ご容赦ください。

制限海域

「みこもと」に随伴するために派遣された駆逐艦はおなじみの「ステザム」だった。また、「ステザム」との連絡士官として乗船してきたのは、これまたおなじみのジョーブ中佐だった。

「ステザム」は放出された核汚染物質を含む気泡の中に入ってしまったため、乗員の被爆は軽微で済んだものの、艦各部に洗浄しきれない高濃度汚染域が出来てしまい、特殊な洗浄法を用いなければ、除染が不可能な状態であった。このため、戦闘行動に制限があることから、比較的安全と思われる「みこもと」随伴に派遣されたのだった。ジョーブ中佐は第7艦隊司令部付きであるため、第57任務群とは命令系統が異なり、艦隊司令部には彼の居場所が無かったため、志願して「みこもと」に乗り込んで来た。もちろん、吉村や船長と知己があることも大きな動機ではあった。中佐という階級は「ステザム」艦長と同じであり、つまり、艦長以外の「ステザム」士官から、命令を受ける必要がない、と言うことでもある。米第7艦隊指揮下に無い、日本の公用船に乗り込む連絡士官としては非常にやりやすい立場であった。

もちろん、吉村や船長も日本滞在が長く、日本語も堪能なジョーブ中佐の連絡士官乗船は歓迎すべきことであった。彼は乗船と同時に持ち込んだ艦隊衛星通信装置を、「ステザム」の技術下士官とともに「みこもと」の乗員の協力を得て、船橋内に設置した。「ステザム」との通常交信は一般のマリンVHF通信機で行うが、軍事的に重要な通信はこの通信端末を用いて行われるのである。また、この通信端末は艦隊司令部でもモニターでき、当然ながら「みこもと」の位置、針路、速度などがリアルタイムで艦隊旗艦CICでモニター出来る様になっていた。

「みこもと」は「ステザム」と会同すると、針路を180度に取り、新たに米海軍が設定した制限海域から抜ける航路を進んだ。速度は

ゆつくりとした16ノットだった。これは補給ポスト付近に高線量汚染があるため簡単には燃料補給を受けられず、残燃料に不安を抱える「ステザム」の状況を考慮したためだった。

それでも20時間ほどで制限海域外側100海里付近に達し、「みこもと」はここで当初計画通り、72時間のモニタリングのための漂泊に入った。「ステザム」は「みこもと」から方位10度方向に約3海里ほど離れて同様に漂泊していた。

モニタリングの漂泊とはいえ、すでに「みこもと」の聴音能力を承知している「ステザム」から、音響監視を依頼されていたため、「みこもと」は「金魚」を曳航しておよそ5海里ほどの距離を8の字型に行きつ戻りつしていた。

「みこもと」の受聴した音響信号は船内の処理装置でデジタル化され、長野たちの努力で、船橋の軍用衛星通信端末に繋ぎ込まれていた。このため、「みこもと」が捉えた水中音響は、リアルタイムで「ステザム」のイージス端末または艦隊旗艦のデータ処理端末で処理され、水中音響データベースとの照合により、それが潜水艦でデータベースに記録があるものである限り、イージス端末に接続された各艦艇、航空機に表示されるようになっていた。このシステムの実証は漂泊を始めて間もなくなされることになった。

その頃、船橋に詰めていた吉村に音響観測室の黒岩から連絡が入った。

「吉村さん、潜水艦らしき推進器音、方位120度、距離8海里以上、深度350m」

「了解、黒岩。ジョーブ中佐に確認して貰う。」

「了解です。」

「ジョーブ中佐、音響観測室から潜水艦らしき推進器音検知したそうです。確認願います。」

「了解デス。すぐに『ステザム』に連絡します。詳細をお願いします。」

「本船からの方位120度、距離8海里以上、深度350m」

「了解。」

数分後、通信端末の呼び出し音が鳴った。

「吉村サン、探知した潜水艦は友軍のものデス。688級潜水艦がパールから本隊に向かっているようデス。艦名は判りません。」

「了解、それなら安心です。あー、音響観測室黒岩、探知潜水艦は友軍と判明。以降モニター不要。」

「吉村さん、了解。それ以外の音響に注意を集中します。」

「宜しく頼む。」

本来、日本の公用船でこのような事を行うのは、いろいろと五月蠅い事になるのだが、任務群本隊から離れ、固有の対潜へりを持たないアーレイ・バーク級イージス駆逐艦である「ステザム」は対潜への運用ができなかったため、「みこもと」の聴音能力に頼るしか方法が無かったのである。「みこもと」にしても、すでに複数の潜水艦を探知しており、また中国海軍の強硬な態度から、米艦隊の庇護下で行動する事は必要であつた。

「みこもと」が漂泊を開始してから24時間が過ぎた頃、船橋の通信端末が呼び出し音を鳴らした。船橋当直に付いていた2等航海士はインターカムで自室に引き取っていたジョー・中佐を呼び出した。船橋後部の水先人用船室を自室としていたジョー・中佐は数秒で船橋に現れ、交信を開始した。すぐに通信を終えたジョー・中佐は、自ら船長室に連絡を入れ、1階下の船長室応接間に降りていった。そこには隣室の吉村も来ていた。

「船長、吉村サン、今、艦隊司令部から連絡で、中国艦隊から2隻の駆逐艦が離れ、こちらへ向かっているそうデス。艦隊の早期警戒機によれば、我々の周囲300海里にはこちらの艦隊以外船は居ません。目的は『ステザム』か本船以外にありません。対処の準備をお願いします。」

「判りました。しかし何で我々なんですかね。それに我々の存在をどうやって知ったんですかね。」

「向こうの意図はわかりません。存在は衛星だと思えます。動いている船を衛星で捉えるのは、かなり難しいですが、我々はもう24時間以上、この位置からあまり動いていません。それで衛星で発見されたのでシヨウ。」

「しかし、対処って言っても、調査機構本部からは明確な指示があるからなあ。72時間のモニタリング終了までにはまだ40時間以上あるしなあ。」

「吉村さん、本船の安全には換えられませんよ。私は船長として、危険が有るなら早期に避難すべきと思っています。」

「しかし、汚染はかなり深刻で、このまま放っておくわけにも・・・」

「吉村サン、この辺は海流が弱いですから、拡散には月単位の時間がかかると思います。状況が良くなっても遅くは無いと思います。原子力艦を除いて、軍艦はあまり長い間補給ナシではいられません。」

「なるほど。この状況も長くは続けられない、ということですか。」
「そうデス。57任務群も『ニミッツ』が居ますカラ、頑張ってマスけれど、『ステザム』のように燃料に不安が出てマス。」

「ジョーブ中佐、了解しました。本船は退避準備に入ります。まだ時間はありそうですから、中国艦のレーダー覆域に入る前に避退しようと思います。」

「了解デス。『ステザム』とその方針で協議します。」

「お願いします。吉村さん、そういうわけです。研究員にも周知お願いします。」

「判りました。私も研究員の安全が第一です。船長の方針に同意致します。」

「なんか、とんでもないことになって、研究員諸君には申し訳ない状況が状況だけに勘弁して欲しいと伝えてください。」

「いや、船長が謝られる事じゃありません。仕方が無い事ですから。」

「そう言っただけだと気が休まります。それではお願いします。」

「船長はそう言っで、当直員に状況と今後の方針を伝えるために船橋に登っていった。吉村はすでに夜明けまでの時間が6時間を切つて居る事もあり、起床後全員呼集をかけて伝達することにし、自室に引き取った。ジョーブ中佐は「ステザム」と連絡を取り「みこもと」の方針を伝え、0800に「ステザム」艦長と再協議する事になった。

制限海域（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

迎撃（前書き）

今度はバックアップファイルが飛びました。書き直した分が全てアクセス不能。仕方なくまた書き直しています。ディスク・ユーティリティーで見ると、起動ディスクが不良となっています。しかし、起動にも他の操作にも異常はなく、不良もSMARTのエラーのようです。しかし、問題は起動ディスクだけで、バックアップの外付けディスクは異常になっていません。

なんか、ウィルスみたいな感じだったんで、ウィルスソフトを別のものに更新して検査しましたが、結果は無し。なんだろう・・・
それでは23話目どうぞ。

迎撃

この頃、第57任務群本隊は、輪型陣の中央に航洋タグボートとそれに曳航される潜水艦、その左右にタイコンデロガ級イージス巡洋艦を置き、その前方に空母「ニミッツ」を置いた艦隊陣形で新たに設定された制限海域の東側限界線近くに達し、南東へ進んでいた。

中国艦隊はすでに圧迫した潜水艦の沈没点付近に到達しており、海底の捜索を行わらしき海洋調査船と駆逐艦1隻を沈没点付近に残したまま、57任務群本隊の後を追って南下していた。艦隊から分離した2隻は方位南南西に向かい、漂泊する「みこもと」と「ステザム」への最短コースを進んでいた。中国艦隊には2隻の補給艦と思しき艦が随伴していたが、「ニミッツ」艦載機の偵察では中国艦隊が補給を行った形跡はなかった。

「みこもと」と「ステザム」は、中国艦が約100海里の距離に近づいた時点で、核汚染モニタリングを打ち切り、任務群本隊とは逆の西に向かって「ステザム」の燃料事情が許す最大速度24ノットで避退を開始した。この時の中国艦の速度は21ノット程度であったため、中国艦が「みこもと」の現在位置に達する頃には、西方に120海里程度の距離を取れると考えていた。本隊とは逆方向へ避退したのは、「みこもと」の帰路を考慮したためであった。本隊へ接近する方向、つまり東へ避退した場合、本隊を追尾する中国艦隊との接触を回避するために、相当な大回りが必要だった。補給を受けられなかった「ステザム」より燃料事情は良いとはいえ、有り余っているわけではない。東へ避退した場合、中国艦隊を迂回する航路では、日本領海までの燃料事情が著しく不安になるためだった。

しかし、「みこもと」も「ステザム」も中国側の彼らへの関心の度合いを読み違えていた。というよりも、事実上手出しが不可能な空母機動艦隊である57任務群本隊よりも、たった2隻、それも1隻

は非武装船であることが確実な「みこもと」と「ステザム」なら、彼らの力でどうにかなると踏んだのかも知れなかった。他の手段を持たない中国側は、相当な衛星資源を「みこもと」と「ステザム」の2隻に集中したのだろう。「みこもと」が避退を始めて1時間半程度が経過した時だった。船橋の軍用通信端末が呼び出し音を鳴らした。当直中だった2等航海士はブリッジ後部の水先人室で休んでいたジョーブ中佐を呼び出した。数秒で船橋に姿を現したジョーブ中佐はすぐに軍用端末で交信を開始した。短い交信が終わると、彼は自分で船長室に連絡を入れ、階下の船長室に降りていった。船長室応接間にジョーブ中佐が入ると、船長と吉村がすでに待っていた。吉村の自室は船長室の隣にある。

「ジョーブ中佐、何かあったのですか。」船長の山下は聞いた。

「ハイ。こちらに向かっていた中国艦が針路変更シテ、高速でこちらに向かつています。『ニミッツ』の早期警戒機が探知しまシタ。このままだと、後3時間ほどでレーダー覆域に入りマス。」

「こちらの避退が向こうに知られたと言うのですか！」

「ソウデス。おそらくかなりな数の衛星を我々の海域に集中させたのデショウ。」

「困った事になりましたね。本隊からの支援はあるのでしょうか。」これは吉村だった。

「ハイ。艦隊司令部からは航空機の支援を出すといっています。ただ足止めはできないでショウ。」

「『ステザム』の燃料の件もありますから、さらなる増速もコース変更も難しいでしょう。」

「吉村さん、それはこちらと同じですよ。これ以上燃料の消費が増えれば、小笠原領海までの最短コースを取らざるを得なくなります。」

「困りましたね。しかし、このまま進むしか方法は無い。」

「そうですね。警戒しながら向こうの出方を待つしか方法は無さそうですね。ジョーブ中佐、そのように『ステザム』に伝えて戴けませうです。」

んか。」

「ワカリマシタ。どちらにせよ、『ステザム』にも採れるオプシヨンはそう多くないと思います。」

3時間後、中国艦がVHF通信可能範囲に入ったと思われる頃、「みこもと」のVHF通信機から中国語と思しき音声流れ出した。

船橋当直員がすぐに船長を呼び、船長はジョーブ中佐と吉村を船橋へ呼んだ。吉村は中国語と思われることから、自室からチャンを船橋に呼び出していた。遅れて船橋に入って来たチャンに吉村は、

「チャンさん、すみませんね。どうも中国語で呼び出しを受けているようなんですが、通訳をお願いできますか。」

「判りました。やってみます。」

まだ距離が遠いため、FM方式のVHF通信でも、若干の雑音が混じっており、慣れないチャンは聞き取るのに苦労していた。中国艦はまだ水平線下にあった。

「あまりうまく聞き取れませんでした。内容は停船命令のようです。日本船は直ちに停船して接近を待て。従わなければ必要な措置を取る。」と繰り返して言っています。」

ジョーブ中佐はチャンの翻訳を「ステザム」に中継した。しばらくの協議の後、今後の交信は「ステザム」が行う事となった。交信は衛星リンクを通じて、57任務群旗艦「ブルーリッジ」、ハワイのCINCPAC、ワシントンの国防総省にリアルタイムで中継されていた。交信は英語で行われた。

＜ステザム＞「こちらを追尾中の中国艦、こちらは合衆国軍艦『ステザム』である。貴艦の発した停船命令の説明を要求する。当該日本船は当艦による随伴を受けている。」

＜寧波＞「『ステザム』こちらは中華人民共和国軍艦『寧波』である。日本船は中国領海を侵犯した疑いがある。当艦は日本船の拿捕命令を受けている。停船して指示に従え。」

＜ステザム＞「こちら『ステザム』。貴艦の主張は理解不能。当海

域は中国領海では無い。国連海洋法条約に照らし、貴艦に当該船の拿捕権限は無い。また、貴艦の行動は海賊行為防止に関わる国連決議に違反している事は明白である。直ちに追尾を中止し、針路を変更せよ。」

<寧波>「こちら『寧波』。本艦は中華人民共和国法により、権限を与えられている。直ちに停船して指示に従わなければ、しかるべき処置を執る。命令である。停船して接近を待て。」

<ステザム>「『寧波』こちら『ステザム』。貴艦は自分が何を言っているのか理解しているのか？注意して置くが本交信は全てしかるべき部署に中継されている。貴艦の持つ権限は合衆国軍艦はもとより、日本国政府公用船に対しても及ばない事は明白である。従って貴艦の指示に従わなければならない義務は無い。逆に、本艦は合衆国政府より与えられた権限により、海賊行為防止に関わる国連決議に明白に違反する貴艦らに対し、直ちに追尾行為を中止するよう勧告する。従わない場合、本艦に与えられた権限に基づき、しかるべき処置を執るが宜しいか。」

この「ステザム」の通信に対する返答は、水平線上に現れた煙の尾を引く二つの光点だった。直後に「みこもと」船橋の通信端末から、「ヴァンパイア、ヴァンパイア」のミサイル警報が流れ出した。この時の「みこもと」と「ステザム」の位置関係は、警戒配置に付いた事もあり、10海里以上離れて、中国艦と「みこもと」を結んだ線上に「ステザム」はあった。「みこもと」からは遙かに霞んで見える「ステザム」から4本の煙の帯が上がり、その先端に4つの光点があった。「ステザム」が迎撃を開始した瞬間だった。

迎撃（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

狂騒（前書き）

第24話です。

破損したファイルは復元不可でした。どうもMSワードフォーマット（.doc）のファイルだけが飛んだようで、MacのRTFファイルは問題ありません。

手書き復元ファイルはRTFでセーブしました。バックアップも同じ。これで様子を見ます。もう一度飛んだら、復元する気力があるかどうか・・・

狂騒

「みこもと」船橋では、事態を飲み込めていない操舵手を突き飛ばすように船長が舵輪に飛びつき、左舷一杯まで舵輪を回した。普通の船で20ノットを超える速度でこんな操舵をすれば、最悪転覆してもおかしくなかった。しかし波浪貫通型双胴船形の「みこもと」は右舷側船体をぐつと沈めるだけで、操舵に追隨した。ミサイル到来方向に船尾が向いたと思われる頃、船長は操舵手に舵輪を渡し、「方位を維持しろ」とだけ言い、エンジンテレグラフのストッパーをもぎ取るように外し、両舷とも一杯まで押し込んだ。一瞬の遅れの後、船は体が後ろに持つて行かれるほどの加速を見せ、増速し始めた。すぐに船橋の電話が鳴り、耳に付けなくても聞こえる音量で機関長と思しき声が叫んでいた。船長は「ごちゃごちゃ言うな。回せ回せ！！、目一杯回せ。」と電話に叫んだ。

船長が舵輪に飛びついた時を同じくして、吉村はコンソール上の緊急ボタンを押し込んでいた。船内に「プア、プア」という警報音が流れ出した。続いて吉村は船内放送の「緊急」ボタンを押し込んだまま、警報音にかぶせて「全乗員は救命胴衣着用の上会議室へ集合」と繰り返し放送していた。会議室は船橋の2層下船首側であり、ミサイルに背を向けて逃げている状態ではミサイルの直撃を受けても、被害は最小限で済むと思われる位置にあった。船はその間にも加速を続け、すでに公称最大速度の27ノットを超え、30ノットに迫ろうとしていたが、加速はまだ続いていた。緊急処置を終えた船長と吉村はすぐさまウイングに飛び出し、ミサイルの行方を見ようとした。そして彼らがウイングに飛び出した直後、「ステザム」の向こう側の空中に二つの火の花が咲いた。

その頃、機関室は狂乱状態にあった。いきなり過負荷全速状態へエンジンテレグラフをたたき込まれた結果、それまで4基ある発電機のうち、3基を運転して航行していたものが、4基目の発電機が起

動し、暖気運転も無しでいきなり全速回転に入り、さらにそれに続いて燃料電池へ燃料を圧送する燃料ポンプが起動した瞬間から全力運転に入った。リミッターを外されて稼働し始めた機器からは無数のアラームが鳴り響き、機関長は半狂乱になっていた。それでも機関員が監視盤の運転状態を巡航から過負荷に切り替えた事で大半のアラームは消えたが、推進用電動機制御のインバーターが出す低電圧アラームは4基目の発電機が並列運転に入るまで続き、24ノットという高速でいきなり左舷一杯という大舵を取られた舵機は油圧機構のシールが破損したのか、舵が中立となってもアラームを響かせていた。一端は喧噪が収まったに見た機関室だったが、すぐにまた喧噪の渦に巻き込まれた。今度は発電機、燃料電池の温度警報だった。4基のうち、ずっと稼働していた2基は、すでに温度がレッドゾーンに入りかけていた。また燃料電池も、供給される燃料に改質触媒の作用が追いつかず、過熱し始めていた。これらの温度警報が、また機関室を満たすことになった。

こんな喧噪を知ってか知らずか、船橋では船長が微動だにせず、後方を双眼鏡で観察していた。次のミサイル発射を警戒していたのだ。「みこもと」の全速力退避を見て、「ステザム」も中国艦から距離を取る方向へダッシュを始めた。さすが軍用ガスタービン機関の力は「みこもと」などとは比較にならない加速を生み出し、あっという間に30ノットを超える速度に達していた。それでも「みこもと」はすでに30ノットを超え、竣工試験時にマークした過負荷最大速度を超えていた。1時間強、こんな状態で突っ走った後、「ステザム」から通信が入った。それによれば、偵察機による偵察で、中国艦が速度を落とし、針路を中国艦隊本隊に向けた事が知らされ、また、「ステザム」が「みこもと」と会合したいため、速度を落とし、欲しいとの要請も伝えられた。ジョーブ中佐からそれを聞いた船長は、それまで前方一杯に押し込まれていたエンジンテレグラフを巡航（低速）まで引き戻した。これにより、発電機エンジンの回転低下を聞いた機関長は安堵の余り、一時的に意識を手放したらしい。

船橋でも状況は同じで、船長、吉村、ジョーブ中佐それぞれが、それぞれに突っ伏していた。

しばらく各人とも突っ伏していたが、後始末だけでもそうもしては居られなかった。船長は機関室と連絡を取り、状況の説明を行い、また機関室の状況を聞いていた。吉村は会議室に集まった全乗員に状況説明と、警戒態勢は続けるため、人員の割り振り等を行うために会議室へ降りていった。ジョーブ中佐は通信端末にとりつき、「ステザム」ではなく、艦隊司令部と通信を行っていた。30分ほどで「ステザム」と会同した「みこもと」は針路を90度近く変え、57任務群本隊との邂逅コースに乗った。「ステザム」からの要請だった。すでに艦隊から給油艦が分離してこちらに向かっていた。

狂騒（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

給油（前書き）

第25話です。

現在の処、ファイルは正常です。バックアップも問題ナシ。doc・
ファイルだけの問題のようです。まだ訳がわかりません・・・

給油

6時間ほどで給油艦と会同した「みこもと」「ステザム」は直ちに給油行動を開始した。「ステザム」には補給ポストがあるため、通常の洋上補給、つまり給油艦と併走する形で給油が可能だ。しかし、「ステザム」の補給ポスト付近には、高線量の核汚染が存在するため、通常の補給活動は出来なかった。嚴重な防護服に身を包んだ要員が、オイルマーカーで示された高線量部分を避けるようにテンションワイヤーを繰り出し、給油ホースは給油艦側から供給される形で補給が開始されたが、開始までの時間は通常の3倍近く掛かっていた。「みこもと」は補給ポストを持たないため、通称「縦曳き給油」つまり給油艦が「みこもと」を曳航する形で行われる。良く訓練された海軍なら、縦曳き給油と併走する通常の補給活動を平行して行う場合があるが、軍用給油艦からの補給など一切考慮していない「みこもと」相手では無理だった。「みこもと」は「ステザム」の給油が完了するまで1海里ほど離れた位置を同行し、その後給油を行う予定になっていた。給油は比較的低速（10ノット前後）で行うため、余裕のできた「みこもと」機関室では、2基の酷使された発電機を停止、不具合のチェックと、消耗品の交換作業に入っていた。機関科総出の作業であるため、給油艦から必要な燃料の量の問い合わせが来た時、直ちに計算が出来る手空き要員が居なかった事が齟齬を生んだ。機関長は1等機関士に整備作業から抜けてそれを計算するように命じた。ベテランの1等機関士は機関制御室に戻り、残燃料を確認して、日本領海までの最小必要量を計算し、それを船橋に伝えた。

船橋士官や吉村を始めとする研究員は、それなりに米海軍との付き合いがあり、慣れていたが機関科は普段、機関室で勤務するため、あまり交流は無かった事が遠因だったかもしれない。1等機関士は燃料の必要量を通常通りキロリットルで算出していた。そしてそれ

はそのまま給油艦に伝えられた。

「ステザム」の給油が終わり、速度を落とした給油艦に「みこもと」は後ろからゆっくり近づいて行った。サンドレットが投げられ、それに結ばれたホーサー（太索）が給油艦に固定されると、給油艦から給油ホースがホーサー伝いに延ばされ、チクサン継ぎ手で「みこもと」側のホースと繋ぎ合わされ、給油が開始された。給油に当たった機関員は、予定の量を超えても送り続けられる燃料にあまり疑問を抱かなかった。送る量は送る側が管理しており、受ける側は要求量以下である場合のチェックだけしかしていない。普通は若干多めに送る事が常であることも手伝い、機関員は最低量チェックを済ますと、コーヒーが入ったと呼ばれていた食堂へ入っていった。どうせ給油が終われば呼ばれて、ホースの分離と漏油対策をしなければならぬのだ。

ゆっくりとコーヒーを飲んでいた機関員は、いつまでも呼ばれない事に疑問を持った。そして燃料タンクの点検孔を見て頭の上に？マークが浮かんだ。すでに給油量は要求量の倍を超えていた。しかし、それでも、量の管理は供給側というセオリーが染みついている機関員は、疑問には思ったがすぐに補給停止を要求しなかった。そして、給油完了の連絡があったとき、給油された量は要求量の4倍弱に達していた。給油艦側からホース内がエアブローされ、チクサン継ぎ手を切って、メクラで蓋をした給油艦側ホースを送り出したとき、機関長から連絡が入った。機関員は補給量について機関長に正確に伝えた。それを聞いた機関長は頭を抱えてしまった。補給艦は米国である。米国の液体単位はガロンなのだ。補給艦は暗黙として単位を付けずに提示された必要量をキロガロンとして受け取っていたのだ。「みこもと」の燃料消費が酷く経済的であったが故、キロリットルをキロガロンと受け取ってもおかしくない数字が提示されていた事も一因だった。通常、米軍は自国艦以外への補給は後日代金を請求するのが常だった。それで機関長は頭を抱えたのだ。あまり経済的に余裕のない海洋調査機構では、かなり厳密な予算に従って事業

を行っている。今回のミッションは突発事態であつたものの、すでに第7艦隊司令部には、必要経費の請求を行っており、それには燃料費も含まれていたのだ。それを必要量の4倍近く、それもMILスペックに合致した、通常ならば自動車の燃料として使えるようなレベルの燃料を事もあるうに、キロリットル単位で4倍弱補給してしまえば、後日請求される金額は予算からかけ離れたものになる事は間違いが無かった。始末書で済めば幸せと言うものだ。

しかし、その機関長の憂鬱も僅かな時間に過ぎなかった。給油を終わり、離されたホーサーをたぐり上げた甲板員が、ホーサーに括りつけられたモノを発見した。黒いビニール袋に2重に入れられたそれは、2ケース分の缶ビールだった。そして添えられたメッセージには、米海軍からのささやかなプレゼント、燃料とビールを受け取れ、と書かれていた。そして軍用端末からは、57任務群司令官の名前で、今回の給油は米海軍の徴用船としての給油であるとし、費用は全て米海軍に帰する、という正式メッセージが入っていた。第57任務群は、戦友である潜水艦乗員の命を事実上救った「みこもと」に対し、感謝の意を表したのだ。

彼らは「みこもと」から提示された給油量がキロリットルの単位であることを知っていたのだ。それを知らぬ顔でキロガロンとして供給したのは、彼ら一流のジョークだった。前甲板で頭を抱えてうずくまる機関長の姿は、ジョーブ中佐により携帯電話に録画され給油艦で流されていた。艦内のCCTV回線に流された機関長の姿を見て、給油艦の乗り組み員が抱腹絶倒したのは言うまでも無い。後日これを聞かされた機関長は複雑な表情を浮かべていたが、なんら行動は起こさなかった。ただ、倍を超える燃料が供給されていたにも関わらず、報告すらしなかった機関員が、素っ裸でビルジ（船底汚水）清掃をやっていたという噂はあるが、あくまでも噂でしかない。

給油（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

拡散（前書き）

第26話です。

- どうもデュアルブートのWin側から何かされたか、ハードの問題のようです。しかしWinなんか余り立ち上げないのでですけどね・・

拡散

給油を受けた「みこもと」は艦隊に戻る「ステザム」と給油艦と別れ、一路帰途についた。余分な燃料をプレゼントされた機関長の大盤振る舞いにより、通常の巡航速度よりも2ノットも早い20ノットで航行したため、母港横須賀には予定より2日も早く到着した。しかし、母港に帰ったからと言って、乗組み員はすぐに休めるわけでは無かった。甲板科は索具などのメンテ、航海機器のメンテに追われ、機関科は過負荷全速運転の後始末に追われていた。研究員も今回のミッションで発見された謎の生物と高粘度海水の分析、報告を行わなければならず、帰宅の時間を惜しんで船に寝泊まりするものすら居た。本来なら数日は休暇を与えられ、次のミッションが決まるまでの間に行う作業だったが、今回は帰航の航海中にすでに次のミッションが決まっていた。例の海域の再調査であった。特に核汚染が発生している事もあり、速やかにモニタリングを行う必要があった。

船長や吉村達幹部も各省庁、海保、自衛隊、米海軍などとの調整に追われ、船員や研究員と同じ運命にあった。しかし、さすがに2週間が過ぎると、忙しさも峠を越え、作業も外注作業が主体となり、また研究員は地上のスーパーコンピューターの支援が受けられる体勢が整い、分析作業が飛躍的に進んだ事もあり、定時で帰宅できる状況になりつつあった。そして、核汚染海域での調査のために、特殊洗浄装置と洗浄水処理装置が搭載される事になり、その仮設工事が始まる事で、甲板作業と機関室での作業は終わりを迎えた。帰航以来2週間強に亘って不休の作業を続けた各員もようやく休暇を与えられ、それぞれの家族の待つ家に帰っていった。吉村達幹部は、それに遅れること3日、久々の休暇が与えられる事になった。

吉村は休暇を家族水入らずの旅行で過ごす事に決めていた。吉村の

家族は妻恵美子と小学5年の長男健、小学3年の長女碧の一家4人であった。伊豆半島の南端に近い下田市T浜にある温泉リゾートY館に宿を取った吉村一家は、温泉と美味しい地元産の魚料理を堪能した翌日、下田市内の海中水族館を訪れていた。ここには吉村の大学時代の同期が勤務しているはずだった。水族館に入場した吉村は大小の魚たちが泳ぐ大水槽に妻子を残し、入り口のレストランで落ち合う事にして、さらに奥のアシカプール裏側にある飼育棟へ足向けた。飼育棟裏手の入り口をノックした吉村は応対に出た職員に「内村さんはいらっしゃいますか？」と聞いていた。

「はい、奥の事務室にあります。どちら様でしょうか？」

「大学の同期で吉村と言います。お取り次ぎ願えますか。」

「それでしたら、そのまま事務室にお進み下さい。ご案内します。」

「申し訳ありません。」

事務室の扉を開け、案内に立った女性職員が「内村課長、お客様です。」

と声を掛けると、奥まった机で何かを読んでいた小柄な男が顔を上げた。

「おい、吉村じゃないか、珍しいな。どうしたんだ。」

「内村、久しぶりだな。家族旅行でこちらに来たんで、お前の顔が見たくなってな。」

「そうか、ここじゃお茶くらいしか無いが、5時以降ならかまわん。体空いてるんだろ。どうだ一杯。」

「いいね。ただし女房と子供付きだな。」

「まあ、それは仕方が無いさ。どこに泊まってるんだ。」

「T浜のY館だ。眺めが良いんで、そこにした。」

「貧乏学生だった頃とはエライ違いだな。」

「そういうお前こそ、管理職が板に付いてきたじゃないか。」

「何を言うか。今や潜水調査艇の大御所が。調査帰りなのか。」

「ああ、そうだ。今回はちょっと特殊だったんで内容は話せないがな。」

「なんだよ、一応、特殊法人は民間扱いだろ。そんなやばいミツシヨンもやるのかよ。」

「民間って言っても給料は税金から出てるわけだな。お前の処はどうなんだ。大水槽の魚減ったみたいだったが。」

「ああ、最近では地元の漁師も老齢化が進んでな。魚を活かして持つて来る技術を持った漁師がみんな廃業して、簡単には地元の魚を買い付けられなくなってる。それに水温のせいなのか、このところ不漁だしな。漁師連中干上がりそうだよ。」

「ここでも老齢化の弊害ですか・・・しかし、巷には失業した若い連中が溢れてるんだがなあ。」

「いや、漁師ってのは、思うほど簡単な商売じゃなくてな。ただ、大水槽の魚が減ったのは買い付けの問題じゃなくてな。」

「どうしたんだ。」

「ここ2週間で2度ばかり、取水口から変なモノが入って来て、魚が死んだんだ。それを取り除くために、大水槽の水を落とさなければならなかったのが原因だ。」

「なんだ、そのへんなものってのは。」

「ゼリーに近い感じの塊なんだが、初め通常のフィルターだけで水を回していたら、大水槽に入り込んでな。そいつに近づいた魚が、電撃でも受けたようになって死ぬ。」

「おい、詳しく話してみろ。どうもイヤな予感がする。」

「いきなりなんだ。そのゼリー状の塊の話か？」

「そうだ。ひよつとすると俺の仕事と被るかも知れん。」

「おいおい、海洋調査機構の対象と被るだと。そりや大変だ。どこで見つけたんだ。」

「詳しくは言えないが、小笠原の東だ。」

「そんな遠くでか？ここから1000海里以上離れてるじゃないか。」

「ああ、そのくらい離れてる。相当に大変な事が起きてる。」

「そうなのか。一応サンプルは取ってある。持って行くか。」

「そうしたいのは山々だが、休暇で家族旅行の最中だ。すまんがこの住所へ送ってくれないか。お前の処には、防護容器あるのか？」
「そんなものあるわけがない。ここで一番危険な生物は人間を除けば、オコゼくらいなんだぞ。」

「判った。ちよつと電話貸せや。市外通話問題ないな。」

吉村は電話を借り、ある場所へ電話を掛けた。

「ああ、吉村です。すみませんが、この番号へ処置済み回線で掛けて戴けませんか。PBXは通るはずです。宜しく。」

折り返し掛かってきた電話を吉村が直接取った。

「吉村です。処置済みですね。ただ今、休暇で伊豆下田へ来てるんですが、例の生物の類似情報があります。要員を出していただけますか。サンプルは取っているそうです。ここには防護容器ありませんのでお願いします。場所は下田海中水族館、親会社はフジタ観光だと思っています。詳細は飼育課長の内村さんから。それではお願いします。私は3日後、機構に戻る予定です。」

「おい、いったいどこへ掛けたんだ？なんかもものしい感じがしたが。」

「ああ、一応、政府の機関だ。多分、明日その人間が来る。サンプルを渡してくれ。上には政府から話を通しておく。」

「あのゼリーの塊はそんなに危険なものなのか？」

「まだ判らん。ただし、これまで発見された事の無いものであることも確かだ。」

「しかし政府が動くような代物だろ。」

「政府が動いてるのは別の意味でだ。心配するな。何かあつたら俺の携帯に電話してくれ。」

そう言つて吉村は自分の名刺を内村の前に置いた。

「内村、心配そうな顔をするな。今夜は久しぶりに一杯やろう。」

「ああ・・・だがなあ・・・」

「大丈夫だ。場合に寄つちやお前もプロジェクトに一枚噛んで貰う事になるかも知れんし。」

「判った。心配しても始まらん。お、もう5時近いな。管理棟のレストランで待っていてくれるか。俺のツケで良い。今電話しておく。」

「おい、このレストランくらいは払えるぞ。今や潜水調査艇の権威なんだからな。」

「お、言っね。それじゃ今夜はお前の奢りな。すまんな。」

「まてい……………」

拡散（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

再調査（前書き）

第27話です。

ファイルの問題は少しずつ判って来ました。多分、もう起きないと思います。

再調査

飼育棟を出た吉村はレストランで妻子と落ち合い、内村を待った。内村はレストランの責任者に、閉館時間過ぎてても待たしてもらえよう交渉し、吉村達には一旦自宅に着替えるからここでビールでも飲んで待っていてくれ、と言い残し、車で1分ほどの社宅へ帰って行った。確かに魚臭い作業服に黄色いゴム長姿ではどこへも出かけられなかった。レストランでは吉村と恵美子にはビール、子供達にはミカンジュースが出され、当座のつまみにとキビナゴの丸揚げにレモンを搾り、醤油をたらしたのもや、タタミイワシと呼ぶ、シラスを型に入れて薄く干したものを軽く炙ったものなどが出された。子供達は地元産のテングサで作られたあんみつに大喜びしていた。ほどなく内山が着替えて、妻子と共に戻ってきた。内山の家族は妻の有紀と小学5年の一人娘由里の3人家族だった。内山は車を水族館の駐車場に置き、タクシーを呼んだ。吉村と飲むなら車では行けない。二人の妻達はすぐに打ち解け、井戸端会議を始めていた。子供達も、親の親密さが安心させたのか、お互いのDSで何かやっていた。タクシーが、着いたのは水族館から10分ほど走った小料理屋だった。ここの座敷を占領して飲み明かそうと言うのだ。小料理屋の主は内村の知り合いで、住まいが2階であるため、店を閉めてからでも飲んでいられた。幸い季節的に子供達が寝てしまっても、座敷なら問題は無かったし、小さなTVも座敷には置いてあった。料理は最高レベルだった。にもかかわらず、子供達にはハンバーグ定食が出てくるというフレキシブルさも同居している。特に魚の見立てが逸品だった。キンメダイなどという下須な魚には目もくれず、白身は旬のイサキ、青物は地産のイナダ、赤身は遠洋の本マグロという刺身の取り合わせは十分に満足の行くものだった。魚だけでは無い。4日ほど前に駆除で撃たれた鹿のもも肉の叩き、春先に採って水煮し、冷凍してあった山菜と小アジのマリネなど、地場の産品

をほどよく組み合わせた料理は、よくぞこの田舎町で、とうならせるものがあつた。酒もコレクションと見まごうばかりの各地の地酒を取りそろえ、この時期の燗酒は料理の味を落としますから、という主の勧めで、よく冷えた冷酒を良くできた料理と合わせるの是一時の至福だつた。春夏秋冬時々々の産物を時期に合わせて調理するのは食の真髄であろう。

一同が満足して席を立った頃には、すでに日付が変わろうとしていた。結局、吉村が払うことになった料金もびつくりするような値段だつた。子供も含むとはいえ、7人が飲んで食べて1万5千円でお釣りがくるのだ。それで儲かるのか？と聞いた吉村に、主は、別に特別に高い食材を使っているわけではありませんから、手間賃だけ戴くようなもので、丸儲けです。と笑顔で答えた。

吉村と内山はそれぞれタクシーを呼んで貰い、ここで別れる事になった。子供達はすっかり寝入っていた。

至福の一夜の後吉村一家はホテルの周辺を散策するだけで温泉三昧の二日間を過ごし、横浜、金沢八景の自宅に戻った。翌日出社した吉村は、予期せぬ喧噪に巻き込まれた。内村のサンプルが「みこもと」の採取したものとほぼ合致したからだつた。「みこもと」がこのサンプルを採取した日から、およそ5週間で小笠原東海域から伊豆半島まで拡散したのだろうか。これまで知られている海流に照らすなら、それはあり得なかつた。中層、深層にこれまで知られていない海流があり、それに乗った、あるいはこのプリオン類似タンパクの集合体が移動能力を獲得した、と結論づけるしか無かつたのである。さらに、海自の滝川から、中国とロシアが日本のEEZ付近で大規模な搜索活動を行っている、という情報もたらされた。それも1力所だけでなく、数力所に亘って同時に搜索活動を行っているらしかつた。また米軍偵察衛星の情報ではムルマンスクのロシア北洋艦隊のうち、半数程度が姿を消し、この時期なら通行可能な北極海航路に出ている可能性が指摘されていた。なぜなら、これだけ

の艦艇が動いているにも関わらず、大西洋方面には何らの動きが無いからだ。海洋調査機構上層部はこの中国、ロシアの動きを警戒して、「なつしま」と「みこもと」の出港を見合わせよう、という意見が多数を占めたが、核汚染の調査は一刻を争うと言う意見に押し切られる形で予定通りの出港を決定した。しかし、非武装の調査船のみではリスクが大きすぎるのは事実で、防衛省と非公式に折衝した結果、海上自衛隊も核災害訓練の一環として所要艦艇を同一海域に派遣する、という形で、「みこもと」の調査海域に同行する段取りが出来ていた。

乗組み員の休暇から1週間後、準備万端整った「みこもと」と「なつしま」は横須賀の調査機構岸壁を離れた。すでに海自の護衛艦「あさぎり」と「ゆうぎり」、「ひゅうが」、「あたご」、「みょうこう」それに海上保安庁の遠洋航海可能な巡視船2隻が同じ海域へ向かっていた。

さらに確認は出来ないが、「そうりゅう」級潜水艦が2隻、現場海域に向かっていると思われる。

前回と違い、今回はだいぶ荒れた海での作業になりそうだった。大陸の低気圧がベーリング海で発達し、台風並みの勢力を持って停滞していた。その影響がこの海域にまで及んでいたからだ。それに、はるか南西ではあるが、台風が発生し、フィリピン東方海上を発達しながら北上していた。しかしまだこの海域へはその影響は及んで居なかった。

前回のGPS記録を頼りに、海域へ到着した「みこもと」と「なつしま」はただちに放射線量計測を開始した。「みこもと」の記録に基づく位置（米潜水艦の着底位置）南西に5海里ほど行ったところで最大線量を記録した。15万2千ベクレル/Cm³というところでもない値だった。「なつしま」は、ここから海流の方向に沿って南下、100ベクレル/Cm³になるまで追跡し、そこから広がりを知るため進行方向と直交する針路でやはり100ベクレル/Cm³に下がるまで追跡、その航路を戻って同様に測定、汚染源方

向に1海里ほど戻って同様の行動を行うため、「みこもと」から離れていった。この作業には巡視船1隻が「なつしま」と同行して協力することになっていた。もちろん、巡視船にも放射線モニターの装置は搭載されていた。

すでに気泡は発生していなかったが、海水温度は周囲より2度近く高く、これから逆算して汚染源の温度は摂氏200度近いと見積もられていた。「みこもと」に乗り込んだ原子炉技術者の相田は、おそらく炉心が環境に暴露されている、と想像していた。一次冷却水配管が破損しただけでは、ここまで温度上昇することは無いと断言していた。また、相田はスクラムが為されなかった恐れがあるとも考えていた。つまり原子炉が核連鎖反応を発生させたまま、環境に炉心を露出させている状態だ。ただ、この辺は上から放射線をモニターしているだけでは判らない事ばかりだった。「なつしま」と別れた「みこもと」はサイドスキャンソナーでの海底走査を開始した。

サイドスキャンソナーでの海底走査の結果、海底は僅か1月に満たない時間で大きく変化していた。音響伝搬の異常はすでにドームではなく、海底全面に広がっていた。また、水深250mより浅い部分にまで幽霊のような反応が現れており、海中はプリオン類似タンパクで埋め尽くされているようだった。前回の走査で音響異常域の屈折率が判明していた為、それに基づいて補正をかけた結果、海底に横たわる中国潜水艦の残骸と思われるものを発見できたのは幸運だった。その周辺に潜水調査が可能であるかは未知数だった。残骸の周辺は海底から2000m以上の厚さで異常域が広がっており、そこからすそ野を引くように、なだらかな傾斜で海底全面に広がっていた。

「野瀬さん、どうですかね、『みずなぎ』で、浅い部分の『幽霊』は調査可能だと思いますか？」

「そりゃ、吉村さん、可能ですけどね、当座人間を送るのはリスクが高いんじゃないですかね。なにせ前回との様子が違いすぎますか

らね。」

「そうは言っても、他に何か方法があります?」

「私としては、田中君には悪いが、最初に『ドリー』を送って見るべきじゃないかと・・・」

「『ドリー』はもつと深いところで使いたいのです、実は・・・」

「そうは言っても、もつと浅いところでの安全が確認できなければ、深いところへ使いたくても使えないぞ。」

「その通りなんですがね・・・」

「『金魚』に全周カメラ積んで引くのはどうでしょう?」津田が言った。

「対水圧と照明に問題があるんだよ・・・」

「それなら解決出来るかも知れませんよ。まず対水圧の問題は、『みずなぎ』のポッドカメラを流用すれば解決します。確か、『金魚』の観測ユニット固定金具はポッドと共通じゃ無かったでしたっけ?」

「それだと『金魚』を改造することになるけれど?」

「ええ、でも『金魚』にはドンガラの予備が何個あったはずですよね。」

「ああ、あるな。全部で4個だったかな。」

「その1個を改造すれば良いんじゃないですか?」

「改造は出来るだろうが、対水圧はどうする?『金魚』の空気室はそれほど大きな水圧には耐えられないぞ。」

「ええ、だから空気室は無くします。その代わり、『かいえん』用の予備の浮力体をビニール袋か何かに入れて、ドンガラ内部に貼り付けます。中性浮力か、ちょい浮きくらいなら、浮力体もそう多くは要らないと思いますし。」

「なるほど、それなら何とかなりそうだな。」

「それと照明は全周カメラと同軸に取り付けければ、一つのマウントで済みます。」

「それは良いが、電源はどうする?『金魚』には照明を点灯できるほどの電源容量のケーブルは無いぞ。」

「ケーブルは有りますよ。『ドリイ』のケーブルを使えば良いんです。あれなら十分な電源容量持ってます。『金魚』の曳航索に『ドリイ』のケーブルをクランプするだけで済むはずです。」

「ああ、それは良いアイディアだ。それなら何とかなりそうだ。黒岩、どうだ出来そうか？」

「可能だと思います。工作室を使って構いませんか？」

「ああ、占拠して構わないぞ。加工屋連中も全員使って良い。船の持つてる材料が必要なら、俺の方から機関長に話は通す。」

「それじゃ、早速始めます。」

「頼んだ。」

再調査（後書き）

ご意見感想お待ちします。

再調査（前書き）

第28話です。

再調査

『金魚』の改造が終わるまで、「みこもと」は海底の音響異常域がどれほどの広がりを持っているのか、音響調査を行ったが、ピークから10海里以上離れても海底から数十mの処まで音響の伝搬異常を観測していた。改造が終わるまでのおよそ半日以上かけて、東西南北を調査したが、この状況に変わりは無かった。「みこもと」の観測スタッフは想像以上の広がり、一様に驚きを隠せなかった。まだ増殖のメカニズムすら判明していないと言うのに、僅か一月余りでここまで増えるのは脅威と言うほか無かった。プリオンに類似した構造を持つとは言え、プリオンと同様のメカニズムを持っているのかさえ判明していない。そしてさらなる脅威は、「金魚」を曳くことで判明した。改造された「金魚」は最初のアイデアの他に、黒岩独自のアイデアが盛り込まれていた。その一つが「みずなぎ」の水中翼システム用サーボ制御装置だった。「みずなぎ」用の予備を流用して「金魚」の走行深度を決める潜舵を可変式に改造したのだ。これにより一旦回収すること無く走行深度を可変出来る。それまでの「金魚」用ケーブルでは電流量の問題で搭載できなかったが、「ドリイ」用ケーブルを使うことで余裕の出来た電流量がそれを可能にした。また制御にも、本来「ドリイ」制御用の多芯ケーブルが使われずに遊ぶ形になっていたものを流用していた。投入された「金魚改」は、音響トランスポンダにより「みこもと」船内の「ドリイ」制御室から1m単位で制御が可能になっていた。

水深50mを越える辺りからそれは見え始めた。例のE1と思しき発光現象だ。照明を点灯した全周カメラに捉えられたのは、海を埋め尽くさんばかりの、「みずなぎ」が発見した例の巨大生物だった。可変式の潜舵を操作して曳航深度を増すほどにその密度は上がって行き、水深250m辺りではE1による発光で照明が不要なほどに

密集していた。そして当然ごとくそれは起こった。

「金魚」と巨大生物との衝突が発生した。突如針路上に現れたそれを、深度を可変出来る様になったとはいえ、曳航されている「金魚」が避ける術は無かった。全周カメラの監視下、巨大生物の中に「金魚」が潜り込んでいく様はかなりシニールなものだったが、巨大生物の透明性がそれを和らげていた。しかし、巨大生物に完全に入り込んですら、曳航索にかかるテンションに大きな変化は見られなかった。「金魚」が生物に入り込むにつれ、それに先行する曳航索が生物の体を切り裂いて行く。しかし、濃いスープをナイフで切っても何も起きないように、切り裂かれた部分は自動的にふさがって行く。不思議な光景だった。「金魚」と曳航索が通った跡に起きる発光現象でそこを通ったと判るだけであつた。あの海底に蟠集していた「高粘度海水」と全く同じであつた。そして、「みずなぎ」が受けた電撃は全く発生していない。

モニターを介してその一部始終を見た「みこもと」の研究員達は「金魚」が引き起こした状況でパニックに陥っていた。果たしてこの巨大な怪物は生物と呼べるのだろうか。

「吉村さん、これは個体ではなく群体だと思います。」海棲生物学の村木は吉村にそういった。

「それは判るが、なぜ、『みずなぎ』の時は、個体のような反応をしたのだろうか。」

「そういう群体もあります。オビクラゲの仲間。群体を構成する各細胞がそれぞれに分化して、別の役割を担います。これに少しでも似たものを探すとすれば、イシクラゲでしょうか。もっともこんなスープみたいなものじゃありませんが。」

「なるほど。しかしこの大きさと群体つてのもなあ・・・」

「吉村さん、実験室での刺激試験で反応するもののがかなり判ってます。『金魚』使って試験できないでしょうか。」

「それは第二段階にしよう。今は海中がどうなっているのか、が先

決問題だ。」

「判りました。刺激すると何か判ると思いますので、是非やらせて下さい。」

「判った。優先順位を上げておこう。」

「お願いします。」

「田中君、『ドリイ』を降ろそう。このままじゃ何も判らん。特に沈んだ潜水艦がどうなっているのか知るのは最優先事項だ。」

「でも大丈夫ですかね。」

「君も見ただろ。『金魚』と曳航索が入り込んでも何も起きない。

『ドリイ』も大丈夫だ。それに最悪でも自律制御で浮上は出来る。」

「判りました。それでは『ドリイ』を降ろします。」

「頼む。当初は電池節約のためケーブル曳くのか。」

「はい。丁度『金魚』に使ってるんで、用意は出来てますから。以前のように動けなくなったら、切り離して自律制御させます。」

「そうしてくれ。長野、水中データー伝送は行けるか？」

「屈折率が判ってますから、大丈夫だと思います。マルチパスはキヤンセルします。」

「よし、それじゃみんな動こう。『ドリイ』を降ろすぞ。」

「みこもと」は一旦停船して「金魚」を引き上げ、「ドリイ」を降ろすためのマニューバーに入った。海流を読んでおよそ沈没潜水艦直上と思われる位置へ船を動かし、「ドリイ」投入を開始した。

再調査（後書き）

ご意見感想お待ちします。

映像（前書き）

第29話です。

9月、10月は例年仕事忙しいのですが、今年はどうやら地元だけで済みそうです。

何とかファイルを壊した分に追いつきました。

映像

「ドリイ」の観測ポッドには、全周カメラと放射線測定装置が搭載され、引き上げた「金魚」に使われた「ドリイ」用のケーブルが改めて繋ぎ直された。

「『ドリイ』、『ドリイ』、応答しろ。」長野が「ドリイ」制御室の通信端末に喋っていた。

「長野、なんだそれ？音声認識ができるのか？」

「ええ、帰港してから『ドリイ』のプログラムにちよつと付け加えたんです。」

「こちら『ドリイ』ステータスは正常。」「ドリイ」がボーカロイド風の声で答えた。

「『ドリイ』、こちら長野。音紋照合、確認しろ。」

「『ドリイ』了解。音紋照合合致、長野さんと認識。」

「よし、現在のステータスをダンプ。電池残量を音声で知らせる。」

「こちら『ドリイ』。電池残量は、メイン98%、予備1 97%、予備2 98%です。」

「なんだよそれ、長野。」

「えっ？ボーカロイドの声をパクったんですけど・・・」

「いあ、そーじゃなくてだ・・・なんで返事する。」

「ああ、元々『ドリイ』はAIなんで、これまで文字表示してたのを音声読み上げにしましただけです。」

「田中あ、これおまいも噛んでるの？」

「え、えっ、まあ、そのお・・・」

「おまいらなあ・・・いいじゃん！！どこまで音声制御できるのよ。」

「基本的なコマンドだけです。複数コマンドを一度に音声で命令はできません。」

「ふーん・・・俺でもできるのか。」

「音紋登録すれば……」

「早速やってくれ。」

「はい。『ドリイ』音紋登録。」

「はい、長野さん。音紋登録起動しました。」

「吉村さん、そのマイクに自分の名前を3回言つて下さい。」

「吉村、吉村、吉村。これでいいか。」

「音紋記録、アクセスレベルをキーボードから入力して下さい。」

「アクセスレベルはA、全コマンド許可と……」

「登録完了しました。登録者：吉村主任、アクセスレベルA」

「吉村さん、そのマイクで『ドリイ』に音紋照合と言つてみて下さい。」

「『ドリイ』音紋照合。」

「『ドリイ』了解。音紋照合合致、吉村主任と認識。」

「これで吉村さんの声でコマンドできます。」

「なるほど。ちょっと試してみよう。『ドリイ』カメラを左右に振れ。」

コマンドに従つて「ドリイ」がカメラを左右に振つたのがモニターで確認できた。

「いいねえ。これリンクが繋がつてる限り自律行動中でもコマンド可能なのか？」

「ええ。ただし自律行動中は『ドリイ』の判断ルーチンが優先しますが。」

「うん、そうだろうな。さて、『ドリイ』を潜らせよう。」

「了解。」

ケーブルを曳いた「ドリイ」は慎重に深度を増していった。ドリイのカメラには巨大生物の姿が密集している様子が捉えられていた。水深1000m付近で高粘度海水との境界面に到達した「ドリイ」はそれまでの重力沈下から、推進装置を起動して動力沈下に移行した。前回と違い温度上昇流を避けて沈下しているため、沈下自体は静穏なものだった。放射線測定装置の数値も何故かあまり上昇して

いない。海面までわき上がった温度上昇流の測定結果からすれば、酷く考えにくい状況だった。放射性核種が温度上昇流からあまり拡散していない事になるのだ。

水深1600m付近でケーブルを切り離した「ドリー」は自分の持つ電池だけで残る1400mほどを沈下し始めた。前回のデーターから最も効率の良い推進器回転数を取った事で、電池の消耗は最低限に抑えられていた。呼吸する空気を考えなくて良い「ドリー」は沈下に時間を掛けても問題ない。分速数mという気の長くなる速度で海底を目指す「ドリー」だったが、それでも3時間ほどで海底がフラッドライトの照明に現れた。海底から10m程度の位置を保ったまま、「ドリー」は矩形搜索に移行した。現在位置を原点としてカメラの視野、視界を10m程度と仮定した上で、原点から10m進み、針路を直角に変え、さらに10m、これを繰り返し、原点に戻ったなら10m進んでそこを新たな原点とし、同じ動作を繰り返す。次に新たな原点に戻った時、最初の進行方向と90度異なる方向に10m進み、同様な搜索を行う。スパイラル矩形搜索と呼ばれる手法だった。

海水の粘度による抵抗が大きいため、電池の容量が心配されたが、スパイラルを1周しただけで目的の潜水艦を発見した。大量のタンパク質が存在するにもかかわらず、海水の透明度が高い事が有利に働いたのだ。「ドリー」は全体を俯瞰するため、一旦上昇し、フラッドライトの水中での限界付近からカメラを振って潜水艦の全体を視野に収めた。潜水艦は後部から中央部に掛けて巨人の手で握りつぶされた様に圧懷しており、後端から1/3くらいの部分に破口が見られた。全体像をカメラに収めた「ドリー」は、破口部に向かって接近して行った。

破口部は他の圧懷部分のように、隔壁が破壊されなかった事で部材の延び限界に達し、溶接部分が裂けたものと思われた。間違いなく原子炉区画と思われた。原子炉区画は遮蔽のため、その前後の隔壁を厚くする。それが他の隔壁との強度差を生み、原子炉区画部分だ

けに裂け目が生じたものと思われた。

破口部分は一部に海水の濁りが生じていた。接近してみると濁りは内部ではなく、破口の外側から発生していた。多分、高温の海水に触れたタンパクが変異して透明性を失っているのでは、と想像されたが、接近を試みた「ドリイ」の放射線測定装置が極端に高い数値を示し、また「ドリイ」搭載の電子回路にエラーが生じたアラームが発生したため、それ上の接近ができなかった。

海中で電子回路にエラーを発生させるようなレベルの放射線量というのは、想像の難しいレベルの放射性物質が海中に放出されていることを示していた。このような状況から、「ドリイ」は破口から距離を取り、エラーを起こしたデバイスを遮断、自己診断に入った。

自己診断の結果、メモリー素子の一つがビット欠けを起こしており、復旧出来ない事から、中性子線の存在が疑われた。線や線では海中で「ドリイ」のように耐圧殻に囲まれた電子デバイスに影響を及ぼす事はできない。線は透過するかも知れないが、海水中であるため、電磁波である。線の透過距離は大きくないし、導体である耐圧殻の遮蔽効果も無視できない。可能性が一番高いのは中性子だった。しかし、それが示すことは、核燃料の環境露出だ。「ドリイ」管制室は、マニピュレーターに付いたCCDカメラを故障覚悟（CCDは放射線感受性を持ち、高線量では受光素子が破壊される。）で線量が低い部分の裂け目から内部に入れることを決断した。マニピュレーター先端部の照明に照らされて見えた内部は酷いものだった。圧力容器が破断していたのだ。数mを隔てた裂け目からですら燃料集合体が直接見える状態だった。そしてそこから見えるチェレンコフ光の状態はこの燃料集合体がいまだ核分裂連鎖反応を起こしている事を示していた。

深刻な状況だった。周囲の海水は膨大な量であるため、冷却される燃料集合体は溶融することすらできず、燃料ペレットに含まれるU235と副次的に生産されるPt239が尽きるまで、核分裂連鎖反応による放射性物質を排出し続けることになる。ここまでの状況

が判明した時点でCCDカメラは映像を送ることが不可能になった。僅か数秒だったが、得られた情報は貴重だった。中性子がデバイスに飛び込んでも不思議では無い状況を確認した「みこもと」スタッフは、即座に「ドリー」の回収に入った。

映像（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

専門家（前書き）

やっと30話までできました。

専門家

吉村たちは「ドリイ」の回収を田中たち「ドリイ」班に任せ、今回乗り組んだ原子炉技術の専門家と状況の検討に入った。原子力安全委員会から委託を受けた原子炉技術の実務家である北村と原子炉設計、特に压力容器の設計に携わる志村、放射線測定が専門の東京大学の鈴木の名に、吉村、長野と海棲生物学の村木、海洋学の望月などが加わった状況の検討は陰鬱な空気に包まれていた。原子炉の状態が想像以上に酷いことがその原因だった。

口火を切ったのは志村だった。

「想像以上に酷いです。压力容器の破断など、これまで試験ですら見た事がありません。おそらく、冷却水循環が停止して短時間で内圧が上昇し破断したと思われますが、圧懷してからでは周囲の水圧がありますから、破断できません。压力容器の破断は圧懷前に起きていたものと想像します。」

「圧懷前に压力容器が破断???そんなことがあり得るのか?それに『みこもと』の音響観測装置は推進器音停止から、圧懷まで捉えている。1時間に満たない時間で压力容器が破断するほどの内圧上昇が起きるのかね?」

「無いとは言えません。発電用原子炉などでしたら、そういう事が発生する以前に逃がし弁が開いて、ウエット・ベントという状態になります。これは圧力を上げている原因の水蒸気を格納容器下部にある、圧力調整室に導き、内部に貯めてある水の中に放出する事で、水蒸気と水という相による体積の差を用いて圧力を安全なレベルに保ちます。しかし、軍用の場合、この圧力調整を行う必要が有る、という状況はすでにエマージェンシーであり、多分それは海中に直接放出されることになるはずですが、しかし、海には深さがありますから、どんな水深でも放出が可能だとは限りません。少なくとも放出出来る限りは、その水深での水圧より、放出される水蒸気の圧が

大きくなければ、放出はされず、圧力容器内圧は水圧と同じ程度に保たれます。つまり、この潜水艦は、圧力容器が破断する圧よりも深く潜ったと言っことになります。それでも、原子炉区画が先に圧壊して、水で満たされたなら、破断は起きなかったでしょう。内外圧が均圧すると思いますから、その時点で圧力容器に掛かる力はゼロになります。そうではなかったから、圧力容器が破断したのだと思います。」

「説明は理解できるが、本当にそんなことが起きるのだろうか。」

「潜水艦の原子炉は加圧水型と呼ばれるものがほとんどです。ですから、圧力容器には一定上の圧力が掛かっているのが普通の状態です。本来は圧力による破断は発生するはずがありません。」これは北村だった。

「しかし、圧力容器に使われる金属材料が不適切な場合、放射線脆性により、硬く割れやすくなります。これが発生しているなら、他の部分の圧壊による歪みが限界を超えた力を圧力容器に及ぼし、破断したことも考えられます。」

「なるほど。「漢」級はかなり設計の古い潜水艦だからあり得るかも知れないなあ・・・」

「ところで、原因についてはもう判りましたから、今後の対策をどうするのか、検討しませんか。」鈴木だった。

「しかし、鈴木さん、『みこもと』が出来ることはほとんどありませんよ。この船は観測、調査する事が仕事で、観測対象に何か出来る様なものは何ありませんよ。」

「しかし、深海潜水艇があるじゃないですか。事実上、この深度で作業が可能なのは『かいえん』だけですよ。」

「鈴木さん、そりや確かに、深海潜水艇はその耐圧部分の厚さがありますから、普通の潜水艇よりは放射線遮蔽に優れているかも知れませんよ。でも、深海潜水艇を操縦するのは生身の人間なんです。いくらなんでも、いまだに核分裂連鎖反応が継続している炉心から数mの距離で仕事をさせることはできません。」

「しかし、やってもらわなければ、汚染が際限なく広がって、太平洋は死の海になりますよ。」

「あなた、本気でそれを信じておいでなんですか。」

「吉村さん、あなたこそ放射線の恐ろしさを知らない。だからそんなことが言えるんです。」

どうもこの鈴木はある種の人々の仲間のようであつた。吉村はこういう人種には容赦がない。

「放射線の怖さですか？あなたは実際に放射線、特に微量の放射線で恐ろしい状態になった方を見た事があるんですか？何より、あなた自身、放射線測定をおやりになっているわけで、それはとりもなおさず、ご自身が被爆していると言つことですが、あなた自身が恐ろしい状態になっているのですか。」

「いや、大人は良いんです。子供が心配なんです。」

「いい加減にしませんか？太平洋の海水には一体どれだけの放射背物質が含まれていると思つています？それにこの潜水艦の核物質が付け加わつたからといって、何ほどのことが起きるのですか？」

「放射性物質と言つても、核分裂生成物じゃありませんよね。核分裂生成物は放射線強度が違ふんです。」

「あのですね、非常に重いいくつかの元素を除いて、現在有る放射性物質はその全てが核分裂生成物なんですがね。」これは志村だつた。

「失礼ですが、鈴木さんのご専門は放射線測定とありますが、核物理学のご専攻なんですよね。」北村が聞いた。

「いえ、私は放射線測定、つまり環境中の放射線強度の測定が専門です。専攻としては環境学ですね。」

鈴木を除く、他の参加者の表情がそれと判るほど変わった。

「ということは、測定結果を基に、放射線の持つエネルギー量を測定して、放射性元素の特定などはなされるのですか？」

「それは核物理の範疇でしょう。私はそんなことしませんよ。人間の命が最初でしょう。」

これは調査機構の大ボカだった。現在必要なのは元素特定に基づく拡散予測を行う事で、この原潜による核汚染が人間生活とどのように関わってくるのかは、それ以降の問題だった。放射線の持つエネルギーを測定することで、分裂した核種をある程度特定できる。核種が特定できれば、それらの比重や性質が判り、それを前提にどの程度の範囲に拡散するかが予測可能なのだ。シンチレーションカウンターでどれだけの崩壊がカウントされるかは、作業に携わる人間の安全以外、現時点ではあまり重要ではない。

これが原子力発電所などなら、燃料ペレットの組成が判明しているため、核分裂生成物の分布は簡単に予想ができるが、相手が潜水艦の原子炉、それも中国であるなら、燃料組成は全く不明である。ウランが分裂して生成される放射性核種は限られているためその元素特定に問題は無いが、核燃料に含まれる不純物等が中性子を吸収して放射性核種に変わるような場合は組成が判らなければエネルギーを測定して特定するしか方法が無かった。吉村達はそのための専門家と思い込んでいた。おそらく調査機構もそうだったのだろう。

環境の放射線測定など、別に機器さえ有るなら素人でも可能だった。「みこもと」には、今回のミッションのため、それこそ必要以上に半導体式カウンターは積み込まれていた。また水中での放射線測定はそれこそ専門家ですらあった。要するに鈴木は今回のミッションには不必要な人間であったのだ。それは「みこもと」に調査機構が深海でも使えるように改造した放射線の固有エネルギー測定装置が積み込まれていた事が誤解を招いたと思われる。機器のキャリブレーションなどは専門家でなければ難しい。校正されていない機器でいくら固有エネルギーを測定しても、それは元素特定には繋がらないのだ。

困ったのは吉村だった。このままでは拡散予測が特定の元素だけになっってしまうそうだった。実質、最も拡散しやすいと思われる、ヨウ素134とセシウム131だけでも、それなりの拡散予測は可能だったが、重金属系の放射性物質についてはお手上げだった。幸い、

測定器のメーカーの人間が乗り込んではあるが、その校正を承認する科学的権威が居ない状態なのだ。結局、測定だけ行って、結果の数値の分析はネット経由で地上で行う事にし、校正の正否の判断は帰港してから校正記録を専門家に提出することで落ち着いた。多分、鈴木も東京大学というタイトルが無ければ、相手にもされなかったろう。東京大学の、という肩書きだけが信憑性を付与していたのだ。福島原発災害以来、このような人間が増えていた。

専門家（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

異変（前書き）

第31話です。

とんでもない仕事に巻き込まれて四苦八苦。それでも更新できる時間があるだけましなんでしょう。

多分、近々引越しをします。場合によってインターネット環境がしばらく無くなります。どうかご了承下さい。

異変

「みこもと」は「ドリイ」の撮影した潜水艦の映像をネット経由で本部に送り、原子力潜水艦に知見のある人間による分析と、今後の対処を問い合わせた。機構本部の返答は、現在「みこもと」にある機材で可能な限りの拡散防止を指示していた。また、同時に送った巨大生物の増殖については、現在、このタンパクの研究を複数の研究所で行っており、一次解析結果がもうすぐ出るらしいため、その結果を待つてさらに詳しい検討をすることになった。とはいえ、この生物については、最も知見を持つ人間は「みこもと」に乗り組んでおり、おそらく「みこもと」での限定された分析結果であっても、地上の研究所に与える影響は大きいと思われる。

吉村は「かいえん」艇長の長崎と助手の一の瀬、「みずなぎ」艇長の野瀬、助手の津田の4人と可能な拡散防止方法を検討していた。野瀬と津田が参加しているのは、「かいえん」の交代要員であるからだ。最初に5人が達した結論は、破断した炉心に対して取れる方策は無い点だった。艦外殻の裂け目から圧力容器までは数mあり、マニピュレーターでは届かない。放射線被曝の危険を考慮しないとしても、物理的に無理であった。そして、それが判ってしまえば、可能な方策は唯一、艦外殻の亀裂をどうにかする以外に無かった。「かいえん」には観測ポッドにアダプターを搭載することで、簡単な溶接作業などは可能であったが、3000mを越える深海でそういう作業をする訓練などではいかなかった。JAXAの墜落したロケットエンジン回収などの実績があるため、そのような作業にも対応可能、という予算獲得のための方便としての面が大きかった。確かに、試験などではつり上げのためのリップ取り付け作業なども行っており、溶接作業を行った事が無い訳ではなかったが、船体亀裂を塞ぐ、などという作業とは次元が違う話だった。

さらに生物学担当からは、タンパクの凝集部分で溶接作業を行えば、

さらなる凝集と電撃の危険があり、現在の凝集度であるならば、雷の直撃以上の電撃になる可能性が大きいという警告が寄せられていた。八方ふさがりだったが、亀裂を塞いだ場合、炉心部分で水蒸気が発生しても、水圧による沸点の上昇、低い周辺海水温による発生水蒸気の復水速度などから、水蒸気による均圧は発生しないのではないかと予測されているため、漏出の低減に関しては非常に有効と思われたのも確かだった。

「みこもと」が漏出対策に頭を悩ませて居た頃、「なつしま」では放射線計測の専門家が首を傾げていた。15万2千ベクレル/cm²という高い放射線を中心部で観測したにも拘わらず、その広がりが大きくなかったのだ。僅か50海里ほどで、規定値の100ベクレル/cm²にまで線量が低下した。あり得ない事だった。すでに潜水艦の沈没から1ヶ月近くが経過している。コンピュータによるシミュレーションでも小さく見ても広がり数百海里の範囲に及ぶと思われたからだ。海水温の違いによる局所の変動を疑った「なつしま」はさらに100海里地点まで足を伸ばしたが、そこではすでに10数ベクレル程度の放射線しか検出されなかった。

「なつしま」はさらに周辺を1辺100海里の区画に分けて観測したが、わき上がりの中心から南西に50海里程度、幅30海里程度の範囲だけが規定値より大きな値を示すだけであった。すでに「みこもと」の調査結果は「なつしま」にも知らされており、炉心が海中に露出している状況で、この程度の汚染の広がりには信じられなかった。

「なつしま」はこの汚染の広がり異常さを「みこもと」に伝え、海域汚染の垂直分布の調査を早急に行うよう依頼した。「なつしま」は何らかの原因で、汚染海水が急激に沈み込んでいる、と想像していた。

「なつしま」からの連絡を受けた「みこもと」では、漏出対策を後回しにして、「なつしま」からの依頼を調査するかどうかの検討会

議が開かれていた。

「『なつしま』からの連絡で、汚染海域が異常に小さいという事が判明しました。『なつしま』では、汚染水の沈み込みを疑っており、中層深度域に大きな広がりがあることを危惧しています。『なつしま』の搭載機器では250mより深い層の計測はできません。汚染水域の広がりは沿岸諸国に大きな影響を与えます。出口の見えない漏出対策を一時打ち切って、早急に調査すべきと考えますがいかがでしょうか？」吉村が口火を切った。

「現状では亀裂の閉塞は手持ち材料だけでは難しいでしょう。また溶接作業が難しいのならば、さらに手段は限られます。汚染源を絶つ事は非常に重要ですが、材料がなければ何もできません。少なくとも溶接を用いず亀裂を閉塞できる手段が整うまで、汚染状況を調べる事は次善の策と考えます。」志村が吉村に賛成した。北村も

「そうですね。今の『みこもと』には打つ手が無いと思います。水深250m以上の層を調査できるのは『みこもと』だけです。そこちに力を注いで、もし大きな広がりが見つかるのならば、その調査データは貴重なものとなるはずです。」

専門家の亀裂閉塞には打つ手が無い、と言う意見に一人を除いて反対意見は無かった。その反対意見を開陳したのは、本来ここに呼ばれるべき資格の無い人間だった。

「何を言ってるんですか。海中に壊れた原子炉が放置されて放射能をまき散らしているんですよ。それを止めなければ太平洋は死の海になるんです。放置できる問題じゃないでしょ！！」

「鈴木さん、あなたには具体的な亀裂閉塞の方法があるのですか？」

「そんなことは私が考える事じゃ無いでしょ！あなた方の仕事じゃないですか。その為に給料貰っているんじゃないのですか！」

「えー、鈴木さんは具体的方策をお持ちじゃないのですね。他にどなたかご意見はありますか？」

「無視するんですか？私の意見を。見過ごせない権威主義ですね！！」

「あゝ、保安員諸君、入ってくれたまえ。鈴木先生を自室までご案内してください。それでは、会議を進めます。他にご意見がありますか。……有りませんようなら、本船はこれより『なつしま』要請の調査を行います。最初の観測は『金魚改』による広域観測です。準備をお願いします。」

異変（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

潜水（前書き）

引越しのためインターネット環境がありませんでした。更新が遅れましたことお詫びします。

やっとケーブルTVの引き込みが終わり、無線接続を立ち上げましたが、携帯端末によるインターネットフェア（WiFi）アクセスを発見したAP全てに行う設定のため）が酷く、安定的に繋がるまで時間が掛かってしまいました。まだこの国にはスマートフォンは早いのかも・・・

それでは第32話をどうぞ。

潜水

「みこもと」は「金魚改」を曳航しながら、速度7ノット程度で、「なつしま」が作成した100ベクレル線に沿って移動していた。

「金魚改」の曳航深度は250m付近であった。

「吉村さん、ここまですでに30海里ほど曳いてきましたけれど、深くなるほど検出放射線量が少ないんですが？」モニターを見ながらシステム担当の長野が言った。

「うん、変だな。それでも何らかの原因で非常に局所的な沈み込みが起きてる可能性は否定できない。もう少し曳いてみよう。」

「了解。」

しかし、100ベクレル線辺縁部を100海里ほど曳航した後でも、深くなるほど検出放射線量が少なくなる現象は変化が無かった。

「志村さん、どうも理解に苦しむのですが、水深250mと水深10mで40ベクレル以上放射線量が減少しています。これについて何か知見はありませんでしょうか？」

「吉村さん、基本、私と北村さんは原子炉の機構設計、放射線防護設計が専門ですから、拡散についてそれほどの知見をもっているわけじゃありません。本来なら鈴木さんがそれを担うべきなんですけど、あの方じゃ無理だと思いますし・・・」

「吉村さん、放射線防護という観点から見た場合、こういうことは、なんらかの吸着剤を使った時に起きます。例えば水槽に汚染水を入れて、底部に吸着剤を設置した場合、表面の放射線量が高く、底部に行くほど放射線量が下がる、という現象ですね。ただ、元々の汚染水に含まれる放射線核種の量は変わりませんので、吸着剤の線量が大きくなっているわけですが・・・」

「北村さん、ということは、この海域でその吸着を起こす何かがあるという事になりますか。」

「ええ、そうなりますね。本来でしたら、汚染海水を分析して放射

性物質を特定する必要があるのですが・・・」

「取りあえず、搭載した質量分析機での分析は行っています。メーカーの方が乗り込んでますから、操作はできますのでね。」

「どんな結果が出てるんでしょう。」

「これは皆さんに報告していない理由なんです、表層水、つまり一番線量の大きな部分では、検出されるのはセシウムと僅かなヨウ素だけです。ラドンなどはこの辺まで来ると測定誤差に埋もれていくようです。ほとんど90%以上がセシウムですね。」

「ああ、それは当然ですか。U235の分裂生成物ですから、セシウムが一番多く検出されるのは当たり前ですね。」

「ええ、それで報告しなかったわけなんです、今、ちょっと思いついて、長野に100ベクレルまでの海域に含まれるセシウム総量をシミュレートさせてみてます。もうすぐ結果が出ると思うのですが・・・志村さんと北村さんをお願いしたいのですが、潜水艦の原子炉が今までずっと臨界状態だったとして、どのくらいの放射性セシウムが出てくるのか、試算お願いできませんか？」

「これまでの情報では、すごく大雑把な計算しかできませんですけど、構いませんか？ああ、吉村さんの意図するところは判っているつもりです。」

「それなら話は早い。早速お願いできますか？」

「判りました。」

こうして長野のシミュレートと北村の概算結果を付き合わせて判ったのは、汚染海域に存在するセシウムの量が異常に少ない事だった。およそ1千倍近い開きがあったのだ。この結果は原子炉技術者に大変な驚きを持って受け取られた。

「吉村さん、シミュレーションの信頼性は確かなんですね。」

「ええ、おそらく北村さんの概算程度には信頼性はあると思います。」

「誤差を一桁としても、大変な開きですね。何らかの吸着作用が働いているのでしょうかねえ。」

「沈没地点の海底は深海軟泥、炭酸カルシウム、つまりプランクトンの死骸が主成分です。海水は例のタンパクを除いて特異な組成ではありませんね。」

「とすれば、結論は一つではないでしょうか？例のタンパクが放射性物質を吸着している。」

「確かにこれまで発見されていないものであるのは確かですが、そんな能力までタンパク質が持てるのだろうか・・・」

「ともかくもサンプルが必要ですな。」

「その通りです。潜水調査を行いましょう。」

「みもと」は潜水艦沈没点付近へ戻り、「かいえん」の潜水準備作業に入った。同深度での作業は「ドライ」でも可能だったが、人間が乗らない事で小さく、安全係数を低く取つてある「ドライ」の耐圧殻は「かいえん」と比べると薄く、放射線遮蔽の効果が低かった。高粘度海中ではケーブルを引けないため、前回の調査でいくつかのメモリーにビット異常を起こした「ドライ」を自律モードで潜水させる事は最悪喪失を覚悟しなければならなかった。「かいえん」は有人であるため、あまり線量の高い部分に近づくことは出来ないが、それでも50mmを越える特殊鋼耐圧殻は放射線遮蔽にそれなりの効果があった。

準備が終わった「かいえん」は艇長の長崎と助手の一の瀬により潜行を開始した。

「こちら『みもと』、『かいえん』聞こえますか。」

「こちら『かいえん』感度良好。現在深度2500m、沈下速度0.9m毎分。海水粘度は前回潜入した時よりも高いようだ。艇内放射線量は0.7マイクロシーベルト。問題は無い。『みもと』どうぞ。」

音声オペレーターを担当しているのは「みずなぎ」助手の津田だった。彼は「かいえん」の制御システムにも精通している。長野と志村、北村が見つめているモニターには艇外の映像にスーパーインポ

―ズされた艇内外の放射線量が表示されている。それによれば、艇外の放射線量は艇内のその50倍程度に達していたが、状況から考えれば、かなり低い値であつた。

「かいえん」は「ドライ」が設置した音響トランスポンダを目標に潜水艦に接近して行つたが、長崎は前回の潜水とは様相が異なっていることに気づいた。潜水艦に接近するにつれ海水の透明度が落ちていくのだ。すでにフラッドライトの先は数m程度の見通ししか無かつた。

「『みこもと』こちら『かいえん』、なんか前回と様子が違つんだが・・・」

「『かいえん』、『みこもと』。どう様子が違つのですか。」

「『みこもと』、透明度が非常に悪い。前はこんなに透明度が悪くなかつたのだが。」

「『かいえん』、『ドライ』が潜水したときはそれほど悪くなかつたようでしたか?」

「『ドライ』よりもライトが強いから、遠くまで見えるんで気がついた。」

「なるほど。それでどう透明度が悪いんですか?沈積泥が巻き上がつてる感じですか?」

「いや、泥は巻き上がって無い。ライトが暗くなつた感じだ。それでも近距離だと、いつもと同じだから、ライトは正常と思う。光が届きにくなつてる感じだ。」

「了解。潜水艦は見えましたか。」

「いや、まだだ。もう20mは切つていると思うが艦体はまだ確認できていない。」

「おかしいですね。20mなら見えても良いと思うのですが。」

「15m、まだ見えない。10m、見えた。なんだあれは!」

「どうかしたか。長崎さん。」吉村がマイクを奪つようにして呼びかけた。

「吉村さん、艦体の亀裂部分が見えない。亀裂部分が真っ黒な海水

で覆われている。」

そのとき放射線量警報装置がアラームを鳴らした。

「現在、艇内線量20ミリシーベルト、蓄積線量からここに居られるのは後10分程度と思われます。」

「判りました。黒い海水のサンプル採取だけ行つて、至急その場を離れて下さい。」

「了解。サンプルはすでに採取済み、直ちにこの場を離脱します。」

「かいえん」は浮上シーケンスに入り、潜水艦の近くを離れた。

浮上中に採取したサンプルを防護容器に収め、浮上後の汚染を極力防止する措置を取り、順調に浮上した。

潜水（後書き）

ご意見感想お待ち致します。

タンパク（前書き）

更新が遅くなりました。いまだインターネットの接続環境が安定しません。無線LANを止めて有線接続に切り替えようと考えていますが、各部屋への配線でどうしても借家の壁を貫通する必要がある、躊躇しています。

お金持ちが多い閉鎖コンドミニアムで街自体の治安は良くなりましたが、インターネットの世界では逆に治安が悪くなっています。先日はWEPのパスを割られてパス書き換えられました。今はSSIDを隠していますのでそこまでのアタックは無くなりましたが、WAPにすると家族のPC全てを無線が落ちる（停電は良くあります。）たびに面倒見無いといけませんので、これまた躊躇しています。

それでは33話です。

タンパク

「かいえん」が持ち帰ったサンプルは直ちに船内に設けられた隔離施設で分析が行われた。サンプルは非常に高い線量を記録していた。「かいえん」も相当に汚染されていたが、仮設された洗浄装置により除染され、作業に支障が無いレベルにまで線量は低下していた。隔離施設での分析により、プリオン類似タンパクがその折りたたみ構造の中に、複数の放射性核種を取り込み、その放射線による構造変化がタンパクを可視光線域で不透明とするため「黒い海水」が発生した事が判った。また、タンパク外殻部の受容体構造が変化し、それまで最大で2カ所であった他タンパク分子との結合点が8カ所に増え、このため放射性核種を構造内部に取り込んだもの同士の結合が放射性核種が多い処では飛躍的に増加し、黒い海水の塊を作る結果になった事が判った。

このような分析結果から、周辺海域の汚染状況がシミュレーションと合致しない原因は、このプリオン類似タンパクが拡散すべき放射性物質を取り込んで凝集したためと考えられ、それを折り込んだシミュレーションでは、現在の拡散状況に非常に近い結果が得られた。さらに、このような凝集を起こした後、放射性核種を取り込んだタンパクが減少するにつれ、一般のものとの結合が多くなり、凝集外殻部には放射性核種を持たないタンパクが集まり、最も遮蔽が難しい線でも、その内部に存在する起電機構が線エネルギーを吸収するため外部への放射線量が著しく減少する事が判明した。ただし、放射性核種を取り込んだタンパク自体の放出線量は取り込んだ核種の崩壊による放出線量と大差なく、黒い海水部分は非常に高い線量を示していた。

これらの分析結果を受け、「みこもと」は拡散下流域での潜水調査を行い、凝集核となる黒い海水を確認、さらにその近辺ではタンパクの再生産速度が上昇している事も確認された。このタンパクの再

生産はプリオンと同様な機序で行われ、構造外殻に存在するアミノ酸受容体へ特定のアミノ酸が結合することで連鎖結合が始まり、ある点で長く伸びたアミノ酸結合が折りたたみを開始、タンパク分子が再生産される、という形である。これは利用できるアミノ酸の存在が多い場所では、相対的に急速に再生産が行われる事を意味していた。そしてそのアミノ酸の供給源は、海洋中心部では海棲生物に由来し、沿岸部では陸上の人為、自然活動からのものに由来しているようであった。そして、現在の海域では、放射線により分解されたタンパク自身が供給源になっているらしく、線量の大きい潜水艦近傍の海水中からは、100海里ほど離れた海域の海水の約20倍ほどのアミノ酸が検出されていた。

しかし、分析中に発見された放射性物質を取り込んだタンパクの性質はこれらの発見を全て霞んでしまわせるほど、重要な示唆に満ちていた。なんと、このタンパクは放射性物質を取り込んで変成した結果、電氣的刺激による整列が発生すると、双方向スイッチとして働くことが判ったのだ。これまで、タンパクが別のタンパクと結合する受容体は表面上に8カ所、正8面体それぞれの頂点の位置に確認されていたが、それが一つの正4面体だけになり、ただし各頂点は二重結合が可能になっていた。これは放射性物質で変性したタンパク同士で双方向の電流伝達が可能になった事を意味する。そして一つの頂点へ二重結合したタンパクの状態により、他の結合点のタンパクの状態が変化するのである。これは明らかに演算素子としての動作であった。およそウィルスの半分ほどのサイズの生体演算素子と呼んでおかしくなかった。現状の潜水艦亀裂部周辺では、このような性質を持つタンパクが相互に

無数に二重結合しており、一種の演算装置として働いていておかしくなかった。おそらく、タンパクは現状の外部刺激の状態でも最も効率的な増殖を行えるような素子の組み合わせを模索しているかも知れなかった。そしてそれは現状の増殖状況がそれを裏付けていると言えた。

「吉村さん、これはちよつと予想外の展開です。さすがに生体演算素子というようなものが出来上るとは想像も出来ませんでした。」
生物学の村木は明らかな困惑を表情に浮かべて吉村に報告をしていた。

「そうすると、村木の意見としてはすでに生体コンピューターが生成されていておかしくない、という事か。」

「ええ、そう考えた方が合理的です。今は潜水艦周辺のみですが、これがどこまで拡張されるか、増殖速度を考えた場合、ちよつと想像が付きません。」

「吉村さん、このタンパクの構造は、生体コンピューターというより動物の脳の構造に近いですよ。コンピューターに使われるスイッチング素子は、マトリックスの結節点としての機能しかありませんが、このタンパクは脳の神経節のような働きをします。」

「望月、すると何か、将来的には意志を持つ可能性が有ると言う事か？」

「ええ、そうなんてもおかしくないでしょう。」

「しかし、だとすると、人間の神経細胞よりはるかに小さいこのタンパクが、人間の脳の数千倍、数万倍の容積で凝集する事になるぞ。神経節の量から言つて、人間の脳の数億倍になつておかしくないぞ。」

「ええ、仮にこのタンパクが人間の脳と同様の働きをするとなら、そのキャパシティーは人間の数億倍になるでしょう。」

「それは知的な面で人間を凌駕する存在と捉えて良いのか？」

「それは判りません。基本的にはどのようにプログラミングされるか、に寄るでしょう。鯨の脳は人間よりはるかに多い神経節を持ちますが、人間に知力の面で勝るとは思えません。このタンパクもその特異性から、鯨の脳のような発展をする可能性はあります。」

「とはいえ、それは知性を持つ、たとえ鯨並みとしても、そういう事になる。その上でその容量、これは思考速度なのか記憶容量なのか良くは判らないが、それが人の脳の数億倍であるなら、いつかは

人を凌駕する事になるのではないか。そう考えるのがあくまでも普通の人の考えと思うが。」

「それは否定も肯定もできませんね。」

タンパク（後書き）

ご意見、ご感想お待ちします。

前書きに書いた理由で、更新のペースは落ちると思います。ご寛容下さい。

変異種（前書き）

第34話です。

相変わらずインターネットの不安定は変わりません。まあ、投稿で
きるだけ良しとしておきます。

変異種

この頃、北西太平洋一帯で軍事的には一大問題が発生していた。この海域でのタンパクの問題を知るのは米海軍だけであつたが、米国防総省と米海軍は先の新型原潜遭難を相当に深刻に受け止め、ハワイより西での原潜の活動の中止を決定、また電撃による基準電位変動による影響を最小限に抑えるための対策を全ての潜水艦に施そうとしていた。そのため核パトロール中のオハイオ級戦略原潜を初めとして、通常の哨戒行動を行つて居る原潜全てを一旦米西海岸の基地に呼び戻していた。この穴埋めのために、水上艦艇がそれまで原潜が受け持っていた区域の哨戒に当たることとなり、一時的ではあるが、太平洋艦隊に所属する水上艦が中露のEEZ近辺まで出張つて哨戒行動を始めたことから、中露、特に中国が相当な疑心暗鬼に陥っていた。米原潜の基地への集結を偵察衛星により察知した人民解放軍海軍は、水上艦の地域への増加を米国の新たな軍事行動の前兆と捉え、また先の潜水艦沈没をこの動きに連動したものと断定、準戦闘態勢に移行し、稼働潜水艦のほぼ全てを哨戒に当たらせていた。しかし、人民解放軍海軍には先の潜水艦沈没の原因調査を行うための装備は存在せず、タンパク巨大生物については全く知見を持たなかつた。このため電撃対策を行った潜水艦は無く、ついに2隻目の犠牲が発生してしまふ。それはハワイ、オアフ島付近での哨戒任務に当たるはずの「漢」級原潜だつた。概略の遭難地点は、先の潜水艦の沈没点から600海里以上南東に下つた、ミッドウェー島とウエーク島を結んだ中間点付近だつた。中国政府はこの潜水艦喪失について、武力攻撃の可能性を指摘し、武力攻撃による事が明確になつた場合、報復を行うと明言した。そして、完成したばかりの空母を含む艦隊を太平洋に進出させた。

これに対して米海軍も太平洋艦隊から二つの空母任務群を北太平洋海域に遊弋させ、中国艦隊への警戒を行う事態となり、北太平洋は

一触即発状態となった。

このような状況では「みこもと」も海洋調査など行えるはずがなく、中国の政府発表を受けて帰港命令が発出され、僚船の「なつしま」ともども、母港の横須賀へ向かっていた。そして出発時には別々だった調査参加の自衛艦が「みこもと」「なつしま」を中心とした小さな輪型陣を組んで併走していた。

しかし、その帰港の間も、後部デッキにコンテナとして搭載された放射線隔離施設では、「みこもと」研究陣による変異型タンパクの分析が続けられていた。隔離施設は40フィートコンテナの内部を仕切り、中央部に防護区画、両端部に二つの操作室と必要機器を設置してある。防護区画は白色ポリエチレン内張の外に厚さ2.5cmの鉛の層、続いて厚さ25cmのホウ酸水の層、その外側に厚さ5cmの蛇紋岩コンクリート層、最後に厚さ30cmのポリエチレン充填層、外壁は1cm厚のステンレス鋼板で形成されていた。内部の仕切りも同様な構造だったが、5cm厚の鉛ガラス3枚でホウ酸水層と空気層を挟んだ形の作業用のぞき窓が両端の操作部それぞれに2カ所設けられていた。防護区画内は常に大気圧より内圧が低く保たれており、作業資料の出し入れはエアロックを介して行われるようになっていた。分厚い放射線遮蔽層のため、防護区画内部は僅かな空間しか無く、その内側に作り付けられた4基のマニピュレーターにより各種作業が行われる。計測装置端末も全て作り付けられていたが、CCDによる画像だけは、CCDが放射線により破壊されるため作業用のぞき窓のこちら側にしか無かった。

高い放射線量を持つ変異型タンパクはこのような施設で分析が行われていた。確かに地上にある施設と比べれば、少々見劣りするし、作業エリアも限られたものだったが、必要な実験、分析は可能だった。

村木と望月が中心となって行われた分子生物学的実験、分析の結果、放射性物質を取り込んだ変位型と通常型の差異は、放射線によるタ

ンパク分子構造の結合破壊がきっかけになって発生している事が判明した。増殖のためのアミノ酸受容体が海中のアミノ酸分子を取り込んで連鎖結合を開始すると、特定のアミノ酸が結合した時点でアミノ酸鎖の折りたたみが発生し、その時、その折りたたみ構造に偶然に放射性物質を取り込むと、不規則にアミノ酸結合が破壊される。その時特定の結合部位が破壊されることで結晶構造の変異が起き、正4面体を二つ逆に組み合わせた形から、二重に重ねた形に変化する。それ以外の結合部位の破壊ではタンパクそのものが破壊され、アミノ酸連鎖は分解する。正4面体を二重に重ねた構造は放射線による構造破壊に最も強く、通常型の20倍以上も生存確率が高い事が判った。この変異型は二重結合の為か、外的刺激が無くても相互に結合し、また結合密度も高く、通常型のように単に粘度の高い海水レベルではなく、固体と呼んで差し支えない密度に達し、海中でなら特定の外形を保持できる程度の強度を持っていた。

このような状況から、沈没潜水艦付近の再調査が急務になっていたが、現在の海域の状況では海洋調査など行えるはずもなく、地上の整った施設でサンプルを再分析する以外出来ることはなかった。また、2隻目の沈没潜水艦の情報も入っており、そちらも早急に調査する必要があると思われたが、事情は同じだった。

ともあれ、「みこもと」と「なつしま」は母港、横須賀に帰着した。船体の除染は本土200海里以遠ですで行い、船内には洗浄で発生した高レベル放射線量の汚染吸着剤が残されていただけであった。洗浄水は吸着剤を使用した除染装置で除染され、自然放射線レベルにまで放射線量が減少した事を確認の上、生活用水として再利用していた。船の上で真水は貴重な物資なのだ。

帰港前に各部の線量測定を行い、ホットスポットの有無を確認した上で、両船は調査機構の岸壁に接岸した。接岸とほぼ同時に高レベルの放射線量を持つ変異タンパクのサンプルは厳重に放射線防護を施されたキャニスターに収められ、分析可能な施設を持つ原子力研究所に移送されていた。村木と望月はこの移送に同行して研究所

に出向き、研究所の放射線の専門家及び理化学研究所から出向いた分子生物学の専門家と共同で分析に当たるため、接岸と同時に「みこもと」を後にしていた。また今回乗り組んだ放射線、原子炉関連の専門家も同時に退船していった。

「吉村さん、どうもこれは再調査でしょうかね。」

今回の調査データを生データのまま地上のデータ分析システムに転送する作業を行いながら、長野は報告書作成のための数値データを選別している吉村に話しかけた。

「ああ、これだけの発見だ、再調査は絶対に必要だ。問題は海域の状況だろうな。」

海自の滝川を通じて、現在の北太平洋の軍事的状況を知らされている吉村はそう答えた。

「しかし、なぜ中国海軍は事故という判断を放棄したのでしょうか？」

「まあ、彼らには彼らの事情というものがあるのだろう。どこの国でも同じだろうが、責任の所在を外部に求めるのは、一種の防御本能と言えるからなあ・・・」

「しかし、1隻目はまだしも、2隻目は米海軍が潜水艦を引き上げた後ですよ。米海軍に責任転嫁するのは難しいんじゃないですか？」

「そこなんだが、前回、我々が発見した潜水艦は極秘開発で米国内ですら限られた人間にしか存在が知らされていない。こういう事があるのなら、中国としてもリストにある潜水艦全てが港に戻った事を確認したからと言って、それが全てと信ずるわけにも行かないだろう。」

「しかし、昨今の報道では、米海軍が引き上げた後、海自の潜水艦が撃沈したのではないか、という話になってますね。」

「うん、俺はこの話は中国一流の情報戦だと思うな。防衛省としても潜水艦の行動記録を提示するわけには行かんだろうし。」

「開示してしまえば、日本の潜水艦の行動が明らかになりますしね。しかし国会で追及が始まって居るようですよ。」

「困ったもんだ。ただ今の内閣だと開示しそうで怖いな。」

「海自の友人の話では、海自所有の魚雷の総数は予算書で明らかだから、それと現在数を比較して使用された魚雷が無い事を証明するみたいな事を言っていましたかね。」

「まあ、それも無理だろうな。数などどうにでもごまかせる、と言われた時にそれへの反証は出しようがない。」

「自分たちが承認した数をごまかしている、というのも何か矛盾したように思いますが・・・」

「連中はそんなことは気にしないよ。1分前に言った事でも、都合が悪ければ言っていない、と言い張る連中だ。」

「しかし、ひよつとすると我々も巻き込まれる可能性があるみたいですよ。『みこもと』の調査記録を開示しろ、と言っているみたいです。」

「別に『みこもと』は半官の調査船だから、記録の開示は依頼元、この場合は国だが、そこがOKならば問題は無い。特に今回の調査記録は依頼元の国だけの判断で開示できると思うしな。問題は変異タンパクだろう。ただし、これは調査目的とは微妙に異なる発見だから、開示しなくても問題は無いだろうと思うがな。問題になるなら前回調査だろう。こっちの情報開示は米軍が絡むから簡単には行かんよ。」

「そうですねえ・・・しかし、それも開示せよ、と言ってくると思いますかね。」

「そりゃ無理つてもんだ。依頼元は米海軍で、調査機構としては報酬も受け取っている。最低限、裁判所の命令が無ければ守秘義務違反に問われるからな。その上で、裁判所が開示命令でも出そうもんなら、今度は外交問題だ。いくら連中でもそのくらいの常識はあるだろう。」

「そつだと良いんですが・・・」

変異種（後書き）

ご意見、ご感想お待ち致します。

政治（前書き）

第35話です。

相も変わらず、我が家の無線LANに攻撃をしてくる輩が居ます。やっとおぼろげですが、どこから攻撃が来ているのか判り始めて来ました。今、特定するための無線装置を作り始めています。無線LANの周波数ならおそらく5mくらいの誤差で特定できるはずですが。

政治

この長野の心配は的中した。与党国会議員が国政調査権を盾に「みこもと」の調査結果の開示を求めてきたのだ。

「ですから、お渡しできる資料はそれだけしかありません。」

「嘘です。もつとあるはずです。国会議員の国政調査権に基づく請求を拒否なされると刑事罰がありますよ。」

「なんと言われようと米海軍からの依頼で調査した結果は私どもから渡すわけには行きません。どうぞ米海軍にご請求願います。」

「私は米海軍ではなく、あなたに要求しているのです。今すぐ出さない。」

「あなた、頭大丈夫ですか？米海軍の依頼に基づいた調査資料の所有権は我々には無い、と言っているのです。所有権を持つ方に請求して戴けますか。私は所有権者ではないので、私に請求されても意味がありません。」

「失礼な！私は国会議員ですよ。あなた程度、いつでもクビにできるんですよ。資料を出さなければあなたはクビですよ。」

「やってみたらどうですかね。半官とは言え、立派な民間組織の構成員を国会議員の名をもって解雇できるというならやればいい。」

「後で悔しがっても知りませんよ。」

「ええ、国会議員つてのも、決して安泰な地位じゃないですからね。」

「脅すつもりですか？」

「どっちがでしょうね。申し訳ありませんが、このやりとりは全て録音されていますが？」

「あら、事前に通告のない録音は違法だと思いますが？」

「え？お渡しした承諾書に全て書かれているはずですが、お読みにならなかった？」

「くっ・・・」

「残念ですが、お渡しした資料以上のものはこちらからはお渡しできません。後は米海軍の許可を持参載ければお渡し致します。ただし、私どもが所有する資料は全て一時資料で、処理は米海軍が行って居ます。デジタルデータの処理はそちらでお願いする事になります。また資料には米国家安全保障省による保安処置が施されています。その解読もそちらでお願いする事になります。これ以上無ければ失礼致します。」

「ちよつと待ちなさい。あなた日本国民でしょう。日本の国会が求めるものを出さないなんて、非国民じゃないですか。」

「申し訳ありませんが、あなたに言われたくありません。私は帰化した日本人ではありませんので。それでは。」

吉村は食い下がろうとする中国名の国会議員を尻目に応接室を出た。同席した調査部長は顔色を七色に変えながら、「吉村君、おい吉村君！」と呼び止めているが無視した。

廊下に出た吉村を追いかけてきた調査部長は、怒気を孕んで吉村を詰問した。

「吉村君、いくら何でも国会議員に失礼じゃないか。」

「部長、また3年前の繰り返しをなさるおつもりですか？」

「いつ、いやそいつもうつもりではないが、もう少し言いようがあるんじゃないかね。」

「どんな言いようがあるのですか？データ自体、米海軍の所有物であることは部長もご存じのはずですが？」

「そつ、それはその通りだが、魚心あれば水心ってことわざもあることなんだから・・・」

「部長、米海軍と敵対して今後有効な海洋調査が行えるとお考えですか？それとも、調査機構の存在意義はもう無いとでも？」

「いつ、いやそこまで言うつもりはないが・・・」

「であるならば、きちんと筋は通していただかないと。しかるべく許可を持ってくるのなら、別に資料を渡すのにやぶさかではありませんが、国会議員なら何でも可能と思われるのはこちらが困ります。」

「いや、それはそうなんだが・・・」

この調査部長は3年前、調査部次長職あつた当時、「みずなぎ」開発に関わる米海洋研究所への情報提供に対して吉村追及の最右翼であつた一人だつた。しかし、「みずなぎ」が成功した事で手のひらを返したように態度を変え、最終的には「みずなぎ」開発の功績をもつて、前部長が専任理事に就任して空席となつた部長職を引き継いだのだ。3年前とはその時の事を言つていた。専任理事となつた前部長は当時の次長の部長昇進を吉村に相談したのだ。「みずなぎ」開発の真の功労者が吉村であることは、機構内部のみならず学会や各探査会社などでも公然の事実だつたからだ。それを追い落とすかのような主張を繰り返した次長を部長に起用する事が今後の活動に影響するのなら、専務理事としては考えなくてはならない。そこで現場の責任を一手に引き受けている吉村に相談した。

「吉村君、忌憚のないところを聞かせてくれないかね。」

「理事、次長は別に悪意を持って私を誹謗したのでは無いでしょう。私がしたことは本来なら調査機構が独占できるものを、提供したわけですから、非難はされて当然です。私が困つたのは、いくら独占したとしても、特許の訴訟で負ければ『みずなぎ』は完成できないと言つ点を理解戴けなかつた事です。しかし、それは時間が解決すると思います。『みずなぎ』はすでに実績をあげています。失敗したわけでは無いのですから、次長も理解をしていただけたらと思います。」

「うむ。君がそう言うのなら問題はなかるう。いや、時間を取らせで済まなかつた。」

といういきさつがあつたのだ。もちろん、調査部長にはこのいきさつは知らされて居なかつたが、そこはそれ組織内の事、様々な噂が流れ、それとなくではあつたがこの部長もおぼろげに知る事になるのは当然の帰結だつた。それ以降、さすがに吉村への妨害じみた事は無くなつたが、権力へのへつらいは改善されていなかった。それが吉村の「3年前」という言葉の裏側だつた。

しかし、この件はそれだけでは済まなかった。この議員はほどなく、米大使主催の昼食会に招待を受けた。防衛大臣共々招待を受けたこの議員の隣には米国家安全保障省のアジア担当次官が着席した。そして議員を挟んだ反対側にはFBIから大使館へ出向した秘書官、防衛大臣と続いた。この昼食会以降、この議員は目立つ事を極力避けるようになった。昼食会に出席した他の招待客によれば、両隣の着席者と何事か深刻な顔で話していたらしかった。

そんな日本でのコップの中の嵐をよそに、情勢は激動を始めていた。きっかけは、日本政府が軍事的緊張を緩和しようと、プリオン類似タンパクの存在と、その集合巨大生物の存在、整列による電撃などの事実を公表したところから始まる。これは米国に取り晴天の霹靂であった。現内閣が一部からお花畑脳と揶揄される理由の強固な裏付けでもある、この突然の発表は米政府と米海軍にとり、厄介な問題を引き起こしたのだ。つまり、例の海域での米海軍の活動が、その電撃を引き起こす巨大生物の存在によるものであることを暗示的に暴露することになった。ここから簡単に類推できるのはなんらかの米海軍の軍事活動が、この巨大生物により影響を受けた事であり、それでは一体、何が影響を受けたのだ、という疑問が浮かぶのは当然であった。日本政府が公表したのは「みずなぎ」の遭遇したケースだけであったが、その同海域で米軍の空母任務群が活動しているのなら、米国の軍事機密を漏らしたとと変わりは無かった。左翼であろうが右翼であろうが、政治の実務に関わる人間であるならば、政治的に秘匿すべき事、ましてやそれが複数の国に関わる事柄であるのなら、調整も為しにいきなりそれを暴露することが、利害関係を持つ国に取って場合によっては宣戦布告に等しい、という事は常識として理解している。この政権にはその常識が欠如していた。市民運動家上がりを大量に抱え込んだ政権党ではそれが普通の事で有るのかも知れないが、残念ながら世界は彼らの常識では動いていないのだ。

米国はこの発表に激怒したが、時すでに遅しであった。中国はこの発表にかなり過激に反応した。しかし、物的証拠を突きつけられている事から、この発表を得意の「でっち上げ」と非難するわけにも行かず、「みずなぎ」の記録した水深が350mを越えて居る事を逆手に取り、公表されたスペックに基づいて中国潜水艦はそのような水深での行動能力は無い、とし、米軍の攻撃による撃沈の可能性がこれにより高まった、と米国への非難を強めた。これに対して米国は日本の発表を不本意ながら極力利用し、事故である可能性が否定できなくなったと、中国に反論した。

実際問題、中国として事故であったかも知れないことは十分に理解していたが、すでに引つ込みが付かなくなっていた。艦隊を動かすためには、相当な額の金が必要なのだ。艦隊一つが動けば、その活動期間中の燃料、食糧、兵への手当など、防衛予算の何割、といったレベルで費用が発生しておかしくない。そして燃料、食糧などは事前に用意が必要であり、それはとりもなおさず、すでに相当の金額が支払われていることでもある。ここで未知の巨大生物による事故であったなどという事を認めるなら、米海軍の攻撃という錦の御旗であるがゆえの出費に対する責任問題が持ち上がるのだ。そういう事情から中国、特に解放軍海軍幹部は振り上げた拳を下ろせなくなっていた。そしてその帰結は軍事衝突だった。現時点での世界2大軍事大国間の軍事衝突という、恐ろしいシナリオの実現が刻一刻と近づいていた。

政治（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

緊張（前書き）

第36話です。

何とか更新できています。

緊張

米中の艦隊が対峙したのは、奇しくも2隻目の潜水艦が遭難した地点からそれほど離れていない海域だった。艦隊戦闘となった場合、米海軍の有利さは歴然としていた。空母だけを取ってみても、「ニミッツ」級2隻を擁する米海軍の2個任務群は運用航空機総数で200機に達し、早期警戒探知、防御なども中国艦隊とは隔絶していた。中国艦隊はこの戦力差を補うためには弾道ミサイルを使用した核攻撃以外、方法がなかった。この時点では中国艦隊はまだ米艦隊の正確な位置を把握していなかったため、弾道ミサイルの発射は行われていなかったが、索敵範囲に入り、米艦隊の位置が判明すれば即座に発射出来る用意はなされていた。米艦隊はすでに空母搭載の早期警戒機を前進させる事で中国艦隊の位置と動きを掴んでおり、中国艦隊の探知圏を避けるかのように行動していた。米国軍事情報組織はすでに中国の弾道ミサイル発射準備を掴んでおり、これを発射された場合、それが戦域核であったとしても、核防衛上、米本土のICBM群を発射しない選択肢は無かったため、全面核戦争となる公算が大きく、極力艦隊位置を秘匿する必要があった。米国は中国偵察衛星の軌道を分刻みで把握しており、軌道変更が有った場合の米艦隊捕捉可能な窓の変化を即座に算出し、可能な限り艦隊を偵察に掛からない位置に移動させる作戦を採っていた。これまでのところ、この作戦は概ね成功しており、中国側はいまだに米艦隊の正確な位置を把握できていなかった。

しかし、米中両艦隊の薄氷を踏むような神経戦に終止符を打つ事象は海底からやってきた。偶然にも中国艦隊は2隻目の潜水艦沈没地点至近を通過する事になったが、その直後、輪型陣外周を警戒していたフリゲート艦の1隻から緊急通信が飛び込んで来たのだ。突然メイン発電機の停止によるブラックアウトが発生し、予備発電機をすぐに起動させたが、配電盤の不具合によりブラックアウトが継続

中という通信だった。これにより、ほぼ全ての主要兵装が使用不能となり、主機も遠隔制御不能、操舵装置も手動状態という事態に陥った。通信は艦隊内通信のみバッテリー電源により確保されていたが、それ以外は電源喪失により不可能な状態で有った。中国艦隊司令部はこのフリゲートを後方に避退させる決断をし、それを指令したが、その直後、ブラックアウトしたフリゲートの後方にあつた別のフリゲートから同様な状態に陥つたと緊急通信が入り、その後次々と輪型陣東側で対潜警戒を行っていた6隻のフリゲートが同様な状況に陥り、中国艦隊司令部は混乱の極に達した。最終的には空母の外周で対空エリアディフェンスを担っていた「蘭州」型中国版イージス駆逐艦までもがブラックアウトを発生した事で、中国艦隊は実質的な戦闘能力を喪失した。中国艦隊はこれにより針路を180度近く変更し、本土の基地へと帰還する航路に乗った。これ以降不可解なブラックアウトは発生せず、ブラックアウトした艦もそのほとんどが配電盤系の故障であり、予備の部品と交換することで通常航行には支障が無い程度に回復することが出来たが、戦闘行動はリーダーの一部、ソナーなどが使用不能となつたため、不可能だった。全面核戦争に繋がる状況は回避されたが、中国側が被つた軍事的、経済的打撃は深刻だった。しかし、中国側より、日米当局に与えた衝撃はさらに大きかった。中国艦隊が混乱に陥つたことを知つた米空母任務群は、危険を承知で偵察機を発進させ、中国艦隊の動向を探つたのだ。その結果、数隻の艦が電子兵装を全て停止させて漂流している事を発見したのだ。それには「蘭州」級も含まれていた。この事からCINCPACは中国艦隊に起きた混乱が複数艦でのブラックアウトと判断し、その原因は例の巨大生物以外無いと断定した。これは由々しき問題だった。ある意味では核戦争に匹敵する問題を孕んでいたのだ。それは海上通商の阻害であつた。巨大生物が海面を行動する船舶に襲いかかる事が明白になつたのだ。今はまだ北太平洋の限られた海域だけでも知れなかったが、この生物の増殖速度を考えれば、早晚全ての太平洋航路で問題が発生することは明

らかだった。そして多分ではあるが、最も短時間で影響を被るのは中国そのものだろうと思われた。現在の中国は海洋通商無しでは経済的に破綻する。早急な海中の調査が必要だった。

「みこもと」は3度目の同じ海域への調査に出発しようとしていた。今回は先の日本政府発表を受けて、巨大生物の脅威を認識した米国主導の下、国連海洋委員会が主体となった国際調査の形式を取っていた。すでに日本沿岸にはプリオン類似タンパクの小塊が無数に漂着し、沿岸漁業に多大な影響を与えていた。高い放射線量を持つ、変異型タンパクの存在はまだ公表されておらず、また沿岸にも漂着していなかったことから、核汚染に対するパニックは防げていたが、沿岸漁業、特に三陸沖から伊豆半島沖にかけての沿岸はまさに壊滅状態といえた。そして、魚類消費に対する影響はさらに大きかったと言える。日本で最大の水揚げ量を誇る沿岸が軒並みタンパクにより底生魚、回遊魚はもとより、エビや蟹、養殖のワカメまでが壊滅したのだから、当然だった。それでも日本海沿岸、九州西部などはまだ影響を受けておらず、そこからの供給で市場が継続されていたことで、パニックには陥っていなかった。ある意味、東北、関東大震災での原発被災がもたらした放射能パニックが役立っていたかも知れなかった。

このような社会的背景を背負った第3次調査はかなり緊迫した雰囲気にも包まれていた。これまでのサンプル調査でこのプリオン類似タンパクの性質はかなり判明していたが、これを阻止する具体的な手法は発見されていなかった。しかし、これまでの拡散状況から試算した結果は、約1年ほどで太平洋全域に広がり、3年で地球の全海洋がこのタンパクで埋め尽くされると示唆していた。したがって、今回の調査は前回までのように単に観測してサンプルを採取するのみでなく、なんらかの具体的な対抗手段を発見する必要に迫られていた。

「あゝ諸君、普段はこんな出航前訓示などしないんだが、今回は特

別なんで聞いて欲しい。今回のミッションは前回までと違い、例のタンパクが主たる目的になる。その上、かなり厳しいミッションだ。このタンパクに何らかの対抗できる手段を見つけない限り、太平洋どころか全海洋が死ぬ可能性が大きい。」

吉村は「みこもと」会議室に参集した観測、研究要員を前にこう切り出した。

「これは決して大げさに言っているのではない。現時点で判明している増殖速度から見ても、残された時間は太平洋だけで約1年、全海洋でも3年ほどだ。この時間で最低限増殖を抑制する手段が発見できなければ、人類は海洋を失うことになる。臨時に乗船した研究員含めて、それを念頭に調査、研究に取り組んで欲しい。以上です。」参集した要員からは声もなかった。あと3年で全海洋を失う可能性がある、それはとりもなおさず、人類の滅亡を意味していた。大気中の酸素の大半は海で作られるのだ。「みこもと」に勤務する要員は全てがこの事を理解していた。

緊張（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

再調査（前書き）

第37話です。

やっと妨害しているらしき処を特定しました。ここは閉鎖コンドミニアムですので、自身の自治会があります。さしあたりここに相談することになりました。非公式に接触したところ、どうも同様なケースが過去にもあったようです。これで済んでくれるなら万々歳なのですが・・・

それでは小説をどうぞ。

再調査

「みこもと」は横須賀出航後、野島崎をかわすと針路を北東に取り、三陸沖を目指した。三陸沖から日本海溝に沿って南下、巨大生物の存在をソナーで探知するためだった。「みこもと」には海底地形を探查するための曳航式サイドスキャンソナーが搭載されている。今回の出航前にサンプルを使った実験で、もっとも反射率の高い周波数を調べ、体の組成の水分が多い魚介類、イカやクラゲなどだが、これを良く探知する28KHzという周波数が巨大生物をも良く探知する事が判明し、サイドスキャンソナーの周波数をこの周波数に調整可能なよう、改造がなされていた。

巨大タンパク生物の南東方向への広がり、壊滅的な漁獲状況を勘案すれば、タンパク塊のみならず、巨大生物も日本海溝付近へ到達していておかしくなかった。「みこもと」が出会った現場付近の海流は逆方向であったが、それでは日本沿岸で頻繁に発見されるタンパク小塊の説明が付かないのだ。日本海溝より本土側には黒潮と親潮という世界の海流でも有数の流速を持つ巨大海流があり、この海流の外側で無い限り、「みこもと」が出会った巨大生物とタンパクの蟻集は説明が付かなかった。そのような理由から探查は日本海溝に沿った針路から始められる事になった。

「黒岩、『金魚』の準備は終わったのか？」

「ええ、吉村さん。いつでも『金魚』行けます。ついでに全周型の水中聴音機も搭載しておきました。」

「ああ、それは良い考えた。今回は単独行動だからな。」

「船長、機関科の方はいかがですか？」

「吉村さん、電撃防止対策は全て終わっているそうです。防食亜鉛板の減りが凄い事になっているようですが。」

「ああ、防食電流を流さないですからね。次のドックまで持つかない？」

「危険な海域抜けたら切り替えるそうです。それでも怪しいですねどね。」

「それでも本船は動力が電気ですから、ブラックアウトしたら動けなくなりますから、仕方が無いですね。」

「ええ。機関長と昨晚話したんですが、だいぶ苦労したみたいです。特に電動機系を船体から絶縁するのにえらく苦労したようです。」

「こりゃ、帰港したら機関長に奢らにやいかんですね。」

「ああ、そりゃ貧乏フラグですよ、吉村さん。あいつは底なしですよ。」

「げっ……ま、まあ、考えておきます……」

「みこもと」は「金魚」を曳航して観測を始めた。日本海溝西側の急峻な落ち込みに沿うような針路を取っていた。「みこもと」の装備するサイドスキャンソナーは、通常ならば日本海溝底、水深9000m程度までのレンジを持っていたが、今回使用している周波数では6000mが限界だった。しかし、今は海底地形を観測する事が主ではないため問題は無かった。黒岩は中層上部250mから1000mまでに現れる微弱な反射を捉えるような設定をしていた。八戸港沖から南下を始めた「みこもと」は「金魚」曳航時の速度、7ノットから8ノットを保って航行していた。

曳航を開始してから二日目、犬吠埼沖合付近まで南下した頃、「みこもと」の音響観測室にアラームが鳴り響いた。

「黒岩、巨大生物か？」

音響観測室へ飛び込んで来た吉村は開口一番そう聞いた。

「いえ、潜水艦でした。詳しくは長野さんから……」

「前々回の時、米軍から照合用の音紋ファイル貰ったでしょう。今回、あのファイルに含まれる音紋を探知したら警報が鳴るようになったんです。」

「って、長野、あのファイルは返したんじゃないのか??」

「えっ、まあ、オリジナルは返しましたが……」

「コピーしたのか？しかし、あれはそのままコピーすると全情報を消去するプロテクトが付いてたはず？」

「ええ、媒体から直接コピーすればそうなりますね。」

「ってことは、お前、プロテクト破ったのか？」

「いえ、そんな非法な事はしてませんよ。照合時にキャッシュにデータ読み込みんですが、読み込みの都度、違うメモリー領域をキャッシュに指定しただけです。それ自体は米軍さんも知ってますよ。処理が早くなるんで。」

「で、どうやってコピーした。」

「いあ、米軍さんがこの船のメイン機を知らなかったただけの話でして……あの程度のデータ量なら、このメイン機だと、全部一度にメモリーに展開しても全メモリーの20%行かないんですよ。で、全部メモリーに残っていたと……」

「あちやゝゝゝ、まあ、一応不正アクセスには当たらんみたいだなあ……」

「まあ、アメさんも、精々サーバーレベルで考えてたんじゃないですかね。この船のメイン機は一昔前なら立派なスパコンですからねえ……」

「なんとまあ……おっと、潜水艦はどうなった？」

「ああ、それですが、船底の固定聴音機でも捉えてまして、『金魚』と3角測位やつたんですが、かれこれ15海里くらい東に居るようです。例の五月蠅い潜水艦です。」

「ああ、例の『漢』級とか言うヤツか。むこうはこっちに気づいてるのか？」

「吉村さん、こっちは28KHzでどんがらがっちゃんやりながら走ってるんですよ。100海里先でも気づきますよ、普通。」

「そーいやそーだな……」

「しかし、この潜水艦、どこに向かってるんですかね？日本領海にまっしぐらのコースなんですか？」

「まだ12海里線まではかなりあるだろ？」

「ええ、現在位置は領海基線から約70海里ですね。でもこの潜水艦20ノットなんて速度で走ってますから、3時間半で領海ですよ。」

「一応、海自には連絡しておくか。」

吉村はそう言つて、手元のPCから滝川に向けてメールを打った。返事は1時間経たないうちに現れた。「みこもと」上空にP3C対潜哨戒機が現れたのだ。VHF航空無線で連絡を取った「みこもと」は概略で判明している潜水艦の現在位置をP3Cに知らせた。

潜水艦はすでに「みこもと」斜め後方に移動していた。距離は4海里ほどに接近していたが、すでに最近点は通過し、だんだんと「みこもと」からは離れていた。P3Cはソノブイらしきものをいくつか投下し、一端はこの海域から離れた様に見えたが、また舞い戻つて、低空で旋回をしていた。その間も「みこもと」は7ノットで航行しており、また潜水艦も「みこもと」の航跡と直交するようなコースで進んでいたため、しばらくしてP3Cは見えなくなり、潜水艦の音響も聞こえなくなった。そして1時間半が過ぎた頃、聴音機に軽い「ドーン」という音が捉えられた。

「なんだ、黒岩、対潜哨戒機が攻撃でもしたのか？」

「多分、領海に接近したんで注意を促す発音弾を投下したのでしよう。海自は領海に入ったから、即座に攻撃というのはありませんからね。」

「つて、もう領海なのか？」

「時間的には届いてますね。普通は針路変更すると思うんですが・・」

そんな騒ぎの中「みこもと」は八丈島東方で針路を東に転じ、「金魚」を巻き上げて潜水艦沈没現場海域への中間点へ向かった。中間点付近で同じように南北方向に走査を行うためだった。

しかし、中間点に向かった「みこもと」に海自の滝川から入った情報是谁もが驚愕するものだった。千葉県九十九里の海岸に中国の原

潜が座礁した、という情報と共に、その原因、全ての浮力タンクの弁制御を失い、まるまる30時間ほど上げ舵一杯、前進全速状態で沈下を免れ、九十九里海岸沖に座礁して圧壊を免れた事が記されていた。幸い原子炉制御は失われておらず、核汚染の発生する恐れは無かったが、弁制御を失った原因は制御回路の焼損であることが目を引いた。例の巨大生物の仕業を疑わざるを得ない状況だった。中国政府からは日本政府に対し外交チャンネルを通じて公式に救助依頼が出され、海自の潜水艦救難艦がその任に当たり、乗員全員を無事救助、潜水艦は後日中国側人員の立ち会いの下、サルベージされ返還される事になった。

しかし、潜水艦艦長からの事情聴取では、電撃を受けた認識は無かったらしい。全ての浮力制御タンクの排気弁が制御回路の誤動作と思われる状況で全解放され、その後解放のまま人力操作でも閉じられなかった事がこのような結果に繋がったようだった。

艦長は即座に上げ舵一杯、前進全速を発令、蓄気した高圧空気をタンクに送り込んだが、排気弁解放状態ではタンク内の海水を排出できず、水深50mほどまで浮上したところで動的浮力と均衡、そのまま前進を続けるしか無かったらしい。進路変更は何度か試したらしいが、僅かな進路変更の試みでも動的浮力との均衡が崩れ、沈下が始まるため針路上の海岸に座礁するしか、圧壊を免れる手がなかったらしい。

このような事情だったため、「みもと」のメンバーは当初、巨大生物による攻撃という意見には懐疑的だった。しかし、その後潜水艦のサルベージが進み、中国側立ち会いの下、事故原因の調べが行われた結果、メイン、ネガティブ、トリム、全てのタンク内に例のタンパクが発見され、そのみならず、僅かな漏出と共に、弁のアクチュエーター部分でも発見されるに及び、タンパク集合体による何らかの影響と考えざるを得なくなっていた。また全ての弁が大電流による溶接効果で固着しており、手動でも閉塞できなかった原因と考えられた。この結果を滝川から知らされた吉村は、急遽、船長、

機関長とミーティングを行った。

「船長、機関長、ご足労願いましてありがとうございます。取りあえず、海自からの非公式情報ですが、お手元の報告書をご覧下さい。」

「船長と機関長はしばらく書類を読んでいたが、機関長が唸った。」

「吉村さん、これかなり大変な事じゃないですかね。本船、電撃対策はかなりしつかりやっていますから大丈夫とは思いますが、軸シールや吸水口から入り込まれて、言うことまでは想定してませんよ。」

「ええ、まあそれでご足労願ったわけなんです。」

「しかし、進化とでも呼ぶべきなんですかね、これは。」

船長の山下だった。

「何とも言えませんがねえ。しかし、タンパクそのものは自力で動く能力はありませんから、あくまでも水の動きに乗ってという事だとは思いますが・・・」

「しかし、漏水部分を全て潰す事は不可能ですよ。」

「ええ、それも判っています。要は各部の制御装置へ不要な電流が流れないことが肝心だと思えるのですが。」

「まあ、その辺も出来るところは全て、接地を船体から浮かせてますから、そう簡単には変な電流は流せないと思いますけどね。」

「しかしですね吉村さん、潜水艦も動いていたわけでしょう。そのタンクへ侵入するって事は艦の動きで発生する水流を乗り越える必要があると思うのですが・・・」

「はい。その辺はレポートされていませんね。あるいは艦が水中で停止していた事も考えられますし。」

「うーむ・・・」今度は船長が唸る番だった。

「ともかくですね、制御盤周りの漏水を潰して欲しいのですが、機関長お願いできますか。あと、バラストタンクの水を定期的に検査したいです。船長、甲板員にその採取お願いできないでしょうか？」

「吉村さん、まず、電子系の制御回路についてはこの船は大丈夫で

しょう。全て水線より上にある電子制御室に集中してます。問題があるとしたら、サーボ制御系に使われるステッピングモーターで内部に電子回路を持つものくらいですね。あと弁系は昔と違って開放弁系（船内に開放された弁）は無いです。全てどれかのタンクを経由します。その場合でも船内側は全て手動弁ですから、電子系をいくらいじられても船内に水が入ることはありません。動力系は電撃対策でメインのモーター除いて、ほぼ全ての電装品は船体から絶縁しましたし、センサーも全て絶縁型に交換しました。船体外板が溶けるくらいの電撃でも制御回路に影響は無いと思います。」

「了解です、機関長。まあ、何が起きるか判りませんので、注意だけは怠らないようお願いします。」

「吉村さん、これ、甲板への散水もまずいですかね。」

「船長、それで何か起きるとは考えられませんが、これまでの常識が通用しないことも確かだと思います。散水を禁止するまでの事は無いと思いますが、注意だけをお願いします。」

「了解」

侵入（前書き）

ちよつと間が空きましたが38話目です。

無線LANの問題はなかなか奥が深いようです。いまだに妨害は入っていますが一軒だけではないようです。かなり組織されたクラックグループがあるようです。自治会はすでにかなりな証拠を集めているようです。

困ったなあ・・・無線諦めて、ケーブル接続を検討し始めました。

侵入

中間点海域へ到達した「みこもと」は100海里ほど北上し、そこを起点とした音響走査を開始した。南へ向かつての走査直後から、水深350m付近に例の巨大生物と思われる反射がいくつか現れていた。数はまだ10海里の走査で2、3と多くは無かったが、海流の方向が沈没地点からは逆になる事を考えれば、安心して居るわけにも行かなかった。また南へ下がるにつれて数は増える傾向にあった。しかし、この海域では水深350mより浅い処にはまったく現れていない。どうも北へ向かうこれまで知られていない中層流があるのではないかと疑われた。そして、沈没地点から東西に引いた線と交わった後は、また数が減少していた。しかし、知られざる中層流に乗って巨大生物が拡散してるのだとするならば、今の状況にも一縷の望みがあつた。つまり巨大生物はほとんど自力で動くことができない可能性が有る。ただ、「みずなぎ」の例があることから動けないわけでは無さそうだが、何らかの理由で遠距離の自力移動が出来ないので無いか、という疑いが起きる。であるならば、拡散速度は海流に依存するし、表層流以外の海流はそれほど流速は大きくない。

もう一つ、この海域の走査で判った事は、海底部分に音波の伝搬異常が見られない事だった。沈没点付近では海底一面におよそ高さ1000mに及ぶ、音波伝搬異常域があり、潜水調査の結果はプリオン類似タンパクが蟎集して層をなして居たことが判っていた。しかしこの海域ではそれは見られなかった。これまで、日本の中部以北の海岸に漂着するおびただしいタンパク塊から、海底部分はすでに覆われているものと想像していたのだが、ここの観測でこの海域ではそれが無い事が判明したのだ。日本海溝西側の日本沿岸でも海底にタンパク層があつたのだが、ここにはそれがなかった。この海域と沈没点、日本海溝西側の相違点と言えば、まず第一に上げられる

のが海底までの水深だった。この海域の水深は大洋底平均に近い水深6000m程度だ。これまで観測してきた海域は全て水深3000m以浅の海域だったのだ。

「みずなぎ」観測陣はこの二つの謎の解明を急ぐ結論に達した。シミュレーションにおける基礎データが変更が必要と判断されたからである。「みこもと」はこの海域の調査を打ち切り、潜水艦沈没点へ急いだ。

その頃、ハワイ東方沖の海域ではついに民間船舶に被害が発生していた。上海からホノルル向けのコンテナ船が中国艦隊が襲われた地点の北、350海里付近で巨大生物に襲われたのだ。16ノットの航海速度で航行中、強烈な電撃を受けブラックアウトが発生、操舵が出来なくなつたため停船したところ、ゼリー状の物体が片舷全長に亘って取り付き、そのため左舷に大傾斜、ほとんど満載状態のコンテナが荷崩れを起こし、ブラックアウトから約1時間ほどで、左舷に転覆沈没した。乗組員は転覆前に救命艇で脱出、全員が無事だった。救命艇への電撃はあつたかも知れなかったが、救命艇はFRP製で絶縁物であり、また電装品と呼べる物は始動用セルモーターに接続された12V2個直列のバッテリーのみであつたため、影響は無かつた。

この遭難は先に日本政府が巨大生物とその電撃を公表したこともあって、世界的な関心事となった。遭難から16時間後USコーストガードに救助された乗組員証言がマスコミにセンサーシヨナルに取り上げられ、特に環太平洋域では大騒ぎとなった。

「みこもと」も無関係ではいられず、潜水艦沈没点へ向かう航海中、調査機構からパニックを抑えるための情報を求められた。吉村は日本海溝西側に巨大生物を認めず、という先の調査結果を調査機構へ送り、これを現在稼働中の調査船報告という形で調査機構は公表した。これにより明日にも怪物に襲われるかのようなパニックは収束したが、潜在的な危険が去つたわけでは無かつた。

しかし、本当のパニックはハワイで発生していた。この頃ホノルル国際空港を出発する便は東行き、西行きを問わず、連日全て満席だった。有名なワイキキ海岸には人影もまばらで、市内の免税店などは軒並み臨時休業しているような有様だった。ホテルだけはハワイ諸島の各島からハワイ脱出のためにホノルルに集まった人々で満杯状態になっていた。一説に寄ればこの時ハワイを脱出した住人の数はハワイ州全人口の6割に達したと言われている。

もともと、センサーショナルな報道を繰り返したマスコミ関係者がいち早く逃げた事で、特に日本ではハワイのパニックがあまり報道されず、それが日本のパニックを煽る燃料とらなかった事は幸이었다。インターネット社会の一部では根強いマスコミ不要論が展開されていたが、図らずもそれを証明する形になった事は、便所の落書きなどに見下していたマスコミ自身の身から出た錆びと言えるのかも知れない。

そんな騒動をよそに、「みこもと」は潜水艦沈没海域付近に到達していた。放射性物質による汚染が発生している海域であるため、「みこもと」の最初の行動は汚染域の放射線レベル測定だった。前回の調査と同様の手順で汚染海域を測定した結果は驚くべきものだった。いまだに炉心が環境に露出した状態で進行していると思われる核分裂連鎖反応を考えれば、汚染海域が前回調査からほとんど広がっていないという状況は、少なくとも現代科学の予測とは大きくかけ離れた状況で有った。もちろん、炉心部で加熱された海水が上昇する中心部では、生身の人間が活動できるレベルでは無かったが、それが周囲に拡散しない状況というのは、これまでの理論では説明ができなかった。

しかし、「みこもと」にとっては、この状況は都合の良いものだった。「みこもと」の今回のミッションは、核汚染の調査ではなく、巨大生物なのである。核汚染の広がりがないという状況は、より汚染中心部に近い処で活動できることに他ならない。状況の解明のため

めには、まさに都合が良かった。

「みこもと」は前回調査と同様、まず「金魚改」を用いて、汚染中心海域周辺の海中画像の採取と音響走査から調査を開始した。その結果、汚染中心から南東方向にかけた海域は、海底から1200m程度の深度まで音波伝搬異常域があり、それは南東方向におよそ距離50海里、幅12海里の範囲に広がっている事が確認できた。さらに、およそ距離85海里までは海底からの高さを減らしつつ継続していた。しかし、水深4200m線を越えた辺りから、音波伝搬異常域は消滅し、海面から深度1000m程度までに分布する巨大生物だけとなっていた。巨大生物の密度は音波異常域内の方が密度が低いことも判った。

そして最大の異変は「金魚改」が捉えた映像にあった。これまで「みずなぎ」が撮影した映像や、前回調査で「金魚改」が捉えた映像では巨大生物は非常に透明度が高い事を特徴としていた。しかし、今回「金魚改」が捉えた映像は、その透明度を失っていた。といっても全てが不透明になったわけではない。その全長50mを超える体躯のほぼ中央部に、およそ直径10m程度と思われる不透明な球体があり、そこから体全体に筋状の不透明な部分が伸びていた。不透明な部分は黒に近い灰色を呈しており、照明を落とした映像では、これまでのE-L光に加え、中心の不透明な部分からはかなり正確な一定間隔で無数の明滅が繰り返されており、筋状に伸びる部分では、中心から一定間隔で先端に向かう発光点の移動が認められた。一種の神経活動のように見える発光現象であった。この中心部に不透明な、仮にそう呼んで良いなら「核」を持つ巨大生物は、そのほとんど全てが水面から150m以浅に存在しており、それより深い部分ではこれまでも同じ、完全に透明な巨大生物がほとんどであることも判った。この事は、中国艦隊とコンテナ船を襲ったのは、この核を持つ巨大生物である可能性が非常に大きい事を示唆していた。

事件は探查開始から二日目の夜発生した。「金魚改」による間接探

査を終え、「みこもと」は「みずなぎ」による潜水調査と可能ならば核のある巨大生物のサンプル採取にかかるため、潜水艦沈没点に戻ろうとしていた。航海速度である16ノットで北西に進んでいた「みこもと」は突然、海中からの電撃を受けた。ほとんど落雷に匹敵する巨大な電撃であったが、対策を施された「みこもと」の電気、電子装置には全く影響を及ぼさなかった、しかし、海中状況を探るため、「金魚改」再投入作業に入り、一旦停船した時にそれは起こった。

「金魚改」投入作業のため、停船した「みこもと」は、「金魚改」に所要のケーブルを接続し、曳航用ワイヤーを取り付け、投入のためサイドクレーンで「金魚改」本体をつり上げる作業を行っていた。その時、クレーン操作をしていた甲板員が悲鳴を上げた。

「うわっ、な、なんだ、あれ？」

「どうした。」

「舷側を見て下さい。何か上がってきます。」

そう言われて舷側をのぞき込んだ甲板員はのけぞった。舷側をじわじわとゼリー状の物体が上がって来ていた。甲板員は「金魚改」投入前チェックで付近にいた音響担当の黒岩に叫んだ。

「黒岩さん、変なモノが上がって来てます。右舷側舷側です。」

そう言われた黒岩は舷側をのぞき込んで状況を確認すると、インターカムで音響観測室にいる吉村に連絡した。

「吉村さん、黒岩です。ゼリー状の物体が舷側を上がって来ています。」

「判った、すぐ行く。」

ほどなく、吉村は生物学の村木を伴って後部甲板に現れた。

「どこだ、そのゼリー状の物体は？」

「右舷舷側です。多分、水線全長に亘って上がって来つつあります。」

吉村と村木は右舷舷側をのぞき込んで状況を確認すると、インターカムで研究室の望月、チャンを呼び出した。

「望月さん、サンプル採取用カップと伸縮ポール、簡易線量計、サンプル輸送遮蔽コンテナを大至急後部甲板までお願いします。」

「了解、何があった。」

「例の生物が舷側を上がって来ています。」

「なんだと。すぐ行く。」

望月は研究室にいたチャンに応援を頼み、求められた機材を持ってすぐに後部甲板に現れた。

「望月さん、右舷舷側です。カップを伸縮ポールに取り付けて、サンプル採取をお願いします。」

右舷舷側をのぞき込んだ望月は即座に状況を理解し、サンプル採取に取りかかった。500mLのステンレス製ビーカーである採取用カップですくい取られたゼリー状の物体は甲板に上げられる前に簡易線量計で放射線チェックが行われた。結果は通常に扱って問題ないレベルの線量であることが判り、直ちに輸送用のコンテナに入れられ密封された。

その間にもゼリー状の物体はじわじわと上昇し、すでに舷側の2/3を超える高さに達していた。厚さは上端付近では水に濡れた程度であるが、水線付近ではおそらく30cm程度の厚さに達しているように見えた。

幸い「みこもと」は双胴船形である故、ローリング方向への傾斜には非常に強く、静的な荷重による転覆はほとんど考慮しなくて問題なかったため、しばらくはゼリー状物体の動静を観察する余裕があった。ゼリー状の物体は、船体に取り付いている部分の上を乗り越える形で新たな部分が上昇し、それを繰り返して舷側を上がって来ていることが判った。船体の水と接している部分を厚くする事で船体の傾斜に伴うオーバーハング状態を解消し、常に垂直より若干角度の緩い傾斜を作り出し、それによって、新たに乗り越えた部分が船体側へ落ちる様にして高さを増していた。

登ってきているゼリー状物体は、非常に透明度が高く、まるで水そのものが意志を持って船に上がって来ているかのように見える。そ

して、甲板の縁に取り付いた時点で、その異常性が判明する。

半公用船である「みこもと」は、非常に整備が良く、舷側部分の塗装は常に補修されていたため判らなかったが、舷側コーニングに取り付いた時点で、起倒式のハンドレール支柱基部の金属がむき出しになっている部分に触れた。その時、かなりはつきりしたスパークが発生した。このゼリー状物体は帯電しているのだ。吉村は直ちに周囲の乗り組み員に退避を命じ、電撃防護無しの接触を禁じた。サンプル採取に使われた伸縮ポールがFRP製であったのは僥倖だった。

騒ぎを聞きつけて後部甲板に来ていた船長は、即座に高压放水の準備を甲板員に命じていた。これも幸いだったが、現状の「みこもと」には核物質汚染の洗浄のため、高压洗浄用のノズルが無数に取り付けられている。船長は吉村と無言のコンタクトを取ると、甲板上の要員を船内に退避させ、右舷側高压洗浄装置を動作させた。

侵入（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

汚染（前書き）

第39話です。

無線LANは少し調子が良くなってきました。ただ凄い量のXmas Port Scan Attackが来てまして、WAN側からのPING要求も日に100発程度来ます。

このアタックが来ている間は明らかに接続速度が落ちます。IPスプーフィングやってやつで、IPアドレス擬装してますが、幸いうちが繋がってるLANICはWhoisを公開してますんで、相当深くまで追えます。

ほとんど全てがエロサイトか中国ですね。（笑

たまにインドからもPINGが来ます。まあ、明らかに攻撃なのに対処しないプロバイダにも問題があるんですが、この国では仕方が無いで済ませるしかありません。無線LANへの侵入ほどは不便を感じませんので、仕方が無い、で済ませるしか有りません。（笑

汚染

微粒子状の放射性物質を洗浄するための高圧洗浄装置の効果は、水に親和性を持つゼリー状物体には絶大だった。僅か数秒で船体に取り付いたゼリー状物体は洗い流されてしまったのだ。続いて船長はブリッジに微速前進を命じた。3ノット程度で船が前進すると、ゼリー状物体は船に取り付けなくなった。この一連の「みこもと」の処置は、水上航行船舶に対する抜本、応急両措置のモデルとなり得るものだった。電撃によるブラックアウトが発生しても、可能な限り停船せず、停船を余儀なくされる場合は、緊急ポンプ、消火用ポンプなどだが、これによる高圧放水を行う事でゼリー状物体の片舷側取り付きによる転覆事故は防げる事がはっきりしたのだ。「みこもと」はこの結果を直ちに調査機構に送り、各機関、船社に広報する対応を取った。今後、電撃によるブラックアウト防止のための対策を抜本対策として、現在航行中の船舶でも消火用装置を活用することで、例えばブラックアウトしても応急的な対策が可能となった事は、この巨大生物への無用な恐怖を一掃させる効果が期待できた。この広報は海運業界のパニックを抑制する事に大きな効果をもたらした。コンテナ船の転覆以来、北太平洋航路へ向かう船を一時的に待機させていた船会社は、対応策を各船に徹底させると、一斉に船を出港させた。北太平洋航路における貿易危機は当面の間回避されたのだ。センサーシヨナリズムを特ダネと勘違いしているマスコミにはあまり大きく扱われる事は無かったが、世界経済にとって、無視できない救いとなった事は事実だった。

時間は前後するが、「みこもと」は3ノットで航走しながら「金魚改」を投入した。以前の調査でも「金魚改」は巨大生物の密集域を通過しており、その時巨大生物の中に入り込んでしまったが、曳航索への抵抗はほとんど無く通り抜けてしまった。そのため甲板で作業する要員たちも別段の警戒はしていなかった。しかし、今回は違

った。「金魚改」を投入して曳航索を繰り出し、所定の長さまで繰り出したところでストッパーをかけ、水の抵抗によるテンションが掛かるのを待ち、スリップを入れて曳航長さを固定する。しかし、今回は異なっていた。ブレーキストッパーを掛け、テンションが曳航索に掛かった瞬間、これまでとは比べものにならない抵抗がかかり、ケーブルドラムのブレーキが滑り出したのだ。速度を曳航時速度の7ノットにまで増速していた「みこもと」だったが、後部甲板の様子を見た当直中の二等航海士は即座に最微速まで速度を落とした。この判断が「金魚改」と曳航索、巻き上げ装置を救った。後部甲板で作業中だった担当の黒岩はインターカムで音響観測室に待機中の長野を呼び出した。

「長野さん、大至急ビデオカメラを生かして下さい。」

「ん？何かあったの？、ビデオカメラ生かしました・・・って、何だこれ？」

「すみませんが、そのまま生かして置いて下さい。すぐそちらに向かいます。」

黒岩はそう言うと、曳航索のテンションを監視している甲板員に後を頼み、音響観測室へ走った。

「長野さん、どんな画像です？」

「うゝゝゝん・・・なんか例の巨大生物を引っ張ってる格好になってるんだが・・・」

音響観測室の画像モニターには、丁度体の中央辺りに曳航索を引っかけた変異種の巨大生物が映っていた。「金魚改」は2mほどの全長の半分ほどを巨大生物に潜り込ませているようだった。「金魚改」は海中での自由度を増すため、曳航索は先端部には取り付けられない。先端から1/3ほど下がった、曳航時に上側になる部分にリップを取り付け、そのリップに開けたアイから曳航索を引く形になっていた。これにより「みずなぎ」のサーボ装置を流用した可動潜舵の操作で姿勢を変え、深度を変更する事が出来る様に改造したのだ。曳航体の中央付近に接地された全周カメラは曳航索で引かれ、

中程から折れ曲がったように見える巨大生物を捉えていた。カメラが前方を向いたとき、その数cm先にELによって発光する巨大生物の表面が見えていた。

「これ、吉村さんと呼んだ方が良いですね。」

「そうだな。巨大生物の性質が変わってる。」

長野はモニター監視を黒岩に任せ、インターカムで吉村を呼び出した。

「吉村さん、音響観測室までご足労願えますか？」

「なんだ、なんかあったのか？」

「ええ、例の巨大生物の性質が変わったみたいです。」

「判った。すぐ行く。」

吉村が音響観測室に現れたとき、「金魚改」はすでにその全長を巨大生物の中へ没していた。

「長野、どうしたんだ？」

「吉村さん、巨大生物が硬くなってます。全周モニター見て下さい。」

「

「なんだと・・・うん、確かにそう見える・・・長野、村木君呼んでくれ。」

「了解」

音響観測室に現れた村木はモニターを見て固まっていた。それもそうだろう、僅か数ヶ月で体の構造を変化させるまで進化できる生物などこれまで存在しなかったのだから。そして、「金魚改」本体が黒灰色の筋状の部分まで進んだとき、「金魚改」への強烈な電撃が記録されると同時に、巨大生物全体が一瞬硬直したかのように動き、その後、まるで釣鉤に掛かった魚のような動き（体のサイズ相応な動きではあるが。）をした。スリップで固定していない「金魚改」曳航索はこれに耐えられず、ブレーキストッパーの摩擦力に抗って引き出されて行く。「金魚改」の曳航索取り付け部の機械的強度はすでに限界近かった。吉村は船長に停船を要請した。ゼリー状物体が船に上がってくる危険はあるが、ここで「金魚改」を失うわけに

は行かない。船長は吉村の要請を受けて、即座に停船し、ゼリー状物体が船に取り付く事を警戒して、左右両舷に消火ホースを操作する人員を配置した。

しかし船が止まっても、曳航索のテンションは消えなかった。巨大生物が船から離れるように動いているのだ。吉村はさらに後進を要請した。停船していた「みこもと」は即座に曳航索のテンションが減少する方向へ後進を開始した。そしてそれによりたるみの出来た索を巻き取って行く。そしておよそ30分後、「金魚改」は海面に姿を現した。しかし、それだけでは終わらなかった。

音響観測室では「金魚改」が海面に姿を現す前に一大事が出来ていた。黒灰色の筋状の部分に接近した頃からCCDカメラのドット欠けが目立っていたが、「みこもと」が後進を開始した頃、それが一気に増加し、周縁部を除いてほぼ全てのCCDドットが機能を停止したのだ。

「長野、なんだこれ？なんでカメラがおかしくなったんだ？」

「判りません。吉村さん。こういう現象を起こすのは強い放射線を浴びた時しか無いとは思いますが。」

「ということは、カメラが放射線を浴びたって事か？」

「現象だけ見ればそういう可能性を指摘できます。」

「あの巨大生物は放射能を持つって事なのか。まずいな。」

その危惧は的中した。海面に現れた「金魚改」を甲板に引き上げる作業が始まり、丁度甲板高さまで吊り上げられた時だった。突然船内の警報が鳴り渡った。ブリッジから船内放送で「放射線警報。右舷甲板から退避」の指示が流される。観測管制室にある放射線量モニターには、「金魚改」がつり下げられている右舷後部甲板を中心に1mごとの被曝線量が表示されていたが、およそ右舷舷側から2mほどの距離につり下げられている「金魚改」至近の甲板上で700mシーベルトを超える事を示す赤で表示された範囲が舷側から1m以上内側にまで広がっていた。すでに後部甲板は防護服無しで立ち入るには危険なレベルに達していた。船長は遠隔操作でサイドク

レーンを緊急リリースし、「金魚改」を海に落とす措置を取った。幸い、甲板は汚染されておらず、「金魚改」を海に落とすだけで甲板上の線量は通常レベルに戻り、「金魚改」を海面に引きずったまま、対処を検討する時間が持てた事は非常な僥倖だったと言える。後部作業ベイには深海潜水艇用の除染装置が設置されている。そこで「金魚改」を後部ベイに回し、除染後調査を行う事とし、「金魚改」を海面に引きずったまま、曳航索を後部ベイに回す作業が行われ、「金魚改」は後部ベイから引き上げる作業に入った。ベイに引き上げられた「金魚改」は除染装置で除染され、十分に線量が低下したことを確認の上甲板に降ろされ、点検のために分解されることになった。

「金魚改」の放射線汚染は結果的に「みこもと」から無人観測手段を奪うことになった。確かに船体接地型のマルチビームサイドスキャンソナーや『ドリイ』も有るが、其れで出来る事には明らかな限界があつた。吉村は有人観測機材の投入をためらっていた。巨大生物がこれまでの観測とはかけ離れた動きを見せているのだ。「みずなぎ」や「かいえん」の有人潜水艇を送り込んで無事に済む保証は無かつた。しかし、それでもこのタンパク生物の謎を解明し、海洋の危機を回避するためには、いまだ十分な知見を得ていないのも確かだつた。吉村は決断を迫られていた。

「吉村さんよお、俺たちを行かせてくれねえか。何なら一筆書くぜ。」

「一の瀬さん、長崎さん、お気持ちは有り難いのですが、危険なことがはつきりしている処へ行つて貰うわけには行かないのです。」

「危険たつて、必ず死ぬと決まった危険じゃねえし、事実『みずなぎ』は一度切り抜けてる。それでもダメなのかい。」

「あの巨大生物が以前のままなら、行つて貰つたかも知れません。でも今のアレは予測が付かないのです。あまりにも大きく変異すぎました。今度はいきなり艇が潰されるかも知れないのです。」

「それなら『かいえん』ならどうです？『かいえん』なら、最大1万3000mの深さの圧力を受けても潰れません。というか安全率を考えれば、瞬間的なら3万mクラスの圧力にも耐えられるでしょう。放射線にも強いのは実証済みですしね。」

「長崎さん、確かにそうですが、圧力と同時に電撃を受けることまでは、さすがの『かいえん』でも想定していません。」

「とはいえ、何らかの手段で調べねえと、いつまで経っても『わからねえ』ままだろうがよ。」

「それはそうなんですが……」

「おい、吉村さんよ、こうしたらどうだ。俺と長崎が『かいえん』で降りる。『かいえん』がいきなり潰されることが無いのはあんたも認めるだろ。いきなり潰されることが無けりゃ、後は何が起きても浮上くらいは、俺と長崎ならなんとでもできるさ。どうだ長崎。」

「ええ、一の瀬さんとなら、相当なことが出来ますね。マニピュレーターで艇の改造くらいしかねませんからね。」

「いや、それはまずいですよ。もし事故があつたら、艇長二人を一度に失う事になります。」

「ばかやろう、縁起でもねえこと言うな。今は最大戦力を投入する時だろうが。」

オペレーション・リサーチ

「そうですよ。ORの面から考えて下さい。人的ファクターでの最大安全度は私と一の瀬さんが組む事で得られるはずですよ。装置ファクターでの最大安全度を持つのは『かいえん』です。この組み合わせが今『みこもと』で可能な最大の安全度を持つ事は自明でしょう。」

「判りました。一の瀬さんと長崎さんのペアで潜っていただきます。しかしその前に『ドリイ』を自律モードで送ります。最低限『ドリイ』が浮上できることを条件とさせて下さい。」

「判った。確かに『ドリイ』が浮上できないような状況では、あんたの言うとおり危険すぎる。よし、田中に渴入れてくる。」

張り切る一の瀬に長崎は苦笑しながら、吉村の居室を出て行った。

汚染（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちします。

接近（前書き）

第40話まで来ました。読んでいただいている皆さんに感謝致します。

こちらも年末に入り、カトリックの国ですので、クリスマス一色になって来ました。赤道直下のクリスマスですので、日本とはまた雰囲気は違いますがそれでも、ツリーに綿で雪を付けるのには笑ってしまいます。

ところで、仕事が忙しくなってきました。多分、来週か再来週にちよっと長い出張があります。ホテルにはWifi環境がありますが、さてはて更新ができますかどうか？居住国の北の端の街で、飛行機で約1時間掛かります。次の更新以降、少し間が空くかも知れませんが、ん事をお詫び致して起きます。

接近

吉村が「ドリイ」を使えなかった理由は放射線だった。「ドリイ」の制御システムはちよつとしたスーパーコンピュータ並みのシステムだった。24個搭載されたマルチコアCPUチップは極微細技術の結晶で、チップ配線の太さは数nmオーダーでしかない。

さらにこれに同じかさらに微細な配線を持つ数TBに及ぶメモリーが加わる。前回の沈没潜水艦への潜水で放射線による多数の不良ビットが発生し、メインプロセッサ、メモリーともに予備品に交換され、また高軌道衛星に用いられる高エネルギー粒子によるチップ破損を防ぐ対策を施していたが、放射線自体のエネルギーは宇宙線より低いとは言え、暴露される量が桁違いであるため、万全と言えるにはほど遠かった。前回は障害が発生したとはいえ、何とか浮上を果たしたが、今回もうまく行く保証は無かった。

この事から、吉村は「ドリイ」の投入を躊躇していたが、現状を変えるためには「ドリイ」の損失を覚悟の上で投入を決めた。もつとも「ドリイ」によって何らかの成果が得られるとは考えても居なかったが、成果を得るための有人艇潜水に先立つ状況の危険度を知るためには必要な犠牲と考えていた。

「長野、『ドリイ』のバックアップは終わったか？」

「ええ、吉村さん、今、本船のメインシステムへ転送が終わった処です。しかし、田中泣いてましたよ。」

「田中君には申し訳ないが、『金魚改』がああいう状況では、有人艇の露払いが出来るのは『ドリイ』だけなんだ。」

「其れは判りますが、『ドリイ』はすでに疑似人格を形成しつつありますからねえ。」

「まあ、大事なのはその疑似人格を形成しているプログラムと学習成果だ。ハードは作り直せば良い。」

「それは正論ですがねえ……やっぱ思い入れはどうしても外形に

も入りますからねえ・・・」

「堪えてもらうしかないだろうなあ・・・判るんだがねえ・・・」

「ともかく、他に方法は無い訳です。今ある機材で出来る限りのことをするのがこの船の使命だと思いますし。」

「そう言つて貰えると少しは気が休まるなあ・・・」

「みこもと」は「ドリイ」を投入した。これまでと異なり、最初からケーブル無しの自律モードだった。

「『ドリイ』聞こえるか、こちら田中。」

「はい、田中さん、感度良好。」

「なんか、ますます人間っぽくなつてきてるな。」

「ええ、吉村さん、あれからずっと会話して、語彙を増やしてきましたからね。」

「とにかく、安全第一で行こう。さて、モニターにもう絵は出せるか？」

「はい。今深度3mです。もう絵は出ます。今の処の予測では、水深50m程度までは大きな音波障害は無さそうです。」

「了解。それじゃ絵を出してくれ。」

「『ドリイ』画像転送スタンバイ。」

「了解しました。画像転送モード起動します。画像転送起動しました。画像転送スタンバイ中。」

「『ドリイ』画像転送開始。」

「画像転送開始します。転送中。」

一拍の間を置いて「ドリイ」管制室のメインスクリーンに4分割で「ドリイ」からのカメラ映像が表示された。

「今の処、周囲至近には巨大生物は見えませんがね。」

「そりゃ結構。よし、もう少し沈めてくれ。」

「了解、深度100まで潜入します。『ドリイ』深度100、深度を維持。」

「『ドリイ』了解。深度100まで潜入、深度を維持します。」

「ドリイ」は静かに沈降していった。

「沈降の度合いから見ると、海水の粘度異常はこの深さでは無いようです。『ドリイ』報告。メイン電動機の消費電力。」

「『ドリイ』報告します。メイン電動機消費電力は720W/h」
「電動機負荷も正常値の範囲ですね。」

「よし。それじゃ周辺音響探査開始してくれ。」

「『ドリイ』音響探査。モード全周。即時開始。チャンネル2で即時転送」

「『ドリイ』了解。音響探査を開始します。チャンネル2送信ルーチン起動中。起動しました。転送開始しました。」

「ドリイ」管制卓の左側にある音響探査モニター群のうち二つに画像が現れた。一つは水平360度、もう一つは垂直360度をカバーしており、それぞれのビーム幅は90度である。左右側面方向で重複するためパルスのタイミングは微妙にずらしていたが、表示はそれを補正して、同一タイミングで表示される。探知距離は最大出力ではおよそ6海里が可能であるが、消費電力が大きくなるため、現在出力では最大1海里程度となっていた。そして、その全周スクリーンにはすでに無数の巨大生物が探知されていた。

「『ドリイ』現在位置で相対静止モード」

「『ドリイ』了解。相対静止に入ります。」

相対静止とは、「みこもと」の船体前後にそれぞれ二つずつある音波ビーコンを捉え、その位相を比較し、一定の位相差に保つ事で、「みこもと」に対して静止状態になるモードである。「みこもと」がダイナミックポジショニングで対地絶対静止状態にあるならば、「ドリイ」も同様となる。これにより、音響探知した巨大生物の動きを真方位と実速度で掴むことができる。

音響探知スクリーンの映像から、数体の巨大生物が「ドリイ」への接近コースにあることが判った。接近速度は1ノット以下とあまり早くは無い。この地点での海流は南東へ0.3ノット程度である。音響探知コンソールに付いていた長野は接近コースにある巨大生物でも、海流と同速度のものは衝突コース以外低危険度に分類し、海

流に逆らって、あるいは海流よりも速い速度で接近するものと、明らかに衝突コースにあるものを高危険度に分類、それぞれを色分けして表示させた。その結果、明らかに意志をもって接近していると思われる巨大生物は2体だった。両方とも距離は1海里に近く、現在の速度ではまだ2時間近く掛かる。長野はその他の探知された巨大生物の航跡もプロットした上で、2体の接近してくるもの以外の巨大生物に接近しないコースを割り出し、そのコース上に「ドリー」を動かすことを進言した。これで現在接近中の巨大生物がコースを変えるなら、確実に意志をもって接近してくる事が判明する。吉村は長野の進言にOKを出し、田中が「ドリー」を新しいコースに入れた。

接近（後書き）

ご意見、ご感想お待ち致しております。

新型（前書き）

第41話です。

まだ自宅ですので更新が可能です。出張はいまだ未定。でも必ず行かなければなりませんので、数日中には予定がはつきりするでしょう。

無線LANの問題は解決しそうです。 condominium自治会がかなり過激に動いています。やっている連中は最後のあがきとばかりに、めちやくちな攻撃をかけているみたいです。今はMacフィルタで弾かれても侵入してきます。うちは無線LANは現在「餌」として使っています。^^;

自治会から「PCの知識がある」って事で頼まれました。このコンドミニアムはかなり社会的地位の高い人達が住んでいて、弁護士や判事も居ます。その連中が検討した結果、他人様がお金を払って利用しているサービスにただ乗りする事は、この国の法律で「窃盗」になるそうです。現在は裁判所、警察に根回し中。IT関連の法律が無い国ですので、そういう形に持って行くんだそうです。

ま、警察が動けばこの問題も収まるでしょう。というか、別の処からの情報ではスパマーが何人か居るみたい。結構国際的な話になるのかも。

新型

「ドリイ」を新しいコースに入れると同時に、「みこもと」もダイナミックポジションングを解き、「ドリイ」と併走する形で移動を開始した。「ドリイ」が新コースに乗って約10分後、2体の巨大生物も針路を変え、「ドリイ」との邂逅針路を取ったのが確認できた。つまり、周囲に多く存在する他の巨大生物と異なり、この2体は確実な意志をもって「ドリイ」または「みこもと」に接近していることが明らかになったのである。多分、生物学的には大変な発見であろう。その証拠に生物学の村木は意志を持った接近が判明した瞬間から、呆然としてたまたまである。

「ドリイ」のコースをそのままに、「みこもと」は「ドリイ」との距離を開くマニュアルを開始した。巨大生物の狙いが「ドリイ」なのか、「みこもと」のかをはっきりさせるためであった。その結果、「みこもと」の動きには反応を示さず、「ドリイ」を狙っていることがはつきりした。そこで今度は「ドリイ」の機能を少しづつ低下させ、2体が「ドリイ」のどんなシグネチャーを目標にしているのかを探る実験を開始した。

「『ドリイ』、推進装置停止。」

「『ドリイ』了解、推進装置停止、停止しました。」

2体の巨大生物は何事もないように接近してくる。

「『ドリイ』、外部機器への電源供給停止。」

「『ドリイ』了解。田中さん、通信が停止しますが宜しいですか？」

「構わない。5分後、自動復旧。現在のリンクを再構築。」

「『ドリイ』了解。外部機器への電源供給遮断準備、5分後データリンクを自動復旧。電源遮断します。」

「ドリイ」からの音響探査信号が途絶えたため、「みこもと」の船体に設置されたナロービームマルチスキャンソナーを起動、数秒遅れてその映像がモニターに映し出される。すでに距離が半海里程度

となっていたため、船体ソナーでも十分に巨大生物を判別できた。電源供給が絶たれて3分ほど経過した頃、巨大生物の動きに変化が現れた。それまで音響探知に安定したエコーを返していたものが、突然エコーが乱れ始めた。体の姿勢を変えているものと思われた。そして「ドリイ」の外部機器電源が復旧する直前、音響探知で捉えていたドップラー変位が消失したのだ。つまり、静止したと言うことだ。「ドリイ」の外部機器電源復旧後、およそ1分ほど後、再度ドップラー変位が観測された。つまり動き出したと言うことだった。「ドリイ」外部機器から発する何らかのシグネチャーを追尾しているのは間違いが無かった。この時点で「ドリイ」外部装置で動作していたのは全て音響関連装置だった。測位ビーコン、音響探查機器、超音波高速データ通信装置などである。田中はこれらの音響装置を個別に全て停止させたが、巨大生物は止まらなかった。しかし電源を切断すると追尾が止まる。これは外部装置へ供給される電源に関連するシグネチャーを追跡していると結論せざるを得なかった。「吉村さん、これまでの経緯から考えて、この怪物は接地地電流を感知しているのでは無いでしょうか？」

「どういうことだ、長野。説明して見る。」

「本船の観測機器はほぼ全て、直流で動作しています。従って、電源を含む全ては閉回路として動作します。電池の+端子から流れる電流は機器の回路を通って、電池の-端子へ帰り、動作を完結します。しかし、例えば音響信号は海中に粗密波を発生させるために、海の電位に対して変化する電位が必要です。ところが機器、言い換えれば電池の-端子は海と同電位ではありません。回路的には接地という形で、海と電池の-端子の電位を強制的に同じにしています。元々電位が異なるのですから、電池の-端子と海全体の間に電流が流れます。これが接地電流と呼ばれるものです。これは同心円状の電流分布を持ち、一種の電界に近い形で周辺に拡散して行きます。怪物はこれを捉えて居るのではないのでしょうか？」

「うん、なるほど。海中の電界を感知するか・・・有りそうな話だ

が、距離1海里じゃ微弱なんてもんじゃないぞ。」

「ええ、ただ、ゼロでは無いですから、何らかの形で感知できるのではないかと疑っているのですが。あの巨体の理由がそれかも知れません。微弱な電流でも大きな面積でかき集めれば感知できるレベルになるのかも知れません。」

「なるほど。理にはかなっているな。実証しよう。長野、何か方法は無いか？」

「『みこもと』からケーブルを流して、それに絶縁された電池の端子を繋ぐという方法はどうか？もし、怪物が接地電流を感知しているならば、『ドリイ』よりも遙かに大きな電流値になる『みこもと』の電池群に引きつけられると思います。」

「よし、それ採用。準備に掛かってくれ。『ドリイ』は準備が整うまで、深度10mまで浮上、外部機器電源遮断の上、深度維持、待機状態に入れてくれ。2時間ほどで自動復帰。以上だ。」

「みこもと」から流されたケーブルによる巨大生物誘因は見事に成功した。「ドリイ」はいったん引き上げ、接地点の絶縁を行った上で、光学観測に絞って再投入されることになった。今度は巨大生物に接近を試みる。「ドリイ」はあまり機動力が無いため、接近するのは危険であったが、有人艇の露払いとしてはかなり有用であった。「みこもと」は「ドリイ」の準備が整うまで舵効最低速力での前進、停止を繰り返し、移動速度が1ノットに満たない巨大生物を誘引し続ける事になった。数時間後、「ドリイ」への絶縁作業が終わり、「ドリイ」は再び海に降ろされた。

再度潜水した「ドリイ」は、「みこもと」から流されたケーブルを追尾している巨大生物に接近して行った。時間が朝も遅い時間だったため、太陽は中天に近く、巨大生物が「みこもと」のケーブルを追う水深25m付近の視程は非常に良かった。そのため、極端に接近せずに巨大生物の概要がカメラに映し出される事になった。

やはり中心部に核とでも言える不透明な部分を持つ変異種だった。

ウミウシの仲間であるフラメンコ・ダンサーという軟体動物に似た動きで海中を移動している。もちろん、その巨体ゆえ動きは緩慢に見える。また核の部分以外は神経組織に似た筋状の部分を除き、原種の巨大生物なみに透明だったが海面近い事から外光を屈折するため比較的はつきりと輪郭が観察できた。輪郭部分を拡大撮影した画像には輪郭部分から陽炎のようなものが出ているのが判った。この正体は「ドリイ」が巨大生物の進行後ろ側に回り込んだとき判明した。巨大生物の進行した後に帯状に海水粘度の差が認められたのだ。ただし、その後「ドリイ」が巨大生物の進行コースに沿って移動した時、一定以上の水深ではその粘度変化がほぼ無くなることが判明した。概ね水深60mを超える処では、海水粘度に変化が無かったのだ。

この事から、「みこもと」観測班は巨大生物は可視光線や紫外線で分解されるのではないかという疑いを強く持つに至った。しかし、すでにゼリー状の物体が舷側を這い上がってきた事実があり、可視光線、紫外線の強い大気中の環境でも活動が出来る事は実証されている。この矛盾に村木を筆頭とする観測班の生物学担当は頭を悩ませることになった。それでも、この「ドリイ」の観測結果は巨大生物対策に非常に重要なヒントを含んでいる事は明白だった。

「ドリイ」が餌のケープルを追尾する2体の巨大生物を観察し始めて2時間が経過した頃、それは突然現れた。最初は音響観測の限界近くに現れたあまりはつきりしない反射だったため、しばらくは音響観測室でも、「ドリイ」制御室でも見落としていたほどだった。距離が900mほどに接近したとき、音響観測に当たっていた黒岩がそれに気づいた。

「吉村さん、こちら音響観測室、どうも巨大生物と思われる非常に動きの速い反応が接近しています。」

「速いってどのくらいの速度なんだ？」

「3ノット超えていると思います。」

「判った。長野、『ドリイ』のセンサーで捉えているか。」

「はい。これだと思います。今、追尾マークしました。速度は約3ノットです。」

「で、どっちへ向かってるんだ。」

「餌の方ですね。後9分くらいでケーブルに届きます。」

「それなら『ドリイ』で観測可能だな。念のため少し距離を置こう。」

「ただ、『ドリイ』の電池残量が少なくなっていますので、大きな移動はその後の観測に影響しますが。」

「構わない。この速いやつを撮影したらすぐに回収しよう。」

「了解」

田中は「ドリイ」に指令を送り、現在位置から300m程度「ドリイ」を移動させ、接近してくる新種と思われる巨大生物のコース周辺から距離を取った。その数分後、極低速で曳航されているケーブルに到達した巨大生物から強烈な電撃が加えられた。もともと、電池自体はその他のものから完全に絶縁されており、また「みこもと」自体も電撃対策を施してあるため何事も起きなかったが、海水の持つ僅かな電気抵抗の両端に発生した電圧だけでケーブルの接続点でアーク放電が発生した。この生物の起電力が規格外れである証左だった。

そんな中、「ドリイ」はこの生物に接近し、撮影を開始していた。「みこもと」の「ドリイ」制御室大スクリーンにリアルタイム映像が映し出された時、どよめき起きた。そこに映し出されたのは新たな変異種と思われる姿だった。不透明な核を持つ事はこれまでの変異種と同じだったが、その大きさが二回りほど大きくなっており、そこから伸びる神経節様の筋状の部分の先には核に似た、小さな球状の部分があつた。そしてそこからさらに細い筋状のものが無数に延び、その巨体表面を荒い網目状に覆っていた。これまでの巨大生物と比べるとそのサイズは一回りほど小さくなっていたが、その動きは敏捷と呼んで差し支えが無いレベルの早さを持っていた。「みこもと」上の計器には、最初のものより規模ははるかに小さいが、

間欠的に電撃が繰り返されて居る事が記録されており、これまでのものと比べると、はるかに進化した形態で有ることを示していた。

「これは・・・生物がこれほど速く進化するなど信じられません。試行錯誤すらせずに、有用と思われる機能を発展させるのは無理です。」生物額の村木は呻いた。

「村木君、現実を受け入れるべきだよ。驚くべきことではあっても、現実には現実だ。」

「しかし、これを認めたなら、これまでの地球生物の進化は何だったんだ、と言うことになります。この生物の前には既存の地球生物は生き残れません。人類も含めて。」

「たしかにそうかも知れんが、それに対処する方法を見つけ出すのが今回のミッションでもあるんだ。其れを忘れるな。」

新型（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

「かいえん」(前書き)

PVが1万突破しました。つたない文章を読んいただきましたまして感謝いたします。

話もいよいよ佳境です。なるべく科学的にボロが出ないようにしたいと思つていますが、そこはそれ、フィクションですのでほころびが目立って来ています。まあ、そんなレベルまで持ち込むな、というお叱りは甘んじて受けます。

なんか出張は今週中は無さそうです。来週は週初めに日帰りの出張が2回くらい、決まっていますがこれは問題ないでしょう。それでは第42話をどうぞ。

「かいえん」

「ドリイ」による新型変異種の確認は「みこもと」の生物学部門に大パニックを引き起こした。下手をすれば数日というスパンで、活動力も形態も変異した亜種が現れる生物など、科学的常識を超越している。そんなものが現れたのだ。パニックになっておかしくなかった。その上、その後の「ドリイ」の観測で簡易線量計（「ドリイ」の演算装置防護のため搭載されている。）ではあったが、距離50mで平方m辺り1000万ベクレルを超える放射線を検出したのだ。タンパク質を基礎とする生物ではとんでもない値と言えた。幸い防護対策が功を奏して、「ドリイ」の機能障害は免れ、観測直後に吉村の命令で「ドリイ」は緊急回収された。

当初、「ドリイ」の観測に引き続いて、「かいえん」による有人観測とサンプル採取が行われる予定であったが、この新変異種の登場でそれは延期され、変種の核となっている不透明なタンパクが発見された海域、つまり潜水艦沈没地点へ戻って「かいえん」を潜水させる事になった。電源系の船体との絶縁を入念に施し、搭載される放射線測定装置、音響観測装置にも同様な対策が講じられた「かいえん」は、ほぼ沈没潜水艦直上から潜航を開始した。電池は現在接続されていない予備を含めて緊急行動消費2時間を含む6時間の活動時間を保証していた。スラスターのプロペラは新型変異種の速度を考慮して、消費電力よりも速度に重点を置いた形状のものに換えられ、緊急出力時最大水平移動速度4.8ノットを発揮できた。

潜航を開始した「かいえん」は、密集する巨大生物を縫うように潜入していった。前回同じ地点に潜入したときの10倍は超えると思われる巨大生物密度だった。それでも、すでに反応する原因を掴んでいるため、潜入に危なげは無かった。カメラの視界に入った巨大生物は、ほとんどが核を持つ変異種で、その中にちらほらと核の大きな新型変異種も混じっていた。フラッドライトを消して、巨大生

物の発光だけを観測すると、もつとはつきり区別が可能だった。原種巨大生物は発光が不規則で、秩序が無く発光していた。それに比べ、変異種は核を中心とした部分から、筋状の部分にかけて、規則的な発光を繰り返しており、周辺の透明な部分もそれに連動するように、規則的な発光をしていた。さらに新型変異種は核部分が連続発光しており、明滅はしていない。神経節様の部分はそれぞれが規則性を持った明滅を繰り返し、表面の網目状の筋では発光点が移動しているように見える。そして、核中心部分から、特徴的な青い光、チェレンコフ光と思われるものが見られた。長崎と一の瀬は断続的に観測を続けながら、沈没潜水艦に接近して行った。沈没潜水艦直上、海底からおよそ150mほどの処、深度3100mまで潜入した時、その異常な状態が判明した。

「『みこもと』こちら『かいえん』応答願う。」

「『かいえん』こちら『みこもと』。長崎さん何かありましたか。」

「長野君か。海底の様子が変だ。潜水艦が音響探知に掛からない。設置したビーコンも非常に微弱だ。」

「了解です。本船探査装置で探ってみます。しばらく音響探査系を落としていただけますか。」

「了解した。音響系を落とす。その間フラッドライト照射による海中映像を送る。」

「了解。それでは本船音響観測装置起動します。」

「かいえん」との交信を効いて音響担当の黒岩は遠隔操作で本船設置のマルチビームソナーによる観測を開始した。その結果は驚くべきものだった。前回この地点の海底を走査したときには無かった、大きな無反響域が出現していたのである。

「長崎さん、海底に無反響域があります。およそ潜水艦沈没地点と推定されるポイントになります。」

「そうすると潜水艦が音響探知できないのは正常なんだな。」

「その通りです。無反響域のおよその直径は100m、『かいえん』現在位置から、50mほど真下になります。」

「判った。それではもう40mほど潜って、観察しよう。ただ、視程が悪い。」

「こちらのモニターでは艇外の放射線量も大きくなっています。まだ支障が出るレベルではありませんが、十分注意願います。」

「了解した。艇内モニターでの線量は規定値以下だ。線量が高くなるようならすぐに逃げる。」

「安全第一でお願いします。」

「了解」

「かいえん」は深度を30m下げ、一旦停止、そこから15mほど非常にゆっくりと深度を増していった。視程はすでにフラッドライトを3基同時点灯させても5mほどしかなく、40mの降下ではカメラに写らないと判断したためだった。そしてそのマニューバーを終えたとき、「かいえん」の観測窓から見たのは、表面で微発光を明滅させる巨大な黒いボールの一部だった。すぐにCCDカメラによるビデオ撮影を行い、その画像を「みこもと」に転送したが、画像にはかなり酷いノイズが混入していた。

「長崎さん、ビデオ受信してますが、ノイズが凄いです。それと艇外線量が危険レベルぎりぎりまで上がってます。」

「了解。艇内線量も上がりだしている。これから1mまで接近してサンプル採取を試みる。おそらくアラームレベルまで被爆するはずだ。採取後すぐに緊急浮上するから、用意頼む。」

「了解。除染装置スタンバイします。気をつけて下さい。」

「了解、これからサンプル採取に入る。」

「かいえん」はマニピュレーターに放射線防護を折り込んだセラミック製の1リットルサンプル容器を、これもセラミック製の柄を付けて装着し、黒いボールの中に突っ込んだ。突っ込まれた周囲では激しく発光し、サンプル容器の侵入に抵抗しようとするようだったが、委細構わずサンプル容器を入れ、黒いボールの内容物を確実に採取するために数回上下させた後、もう一つのマニピュレーターで掴んでいた蓋を取り付け密閉した。「かいえん」はそのまま距離を

取り、500mほど水平移動してから、バスケットに用意されていた耐圧容器を取り出し、その中にサンプル容器を収めた。耐圧容器を密閉し、加圧された内容物が漏れないように圧力を維持できる事を確認した後、緊急浮上のルーチンに入った。サンプル採取に接近したときの艇内放射線はあつという間にアラムレベルを超え、距離を取ってから線量が低下するまでしばらく時間がかかるほどだった。

浮上した「かいえん」は予想通り酷く汚染されており、吊り上げフックを掛ける程度の作業も不可能なレベルの線量だった。かなりの距離からギャフなどを使って吊り上げフックをようやく取り付けた後、長崎と一の瀬を艇内に残したまま除染作業が行われたが、特に艇の前部で線量が一定以下にならず、長崎と一の瀬は艇内に用意されていた放射線防護服を着込んで、ハッチから艇後部へと脱出することになった。「かいえん」をつり下げたまま、「みこもと」の揚収ベイ周辺は高い線量により立ち入り不能となってしまった。

除染不能となった原因を探るため、遠隔操縦の作業装置を用いて、「かいえん」前部のサンプル採取を行った結果、「かいえん」前部の構造物質に、中性子吸収による放射性同位体化が認められ、同時に構造物質の物性変化も認められた。これは黒いボール状の物体から中性子線の放出があることの証左であった。採取したサンプルも耐圧容器表面からの線量が大きく、これも遠隔操縦の作業装置によりバスケットから取り出され、放射線防護容器に収めた後、放射線防護研究施設に持ち込まれる事になった。

「かいえん」は材質変化が認められるため、今後の潜水は禁止され、遠隔操作により前部構造の表面部分を削り取る作業が行われ、またマニピュレーターなどの付加装置は取り外して放射性廃棄物として廃棄されることになった。耐圧船殻の一部も中性子吸収による物性変化が認められたため、おそらく「かいえん」は廃棄されることになると予想された。

「かいえん」を事実上失った「みもと」はこれまでに得られたデーターを整理、分析するため、一度、母港横須賀へ寄港することになった。帰港の航海中も「かいえん」の採取したサンプル分析のため生物学担当班は不眠不休だった。失った犠牲に見合う成果は必ず持ち帰る、という闘志を燃やし、消沈している長崎と一の瀬に報いるという大きなモチベーションがそれにさらなる力を与えていた。そしてその努力は報われることになる。

「村木君、それでは報告してくれ。」

横須賀帰港を翌日に控えた、調査班全体ミーティングで吉村は村木を促した。

「はい。それでは『かいえん』が採取したサンプルの一次分析結果を発表します。まず結論から言いますと、この生物は常温核融合を行っている形跡があります。」

会議室に集合したメンバーからどよめき上がる。

「機序は以下の通りです。まず、起電能力により引き起こされる電流により、海水を電気分解します。これは採集されたサンプルの中に気体塩素が通常の数百倍の濃度で含まれていることが傍証になります。これにより発生した水素のうち、海水に一定の割合で含まれる重水素をタンパク構造内に取り込んだ放射性物質を触媒もしくはエネルギー源として用いることで重水素・重水素核融合を常温で行い、それによって放出されるエネルギーを起電機能により電気エネルギーに変換しているものと推察されます。核融合が発生しているエビデンスは、中性子の放出です。タンパク分子内に取り込んだ放射性物質の分裂による中性子放出の理論値を数百倍超える中性子の放出が確認されました。」

「生物核融合炉と言うことですか、それは。」誰かが言った。

「そうです。そう呼んで差し支えないと考えます。それともう一点、判明したことがあります。『ドリイ』が観測した旧型変異種における透明部分の分解らしき現象ですが、これは確実に分解が発生していることが判明しました。これは原種のゼリー状物質、先に舷側を

這い上がってきたものですが、これにより確認をしました。機序は海水表面近くに発生する藻類プランクトンのいくつかの種類に共通して存在する酵素が紫外線による刺激を受けた場合、このプリオン類似タンパクの分子構造を破壊する事で分解されます。実験室環境では確認されました。これが外部環境で機能していることは『ドリイ』の観測で明らかですので、この酵素によるタンパク構造分解は確実なものとして報告します。ただし変異種の核部分でこれが成り立つかは、まだ不明ですが、酵素の働きは特定のアミノ酸結合の切り離しですので、原種、変異種ともに、このアミノ酸結合部は共通ですから、放射線が酵素に与える影響さえ解明できれば、この酵素による変異種の分解が可能かどうか、判明すると思われます。以上です。」

「かいえん」(後書き)

ご意見、ご感想をお待ちします。

非常事態（前書き）

第43話です。

お楽しみ下さい。

非常事態

この村木の報告は「みこもと」から地上へ送られ、さすがに一般広報はされなかったが、各研究所へは送られ、「みこもと」の持ち帰るサンプルを用いた再検証の準備を各研究所は開始した。また、二番目に報告された酵素を持つ藻類プランクトンを培養する実験も開始された。

翌日、横須賀母港へ帰還した「みこもと」の専用岸壁には、すでに理化学研究所の研究者が今回の調査行のサンプルを研究所へ運ぶために待機していた。しかし、今回の帰港は前2回と比べると、少しのんびりしていた。「かいえん」の状態が判明するまで次の出港は無いからだった。嚴重に放射線遮蔽されたサンプル容器を核燃料輸送並みの嚴重さで理化学研究所まで輸送するためのキャラバンは、交通量が少なくなる深夜になってから「みこもと」係留岸壁を離れた。それ以前に「かいえん」の陸揚げも行われたが、調査機構の陸上格納庫は放射線防護設備を持たないため、係留岸壁の一部にコンクリートと仮設シートで保管場所を作り、そこに収容された。ここで「かいえん」の詳細な調査が行われる予定だった。

理化学研究所へ運び込まれたサンプルは、嚴重な放射線防護が施された研究室で開封と減圧が行われ、その後海水槽へ入れられた。ここでこの灰黒のゼリー状物体から放出される放射線測定が行われた。その結果、この物質が取り込んでいる放射性物質が特定され、95%の放射性セシウムと5%の放射性ストロンチウムが同定された。また、明らかに核分裂反応で発生する中性子とは固有エネルギーの異なる中性子が検出され、D-D核融合反応で放出される中性子と厳密に同じエネルギーを持つ事が判り、常温核融合が発生していることが確認された。さらに別の研究班はこの核分裂、核融合で発生するエネルギーが、特定のアミノ酸に含まれるリンなどの電子軌道準位を変化させ、それによりタンパクが電位を持つ事を確認した。

電位を持ったタンパクは、特定の刺激を受けた場合、結合を変化させそれにより導電性を獲得、タンパク一つ一つの電位は小さいものの、凝集時の数がものを言い、巨大な電圧、電流を発生させる機序を解明した。核物質を取り込まない透明なタンパク凝集体も同様な機序だが、電子軌道準位を変化させるエネルギーは外部からの可視光線などの刺激で、非常にゆっくりした反応であることも判明した。放電の機序はどちらも同じである。

さらに、透明な原種の場合、一定以上の可視光線、紫外線などを受けると、凝集時に電荷のやり取りで発生する電流が増大し、自身が分解されることも判った。この電荷のやり取りが巨大生物の発光の原因であった。個々のアミノ酸にまで分解されたタンパクは、即座に周囲の他のタンパクの増殖受容体に取り込まれ、新たなタンパクの形成が始まる。この増殖速度と分解速度が均衡する水深はおよそ50 m、それより浅い海域では最終的にはアミノ酸に分解される。ただし、変異種の核となっている変異タンパクはこの限りでない。可視光や紫外線では分解が発生しない。そして増殖機能は原種と同様に機能するため、大気中に出ても水分が在る限り増殖出来る事から、一定のサイズの凝集を保つ事が可能であった。

分子生物学の方も多大な成果を上げていた。このタンパクは、相当に古くから存在していた可能性が、いまだ汚染を受けて居ないと考えられるインド洋の深海部から発見されていた。セイシェル諸島西側に延びる提督海盆底で採取された海水から、ほぼ同一の組成を持つタンパク分子が発見された。おそらくこの海盆底の海水は循環に千年単位の時間が必要と思われ、このタンパク分子はその組成を千年単位で保っていたと考えられていた。また、牛海綿状脳症の原因である病原性プリオンとの関連も研究され、その増殖過程がほとんど同一であること、同様な酵素で分解が起きること、などから、かなり高い確率で関連性が指摘された。

しかし、最も重要な発見は、望月、チャンなどの海洋生態系研究が

らもたらされた。このタンパクは海洋生物を皆殺しにする非常に危険なタンパクであることが判明したのだ。これまで観測結果として魚類や底生生物などの激減が報告されていたが、その報告を裏付けるタンパクの作用が判明した。作用には二つがあり、まず、小型の魚類や底生生物の場合、高粘度海水に入ると、僅かな生体電流により刺激を受けたタンパクの放電により筋肉運動を阻害され麻痺に陥る。その後引き続き放電作用で海水共々電気分解が起き、生物の体をアミノ酸レベル、あるいは元素レベルまで分解する。この時アミノ酸は即座にタンパクの増殖機能に取り込まれ、最終的には分解された元素も化学反応により海水の成分若しくはアミノ酸構成元素としてタンパクの増殖機能に取り込まれて行く。また、大型魚類などがタンパクを経口摂取した場合、胃や腸から体内に取り込まれ、一定の量以上になった場合、同様の機序で体内で増殖を始める。特に体液循環によつて魚体各部に運ばれ、そこで起電能力により組織を分解、それによつて生成されるアミノ酸を増殖機能に取り込んで急速に増える。魚体の大きさによつて異なるが、ある量を超えて増殖すると魚体は生命維持が不可能になって死んでしまう。日本沿岸で発見されるタンパク凝集物はこのような道筋で形成されたものであることが判った。

そして、この反応は人体でも同じ効果を持ち、タンパク塊を人血内に置いた結果では、血球成分を分解し、増殖を始めた。また、成分分離を行つて居ない生鮮血での実験でも、タンパク分子数が少ない場合は白血球による捕食が働くが、一定量を超えた場合、白血球すらも分解することが判った。マウスによる実験では、十分な量を注入すればおよそ30時間程度で、骨や体毛まで分解、透明なゼリー状物質に変えてしまった。

この実験、研究結果は非常に重要と判断され、直ちに政府に報告された。政府は直ちに日本全土で海岸線への立ち入り禁止、漁船の操業禁止、魚介類の流通禁止措置を取ったが、これらの措置を完全に実行するのは困難だった。政府は各地方自治体、警察、保健所など

を総動員して、事態の把握に努めた結果、すでに20例を超える被害があつたことが報告された。特に東北地方太平洋岸南部に集中していた。この報告に寄れば、急死した被害者が休日を含んでいたため、茶毘に付されず安置されていたが、火葬場に運んで棺を開けたところ、中にはゼリー状物体しか無かつた、といった報告すら在った。また、被害者のほとんどは経口摂取の結果だつたが、中には漁労中に手を切り、そのままゼリー状物体を扱つたため、切り傷から血流内に侵入し、被害者が死亡したという事例もあつた。政府は緊急処置として全国の魚介類市場を閉鎖、鮮魚の流通を禁止したが、すでにこのタンパクに汚染された鮮魚は全国規模で流通に乗っており、また冷凍しても解凍した瞬間からタンパクの活動が再開されるため、各家庭の冷凍庫で保存される鮮魚全てを把握することは困難だつた。それでも、タンパクであり、摂氏60度以上で5分ほど過熱すれば活動は停止するため、鮮魚の生食を控えればかなり被害を抑えられる事は確かだつたが、日本人の食文化に鮮魚の生食は欠かせないものであり、流通末端の状況を正確には把握できない事もあいまつて、今後も被害は増えそうな勢いだつた。

そして、この状況を悪化させたのは、マスコミであつた。政府は実験ビデオ（低速度撮影によるマウスの変化）などまで使つて広報し、またかなり判りやすいタンパクの作用機序を説明したが、理解能力のないくせに凝り固まつた記者やTVコメンテーターにより、原発事故と関連づけるような報道をされた結果、福島県、宮城県、茨城県周辺以外の太平洋岸で被害が頻発することになった。政府はこれに対して同じ番組や新聞紙面で訂正を行うよう、報道各社に要請し、報道各社もこれに応じたが、おざなりな訂正でお茶を濁した事から、本当の危険が民衆に定着せず、業を煮やした政府が、非常事態宣言を行い、政府命令として報道各社に命令を発出した結果、正確な情報が出なくなり、被害が減少を始めた。

このタンパクによる被害は、日本にとどまらないのは当然だつた。ハワイでは、島に残留した島民から被害者が続出し、米国政府は日

本と同様の措置をハワイ州と太平洋沿岸各州に発令することになった。またゼリー状物体はすでに津軽海峡沿岸や対馬海峡沿岸でも確認されており、朝鮮半島、中国沿岸もすでに危険域となっていた。しかし、韓国政府や中国政府は事態を重要視せず、日本の混乱を好機と捉える節すらあったため、双方とも沿岸部住民に壮絶な被害を出すはめになった。

現政権は無能と言われて久しい政党政権であつたが、少なくとも非常事態宣言を出す程度には機能していた。しかし、対策となるとお寒い限りだった。非常事態対策会議なるものを立ち上げたが、人選が偏っていたため、「みこもと」観測班と理化学研究所が提示した結果を理解できない人間が多く、すでに死亡者が出ているにもかかわらず、何が問題なのか理解していない者まで含まれているとあつては、対策が進まないのは当然であつた。

「議長」

「鳩沢君」

「えー、今回の非常事態につきましては、よく判りかねるのですが、一体何が問題なのでしょう。か。」

関係者として会議に呼びつけられた吉村は議長席の後ろ側で頭を抱えた。

「海洋調査機構、吉村君お答え願います。」

「議長。ただいま議長よりご紹介にあずかりました、海洋調査機構の吉村です。すでにTVや新聞などでも広報されておりますが、現在、北太平洋中部、小笠原諸島の東、約2000Kmほどですが、ここを中心に膨大な量の特異なタンパク質分子が増殖している事が私どもの調査で確認されました。このタンパクは以前話題になりました、狂牛病の病原体であります病原性プリオンというものに類似した構造を持っており、自己増殖を致します。このタンパクを厳重な管理下に本邦に持ち帰りまして、理化学研究所その他のご協力を仰いで研究致しましたところ、全ての生命体に非常に有害な性質を

持つ事が判明し、急遽政府関係機関に報告いたしました。その結果、このタンパクの塊が本邦沿岸にも現れている事実もあり、また魚介類がその体内に取り込んだものを人が摂取した場合でも非常に有害であるため、今回のような措置がとられたものと理解しております。

「

議長」

鳩沢君」

「その有害な性質というのはどういうものですか。0157のようなものですか？それとも狂牛病と同じようなものですか？」

「私も人体における作用を実際に見ておるわけでは在りませんが、海棲生物の場合、骨や鱗を含む全てが分解され、ゼリー状の物体となります。詳しくは病理学の方から説明があると思いますが、増殖可能な量が体内に入った場合、おそらく死亡率は100%になると考えます。」

議長」

鳩沢君」

「そんな恐ろしいものがどうやって国内に持ち込まれたんですか？あなた方が持ち込んだの？」

「別に誰かが持ち込んだわけではありません。海には海流がありますし、魚は回遊します。日本沿岸に現れたのはそう言う原因とされます。」

「しかし先ほど本邦に持ち帰って、と言ったじゃないですか？」

「学術サンプルとしてです。嚴重な管理下と申し上げましたがご理解いただけなかったでしょうか？現在はP4レベル管理下にあります。これは最も嚴重な生物汚染防止処置が執られた施設で管理されている事を意味します。」

「それが漏れたんじゃないの？」

「お手元の資料に在りますが、サンプルは1兆分の1グラム単位で管理されております。現在までの漏出はゼロです。」

「なんか疑わしいねえ。何より専門用語が多すぎますよ。誤魔化し

「ているんじゃないの？」

吉村は議長に断り、政府委員の席に出向き、一点確認を取ったあと、答弁席に戻った。

「鳩沢さんがどのようなご資格で参加されているのか私には判りかねますが、あなた程度の頭でも判るように説明しましょう。このタシバク分子は、私ども調査機構のコンピューター・シミュレーションによれば、およそ2年で太平洋全体を覆いつくし、およそ3年で世界の海洋全域に広がります。この意味が理解できますでしょうか？」

「失礼な人ですね。で、それがどうかしましたか？」

「ああ、やはりお判りにならないようですね。議長、この方のご質問にはお答えするだけ無駄と思いますが。以上です。」

「吉村君、ご苦勞様でした。」議長役の文部科学省局長もそれは理解していた。

「議長、私の質問は終わっていませんが。打ち切られては困ります。」

「鳩沢君、議長職権でお伺いしますが、あなたのこの会議へのご参加はどのような資格でしょうか？」

「私は内閣官房からの要請を受けて参加しております。資格は環境問題専門家としてであります。現職は報道機関の環境アドバイザーです。」

「幸い、ただ今本会議には内閣官房長官にご臨席いただいております。内閣官房長官、議長職権で鳩沢委員の参加資格に疑義がありません。申し訳ありませんが、別室にて鳩沢君とご協議いただけませんか。先ほどの吉村君の答弁から本会議の共通理解事項をご理解いただけないようです。その間本会議は休憩と致します。」

非常事態対策会議という実務レベルの会議でこの有様だった。子供でも可能な「疑い」「誹謗」するだけで飯を食ってしまう日本の環境問題の悪弊だった。70年台の公害問題で教条主義的な大企業悪

玉論を振りかざし、成功を収めた過去の亡霊と言えた。

もちろん会議自体はこれまでになかった事象への対策を話し合うものであるから、ともすれば視野狭窄を起こしがちな専門家だけよりも、全く関係のない分野からの人材を迎えることは非常に重要ではあったが、ただ一種のタンパクが海洋全体を覆う事の意味が理解できない頭から建設的アイデアが生まれると考えるのは、猿が偶然にシェイクスピアの戯曲をタイプするのと同じレベルでしかない。しかし、この日の会議の後、鳩沢に類する委員は自発的に辞退を申し出た。しかしこれは自分たちの能力を悟ったからでは無かった。会議の進行を妨げる事で自分たちの思う方向へ導こうとする思惑は、韓国、中国からの悲鳴のような指令で中止せざるを得なくなったのだ。日本で効果的な対策を早急に考え出してもらわなければ、国の存続すら危ぶまれる事態が中国、韓国、おそらく北朝鮮でも発生していた。中国や韓国の息の掛かった委員には、双方からほとんど悲鳴に近い調子で実務会議を妨げるな、という指令が飛んでいた。これらの連中には会議を混乱、遅延させる事が必要ないなら、居るだけ無駄だった。それゆえ、委員を辞退したのだった。

しかし、おかげで会議はスムーズになった。国民の保護は現在の緊急対処がそれほどの外れではない事から、これを継続、徹底させる方向で決着した。前動続行であることから役人にもウケは良い。タンパクへの対策は、調査機構と理化学研究所から藻類プランクトンの持つ酵素についての説明があり、当面はこのプランクトンの増殖と放流、問題海域でのプランクトン増加手段の模索を緊急事項として実行し、次の段階で酵素そのものの工業的生産とその散布手段開発を行う事になった。次段階とは言っても、時間が掛かるため、これら全ての対策は同時着手することに決定した。そのための予算措置は当面は内閣予備費から、今年度内分は、補正予算を組む事が政府委員から提示され、進む方向と金の目処はついた格好になったが、問題は人だった。国内の大学院、研究所から人員を徴集するのはもちろんだったが、海外の研究施設に勤務する日本人、いや、日本人

に限らずこの緊急事態を理解して手を貸してくれるのならば、国籍も性別も関係無く、日本政府が身分と収入は保証する条件で人を募った。この結果、経済状況の厳しい欧州などの施設、研究所から多くの応募があり、理化学研究所のみでなく、筑波や東大などの研究施設もこのために開放される事になった。特に近大の研究室はマグロ養殖用の生け簀を保有しており、この一部を利用して藻類プランクトンの養殖研究に最適と判断され、最も活動の激しい処になった。しかし、一部の部門では日本人以外の研究者を入れるわけに行かない部門もあった。生体核融合である。核物質を取り込んだ変異タンパクが行う生体核融合については、政府と調査機構、理研以外に情報が出されていない。うまく制御できるのなら、画期的エネルギー源として有効利用できるかも知れないのだ。また原種のタンパクにしても、非常に僅かな可視光や紫外線を利用して発電を行って居る。この方法は例えば夜間、月明かりや星明かりでも発電可能なセルの開発に非常に有用であることは間違いが無かった。

非常事態（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

海藻（前書き）

ちよつと間が開いてしまいました。カトリックの国なんでクリスマス前はとんでもない狂騒状態になります。それに仕事が重なると、酷い事になってしまいます。スーパーもショッピングセンターも銀行もどたばた。

おかげで出張話もクリスマス後という事になりました。それでは第44話です。

海藻

このような状況から、日本政府は一部の研究を秘密裏に行わざるを得なかったが、タンパクの性質や分解酵素の存在、働きなどは完全に透明な状態に置いた。特に分解酵素の存在はこの致死性タンパク対策の決め手と受け取られた事もあって、相当数の世界の研究機関が研究を開始した。日本では近大海洋研と海洋調査機構がタイアップし、この酵素を含む藻類プランクトンの爆発的増殖の条件を探っていた。この藻類プランクトンのうちのいくつかは、爆発的増殖を起こすことで知られている種だったのだ。しかし、栄養塩類の豊富な沿岸域ならいざ知らず、大海洋の真ん中という、プランクトン増殖には非常に不利な環境での爆発的増殖は自然状態では起こりえない。人為的に局所的な爆発的増殖を発生させる操作が必要なのである。その条件を探っていた。

調査機構では、沿岸部に漂着するタンパク塊、ゼリー状の物質だがこれを分解させるため、栄養塩類の豊富な沿岸部での増殖から着手した。近大海洋学部が和歌山県などに保有するマグロ養殖用の生け簀のいくつかを借り受け、実験室環境で殖やした種プランクトンを撒いて、増殖速度などを調べた。しかし、いくら分裂、増殖が速いプランクトンとはいえ、生き物を扱うことに変わりはない。短時間で成果が期待できる研究ではなかった。

この頃「みこもと」は再び海へ出ようとしていた。中性子被爆し、構造物そのものが放射性を持つようになった、「かいえん」の目処が立った事からだった。さらに「ドリイ」の分身とも言える、「ドリイ」自身が遠隔制御できる深深度作業体が突貫作業で完成し、「ドリイ」の繊細なAIを高線量に暴露しなくて済む対応が可能になった事もそれを加速していた。

「かいえん」は耐圧船殻外側に取り付けられた非耐圧部の8割ほどを交換、一部放射性化した耐圧船殻は表層を冷間環境で削り取った

結果、放射線量が自然状態と大差なくなったことから、耐圧船殻の耐圧を半分に下げ、潜入限界深度を5000m以下とすることで運用の目処が付いたのだった。この作業で耐圧船殻の厚さが2mmほど減少した事に伴う措置だった。某造船会社の大直径旋盤を政府が買い取り、設置された工場の区画に放射線防護を施した上で、熟練作業員が放射線防護服を着用して、なおかつ遠隔操作で耐圧船殻全体の表面を削り取る、という前代未聞の作業により運用に目処を付けたのだった。材質変化については削り取った切り屑を分析することで、放射性化していない部分の特性に変化が無い事を確認、安全係数を大きく取ることと運用を可能としたのだった。

「ドリイ」の遠隔作業体は、「ドリイ」プロジェクトチームの不眠不休の力作だった。高線量区域での「ドリイ」に発生する高密度集積チップへの影響は排除不能と考えられ、であるならば、「ドリイ」の手を長くすれば良い、という発想だった。しかし、インテリジェントな端末とすれば、また同様の影響を受ける。そこで放射線に強い、昔のチップを復活させ、それをMIL規格の防護付きセラミックスパッケージに収めることで単体でも100Svレベルの環境で動作し、それを放射線遮蔽を考慮した筐体に収容する事で500Svオーダーの環境でも作業が可能な作業体を作り上げることに成功した。操作は「ドリイ」から50mの6素線ケーブルを用いて、シリアルデータのやり取りで行う。あまり複雑な作業はできないが、6動作をメモリーしており、ルーチンワークならば、このプリセット動作と作業体のマニューバーでこなせるような形になっていた。「ドリイ」の外部I/Oを改造して本体両サイドに1基づつこの作業体を装備する。作業体のセンサー類、特に目となるCCDカメラは、分厚い鉛ガラスの奥に置かれ、視野が狭くなるデメリットはあるが、外部筐体が耐久出来る線量までは映像が確保できる構造になっていた。その他耐圧ケーブルにも、線による誘導電流対策、耐放射化対策が施されており、おそらく、爾後は原子力発電所の耐圧容器内でも使用できると目されていた。

十分とは言えないが、今回のタンパク凝集体観測のためには、有用な装備が整った事で、「みこもと」は出港準備に入った。今回のミッションは、タンパク凝集体の分解に重点が置かれ、これまでの観測の成果から導き出された対策を実地に試験することで、有効な対策を探るという、すでに犠牲者も出ている事からかなり重いミッションとなっていた。

それでも出港準備作業は普段と変わりなく、熟練の域に達した乗組員、観測作業員により、手際よく進められていった。唯一、通常と異なる作業は、非常に重い、道路交通法の限界である21トンもの重量を持つコンテナが積み込まれた事だけだった。これは海洋学の望月が特に申請して積み込んだものだった。コンテナの送り元は某インスタントカイロの製造メーカーで、およそ海洋調査とは縁のない会社であることを積み込んだ作業員は不思議に思っていた。準備を整えた「みこもと」は母港岸壁を離れ、再び大海へ舳先を向けた。

今回の「みこもと」のミッションで緊急を要するものは、日本沿岸のゼリー状タンパクの分解試験だった。そのため、「みこもと」の甲板にはいくつもの培養プールが置かれ、数種類の藻類プランクトンが培養されていた。特定の海域に最も適合していると思われるプランクトンを選別する。それゆえ、最初のミッション遂行は福島県南部、陸岸からわずか3海里の地点だった。水深は60m程度。50mより浅い海域のタンパクは再生産速度よりも分解速度が速いため、最終的には消滅する。しかし、50mより深い水深にあるものは、再生産が分解より速いため、増殖して行く。このためいくらか50mより浅い海域で分解が進んでも、其れより深い海域から際限なく供給される事で、このままでは永久に危険は排除できない。

「みこもと」は「みずなぎ」の運用体制に入り、野瀬、津田、長崎、一の瀬の4操縦者がフル稼働、2艇体勢で60m以深のタンパク塊付近にプランクトンを散布する作戦を採った。2艇でそれぞれの担

当海域にプランクトンを散布、72時間後、その効果、状態を確認すると同時に、別のプランクトンを散布、これを持ち込んだプランクトンごとに繰り返す。

最初から3番目のプランクトンまでは、あまりはかばかしい効果を見せなかった。これらは表層域で主に繁殖するプランクトンだった。4番目、一般には藍藻類と呼ばれるプランクトンを散布して72時間後、「みずなぎ」は確認のため潜入した。

「野瀬さん、もうすぐ海底です。」

「了解。しかし、今日は透明度が随分悪いな。」

「ええ、前回まではこの辺にしてはかなり透明度が高かったんですがね。」

「おっと、マーカーが見えたぞ。」

「カメラ振ります。」

カメラに映し出されたのは、何もない海底だった。画面の中心には72時間前に設置した赤いマーカーのブイが映っていた。

「おい、津田、消えてるぞ。」

「ええ、消えてますね。」

「上に報告かな。」

「その方が良いでしょう。」

「『みこもと』、こちら『みずなぎ1』応答してくれ。」

「こちら『みこもと』、野瀬さん何かありましたか。」

「海底から消えてる。今、津田が画像送る。」

「了解、ああ、今画像来ました。ほんとだ。綺麗さっぱりですね。

紫外線ランプ点灯しますか？」

「ああ、点灯してる。発光が見えるかどうか、ライト落としてみる。」

「了解、ああ、発光も見えませんか。これは成功で良いですかね？」

「そう思う。もう少し範囲を広げて観察してみる。そっちでもモニターで見ていて欲しい。」

「了解。」

理研の実験班が発見した、このタンパク塊に紫外線を当てると、僅かに屈折率が変化し、可視光でも輪郭が判るようになるという現象を利用し、紫外線投光器と可視光を併用して透明度の高い、このタンパク塊をはっきり映像で見えるため、「みずなぎ」の外部装備ベイには紫外線投光器が設置されていた。また、タンパク塊は紫外線を浴びると、その起電構造からかなり強い発光をする。照明を落としたのはその発光の確認だった。

野瀬の操縦する「みずなぎ」はマーカーを中心に、矩形搜索の形で海底を走査していった。その結果、およそ100m四方の海底にタンパク塊が存在しない部分を発見したのだ。

その後、野瀬艇「みずなぎ1」は1海里ほど離れた海底に新たにマーカーを設置、別のプランクトンを散布して浮上した。そしてこの結果は、同じプランクトンを5海里離れた別の海域で散布した長崎艇「みずなぎ2」からも同様の報告がなされ、分解効果が確認された。

さらに72時間後、野瀬艇「みずなぎ1」を別の驚きが襲った。72時間前の効果の時間的变化を確認するために潜入した「みずなぎ1」はまず最初のマーカーに到達、そこでタンパク塊が存在しない範囲が拡大している事を発見した。72時間で170m四方程度まで拡大していた。しかし驚きは2番目のマーカーだった。

「おい、津田、なんか海水が濁ってないか？」

「ええ、透明度が落ちたって言うより、何かが浮遊してますね。肉眼でも見えそうですよ。」

「そうだな。ああ、見つけた、マーカーだ。」

「って、何ですかこれ？」

「海底に何か生えてるな。」

「海藻みたいですが・・・」

72時間前、「みずなぎ1」が散布したプランクトンは、褐藻と呼ばれる定着性海藻の幼体だった。タンパク分解酵素はこの幼体だけが持ち、定着すると酵素は消滅する。そのため培養プールに定着成

体を入れ、水温管理で胞子を出させ、それが幼体に変態したものを散布したのだ。

「これも上に絵を送りましょう。」

「ああ、そうしてくれ。」

「みこもと」管制室では「みずなぎ1」から送られた映像を見て、望月が興奮していた。

「ああ、やっぱり私の仮説は正しかったようです。この褐藻は水深とか日射量、水温などで定着するのでは無い、と考えていましたが、正しかったようです。」

「すると、この褐藻の定着はどうして起きるのよ、望月君」

「吉村さん、近大の試験水槽で観察した限りでは、海水中のアミノ酸量に定着が支配されているようなんです。ですからあまりこの海藻の繁殖は見られないんです。」

「つて事は、ある意味、このタンパクの天敵？」

「そうかも知れません。幼体を持つ酵素で分解されたタンパク周囲のアミノ酸量は実験では最適定着アミノ酸量のようなんです。」

「なんか凄く都合良く出来てる感じがするな。」

「自然の叡智だと思いますね。ひょっとして、このタンパクはもの凄く古いもののかも知れません。」

「つまり、過去にもこのタンパクの爆発的増殖は発生したと？」

「そうかも知れませんが。最初に効果が有った藍藻は種としてはおそらく地球最古でしょう。この褐藻も褐藻類としては構造が簡単で、相当に古い、おそらく古生代を起源としてると言われています。」

「つまり、このタンパクの暴走に対処する手段は大自然の中に用意されていた、と言うことか？」

「不思議なことですが、そうとでも考えないと説明が付きません。」この海藻によるタンパク塊の分解は、前回の藍藻を上回るものだった。たった72時間で300m四方に及ぶ範囲の海底に海藻が定着し、その範囲には海面までタンパク塊が消滅していた。

「さて、この海藻の効果は判った。問題はどの程度の水深までこの

海藻が活躍出来るのかだ。現在、タンパクの発生源は水深3000m付近。4200mを超える水深にはタンパク塊、巨大生物ともに発見されていない。この水深3000m付近、もしくはそれより深い場所でこの海藻が定着繁茂しなければ、根源を絶つ事は不可能だ。

「徐々に深度を下げ、実験するしか確かめる方法はないと思います。」

「時間は掛かるが、それしか方法が無ければ、やってみるしか無いだろう。」

「みこもと」は同じ海域の水深200m付近に移動し、同様の実験を繰り返した。結果は同じだった。さらに1000m、2000mの水深でも同じ結果が得られた。この結果は少なくとも、日本の沿岸域でのタンパク塊への対処は可能であることを示していた。これ以上の深さは日本海溝西側では僅かな地域しか無く、日本海溝を越える必要が有る。しかし、焦眉の急は最低限日本EEZ内に存在するタンパク塊の完全分解だった。「みこもと」はこの試験成果を持ち帰る事と、空になった培養プールの補充のため、一旦母港に戻る事になった。海中の映像などは、ネット経由ですでに送っていたが、現場海域で採取した試験藻類プランクトンの時間経過後サンプルなどは持ち帰るしか無かったからだ。このタンパクの天敵とも言えるプランクトンが2種も発見できた事は、望外と言って良い成果だった。母港の岸壁には関係者のみならず、内閣総理大臣や防衛大臣などまでが帰港を出迎えていた。僅か3週間ほどの航海でこれほどの成果を上げるとは誰も想像すらしていなかった事の現れと言えた。

「みこもと」帰航後、関係機関は大車輪でこの褐藻プランクトンの増産を画策した。しかし、元々着床条件がクリチカルであり、また幼体は胞子放出が無ければ発生しないため、必要量にまで増やす事はかなり難しいと思われた。ところが、ここで望月が画期的な増産法を提示した。

「褐藻幼体の増産ですが、現在、海流や潮流などの影響でタンパク

塊が蛸集している場所があると思います。ここを何らかの方法で仕切って、現在ある幼体を放流することで増産が可能だと思うのです。
が。

着床最適アミノ酸量はタンパク塊の分解で得られる。他の分解酵素を持たない微生物はタンパク塊そのものが分解してくれるため、微生物混入による生育不良も考えなくて良い。なおかつ、タンパク塊の蛸集を分解することが出来る。一石二鳥どころか何鳥にもなるアイディアだった。このアイディアは早速採用され、海域の仕切りは建築シートに重りを付ける事で可能な事が確かめられ、各地の特に半島部（海流や潮流を遮る形であるため、淀む海域が必ずできる。）で実施した結果、非常に大きな効果を上げるようになった。最終的には仕切りを開放して、着床海藻の分布を広める方が分解が早い事が判り、僅かなタンパク塊の蛸集部でも、仕切り幼体を放流、海藻が着床したら仕切りを開放という手法が沿岸部では採られ、数週間という驚異的なスピードで沿岸部の水深10m程度までのタンパク塊は消滅する事になった。

さらに、これより深い部分、特に水深60mを超える海域での散布には海上、航空自衛隊、海上保安庁、各県水産調査船、漁業調査船、監視船などが総動員され、水深2000mまでの海域で深度を規定して散布、放流を行った。民間企業が外形を定型化する事で沈降速度を一定化した容器を開発、特殊な紙に海水が浸透する時間で開放深度をかなり正確に調整でき、なおかつ容器自体は数日から数週間で海水自体に溶けてしまうため、使い捨てが可能という優れたもので、これによって、散布の手間が極端に軽くなり、幼体の培養槽をデッキに搭載するだけで、特別な装備無しで散布を可能にしたため、最終的には大型漁船まで加わり、日本全域で2万隻を超える船が参加するという、大がかりな行動になった。当然だが時間は短縮され、水産試験場などが持つ600m程度の耐圧を持つ曳航式の水中カメラで調査しても、タンパク塊が発見できなくなるまでに、大きな時間は掛からなかった。

海藻（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

高速型（前書き）

クリスマスも終わり、一時的に私の住む街も落ち着きを取り戻して来たようです。でも、大晦日にはまたまた大騒ぎ。街のこここで人形を燃やし、爆竹を鳴らして一年の厄払い。

すでに気の早い子供達は町中でバンバンやっています。

第45話です。

高速型

日本のこの対処を望見していた中国、韓国は火が付いたような性急さで、この対処法の詳細とノウハウを要求した。広報の失敗と無關心さが数万に及ぶ被害者を発生させていたのだから、当然の帰結だった。政府はまたもや無能だった。この二国に何らの条件を付けることなく情報とノウハウを提供したのだ。つい先日まで、やれ、原発事故の放射線の影響やら、日本人が密かに持ち込んだやら、9999%までが虚言の発言を、政府関係者までが繰り返していた国に、なんらの言質も公式表明もさせることなく、無条件で提供してしまっただ。韓国へなど、ノウハウを持つ船舶を無償で一時貸与までしていた。

さすがに中国という国は、ごり押しはしても、日本が何を提供したのかを理解する頭が政府首脳にはあった。政府が公式に感謝の意を表明し、以前の発言を全て詳細が判明しない事による無知が為さしめた事と言いつけるだけの知恵があったが、韓国は対処に目処が付いた頃、この手法は韓国人研究者が先に発見していた、と言いつけたのである。そして、日本は韓国人研究者によって救われたのだから、感謝と研究者への金銭的補償をせよとマスコミが煽りだした。日本のマスコミもこれに乗って、褐藻幼体の発見も、増殖法のアイディアも韓国人研究者の成果と書き立て、後先を考えず、研究者の個人名まで報道に乗せてしまった。

この研究者は、製薬会社の企業研究所でクロマトグラフィーなどによる成分分析の実務を補助していただけだったが、国を挙げてのタンパク対策に、この研究所も協力したため、タンパクや藻類プランクトンのクロマトグラフィー分析データに名前を連ねていた。そしてそれは公式報告書や論文に分析者として名前が掲載され、鵜の目鷹の目で韓国人名を探していた韓国報道機関がそれを見つけ、ストーリーをでっち上げたのが真相だった。

韓国マスコミも日本マスコミも、一つだけ完全に忘れていた事があった。今回の研究には、欧州不況で押し出された欧州の研究者が多数参加しており、また、ハワイ州の被害が激甚な事から、米国の国営研究所も深く関わっていたのだ。公式の報告書には本当の発見者、アイディア提供者である村木や望月の名前が頻繁に掲載され、その発見の経緯や詳細な事情などまで説明されていた。当然であるが、このような報道、マスコミの姿勢に本当の関係者からは轟々たる非難が巻き起こり、国家的危機を報道しないわけに行かないマスコミに対し、虚偽報道を訂正しない限り協力しない、とまで言わしめた。そして、日韓のマスコミが自縄自縛に陥っている間に、米国や欧州のマスコミは信用できない駐在員を見限り、特派員を派遣して事実を確認、特に欧州のマスコミは自国の有名研究者がこの件に関わっている事を見いだしてから、この韓国の姿勢を非難する論調を展開した。これは日韓では故意に紹介されなかったが、欧米の研究施設などに韓国人研究者が出向する場合、大変な障害となつて残る事になる。欧米社会では、有用な研究成果は重要な社会的ステータスであり、階級の明確な欧米社会では、人の一生を左右するものにもなるのだから、これをねつ造する事に対する忌避もまた酷く強い事を、二言目には国際化を口にする日韓マスコミ人は知らなかったのだ。

これは瞬く間に、ネットにも拡大し、アカデミックな内容を持つウェブサイトなどKRDメインを遮断する措置を取る処まで現れた。韓国政府はこの欧米の動きを見て、「植民地支配云々」「性奴隷云々」と喚きだしたが、時すでに遅く、韓国の欺瞞性を世界に知らしめてしまったのである。これは最終的に韓国の貿易にも影を落とし、3%近く貿易収支が悪化、薄々気づいて居た外国企業も韓国から逃げ出すはめになった。

そんなごたごたを尻目に、「みこもと」は再び出港した。目的地は小笠原東方1000海里の、潜水艦沈没地点だった。航海は順調だ

った。目的地付近に到達した「みこもと」は、音響探査を行いながら沈没点へ接近して行った。それが起こったのは沈没点まで1海里を切った時だった。

「吉村さん、何かがかなりな速度で上がって来ます。推定30ノット超。」

「本船に向かってくるのか？」

「はい、衝突コースにあります。」

「ブリッジ、こちら吉村、緊急加速願います。推定30ノット以上で海底から接近するものがあり。衝突コースです。」

それまで音響探査のため、7ノットを超えない速度で航行していた「みこもと」は観測室の吉村からの緊急要請を受け、加速を開始した。ディーゼル電気推進船である「みこもと」は、短時間なら電動機を過負荷状態にすることで、通常の3割増し以上の馬力を出すことができる。軍用タービン推進には劣るが、一般のディーゼル機関で走る船とは別次元の加速が可能だ。すでに何度か修羅場ともいえる状況をくぐり抜けて来た「みこもと」ブリッジ要員に躊躇は無かった。30秒程度の短時間で20ノットを超える速度まで加速した「みこもと」の船尾海面に飛び出してきたのは、全体が灰黒色の巨大生物だった。

「なんだとお！」

船尾のモニターを見て思わず吉村は叫んでいた。

「黒岩あ、他に接近するものは無いのか！？」

「速度が速すぎて上手く見えませんが、後二つあるようです。」

「ブリッジ、進路変更取り舵90度、船長、願います。」

ブリッジに船長は詰めていなかったが、船尾海面に飛び出したものを見ては、ブリッジ要員に否応は無かった。「みこもと」はその船体性能をフルに発揮して、針路を90度左へ変更した。速度はすでに25ノットに達していた。変針が終わった直後、「みこもと」右舷後部海面には、先ほどと同じ、全体が灰黒色に見える巨大生物が飛び出していた。

「吉村さん、何ですかありやあ！」

ブリッジに登った船長から驚いた声で連絡が入る。普段沈着冷静な彼とは思えないほど、声が裏返っていた。

「船長、見ての通りのものです。残念ながら詳細は不明です。」

「本船にぶつかろうとしているのですか？」

「そうとは思えません。すみませんが船長、もう一体いるんです。そろそろ右舷90度転進願います。」

「了解。」

その言葉の直後、船体が左に傾斜し、右舷への変針が始まった。先ほどと同様に今度は左舷後部海面に巨大生物が飛び出した。

「船長、取りあえず、この海域から距離を取りましょう。この速度をどのくらい維持可能ですか？」

「賛成です。現在過負荷運転していますので、この状態が続けられるのは1分ほどです。通常負荷最大速度ならば燃料が無くなるまで続けられますが。」

「取りあえず通常最大速度で30分ほど航行をお願いします。非常に難しいですが音響観測でヤツを監視します。」

「お願いします。転舵の場合は少し早めに連絡下さい。」

「みこもと」は、当面、この海域を脱出する事に全力を注ぐことになった。27ノットの速度で、30分ほど走り、攻撃を受けた海面からおおよそ20海里ほど離れた処で速度を落とした。

「どうだ黒岩、速いヤツは見えるか？」

「取りあえず、深度3400m、海底ですが、半径2海里以内には居ないようです。」

「取りあえず一安心かな？」

「いや、待って下さい。レンジ限界に何か入って来ました。エコーは小さいです。高速で泳ぐ魚に似てます。」

「針路は？」

「まだ割り出せません。ちょっと待って下さい。」

「取りあえず、高速退避の準備だけはしておこう。甲板作業総員船

内へ。突発高速機動の可能性有り。」

この指示が甲板員を救った。

「針路確定しました。本船です。」

「ブリッジ、吉村です。即時加速願います。本船に向かう高速移動体があります。」

「了解。」

「みこもと」は体を後ろに持つて行かれるような加速を開始した。しかし、間に合わなかった。相手が余りに速すぎたのだ。40ノットを超える速度で接近してきた高速移動体は、「みこもと」からおよそ半海里辺りに接近すると急速に加速、100ノットを超える速度で海面上に飛び出した。外形はイカに似た姿の、大きめのカツオ程度の大きさを持つこの物体は、空中に飛び出すと次々と「みこもと」に体当たりを行った。高張力鋼の外板を持つ「みこもと」に当たった物体は、当たると同時に潰れ、ゼリー状の塊になって舷側に附着しゆっくり流れ下って行く。飛翔中の姿を捉えたカメラ映像から、あまり鮮明では無かったが、巨大生物に似た色と構造が判明した。これも巨大生物の亜種なのだ。次々と海面から飛び出しては舷側に衝突する。そして徐々に海面から飛びだす距離と角度が変わり、ついに甲板に落下し始めた。その瞬間だった。ブリッジの放射線警報装置から大音響の汚染警報が鳴り響いた。当直の二等航海士はアラームを止めると同時に、汚染除去装置を稼働させた。デッキ上、舷側に張り付いたゼリー状物質は、高圧海水の散水にみるみる洗い流されて行く。それでも、攻撃は続き、船上に設置されている機械強度の低いものが壊され始めた。救命浮環やEPIRBなどの救命備品や救命ボートのカバー、作業用のゾディアック・ゴムボートと船外機などなど。

食用ゼリーよりも柔らかいものとは言え、時速180Kmという速度で4〜5Kgのものが衝突するのだ。強度を必要としない部品などは壊れて当たり前だった。

攻撃は唐突に止んだ。それまで無数に海面から飛び出していたもの

が、一瞬で静まりかえった。船上には高圧洗浄水の散水音だけが響いていた。

「2nd、放射線量はとうですか？」

「大分下がりましたが、まだ甲板作業は無理です。これから散水をコロイド状吸着剤入りの真水に切り替えます。」

「吉村さん、次の攻撃はありそうですね。」

「船長、音響観測ではその兆候は無さそうですが、油断は禁物ですよ。なにせスピードが速すぎる。」

「そうすると、現在速度をしばらくは維持する必要がありますね。」

「お願いします。最低でもこの海域から100海里程度は距離を取りたい。その後落ち着いて対策を考えましょう。」

「判りました。ただ、航海可能時間が数日単位で減りますけれど・・・」

「仕方が無いでしょう。何とか早急に成果を上げる努力をします。」

「ああ、それと攻撃前の総員船内の指示、ありがとうございました。お陰で甲板員が助かりました。」

「越権行為かも知れませんでした。安全の方が優先ですから。」

「ああ、その辺はお気になさらずに。しかし、何なんですかアレは。」

「例の巨大生物の変異したものだと思います。しかし、タンパクの塊がここまで意志を持った行動、固体間の協調も含めて、出来るというのは驚きです。今、船外モニターの画像分析をしていますので、もう少ししたらある程度の事は判ると思います。」

「あれも変異種なんですか。驚いたなあ。30年以上上海で生活しますが、あんなものは初めてですからねえ。」

「いえ、多分、世界の生物学者たちも初めて知るものだと思いますよ。しかしとんでもないものです。」

「そうですねえ・・・」

「船長、甲板放射線強度が既定値以下になりました。洗浄用真水残量は約40%です。」

「了解、2nd。ご苦勞様。引き続き舷側部の洗淨を繼續して下さい。」

「了解。」

「みこもと」はその後3時間ほど北東へ27ノットの高速で航行し、潜水艦沈没地点からおよそ120海里ほどの処で、速度を落とした。水深が6000mを超えるこの海域には、巨大生物の姿もまばらだった。30分ほど全速即時待機状態で音響観測を行った後、7ノットの音響観測速度で北東に航行を開始した。作業甲板では甲板員と作業員が総出で後始末をしていた。モニター線量は低下したとはいえ、部分的に高線量の処が有り、甲板員達は携帯線量計を使って高線量の部分をしらみつぶしに洗淨していた。

甲板に固縛されていた「みずなぎ」や「かいえん」、「ドリイ」なども部分的に汚染されており、さすがに深海作業艇であるゆえ、機械強度は十分にあるため、壊れたところは無かったが、微細な部分を汚染されており、洗淨が行われていた。しかし、甲板員と作業員だけが忙しく働いているわけでは無かった。同じ頃、研究員は今回の出来事への対策と今後の方針を検討していた。

「村木君、今回のこれをどう考えるかね？」

「吉村さん、ともかく、世界でこういう事象に出会った事が有るものは居ないと思いますので、手探りで行くしかありません。」

「それはその通りだな。で、生物学的見解はどうなるかね。」

「と言われましても、見たとおりでしかありません。ひとつだけ、今回の行動から判るのは、どこかに司令センター的なものがあるのでは無いか、というくらいです。」

「チャンさん、生態学的にはどうですか？」

「私も村木さんの意見に賛成です。特に小型の変異種による攻撃は非常に統制が取れていると感じます。司令センターと通信手段が存在すると考えます。」

「望月君からは何かあるか？」

「新しい変異種のスピードですが、通常の推進方法、つまり纖毛や

鰭などによる推進ですが、それでは不可能に思えます。何か別の推進方式では無いかと考えます。ただ、水中で水を押した反力以外の効果的推進方法はないと思いますので、繊維や鰭以外の方法で水を押していると考えの方が合理的です。」

「なるほど。問題を整理すると、非常に統制の取れた攻撃から、指令センターと連絡手段の存在、またこれまで観測されたことのない速度を持つ事から、何らかの通常とは異なる推進手段の存在、この二つが疑われると言うことだな。長野君何かあるか？」

「はい。もう一点、考えなければならぬことがあります。この生物が『みこもと』をどうやって探知したのか、という点です。これまでに判っている漏洩電流による探知は対策済みの『みこもと』には当てはまりません。前回探査で対策済みの『かいえん』は攻撃されていませんから。私は音響探知が出来る様になったのでは、と疑っているのですが。それ以外のシグネチャーは『みこもと』から出ていないと思いますので。」

「あのー、宜しいでしょうか？」

今回の航海には、海上自衛隊から3名が研修として乗り組んでいた。そのうちの一人、藤代3尉だった。専門は音響探知で、通常は潜水艦のソナー班長として任務に就いている。滝川の肝いりで近海のタシバク塊対策のために人員研修を行う目的で乗り組んでいた。人選の時、単に兵器運用に長けただけの人員では、今回のようなケースには対応できないと考えられたため、自然科学に造詣のある人員を選抜したところ、ほとんどが潜水艦のソナー員だった、という笑えない話があった。

「はい、藤代3尉何でしょう。」

「長野さんのおっしゃった探知なんですけど、『みこもと』は上部構造はアルミ合金や複合素材ですが船体は鋼鉄です。そして、多分ですがこれまで船体消磁はやってもらえないのでは無いかと思うのですが。」

「ああ、確かに消磁は一度もしていないですね。其れが何か？」

「消磁がされてないのであるなら、船体はかなり強く磁化されているはずです。今回乗船して巨大生物についてかなり詳しく教えていただきましたが、それが正しいなら、全長50mレベルの感知コイルを持ったMAD（磁気探知機。潜水艦搜索に使用する。）が構成できると思うんです。すでに電流探知は出来る様ですから、磁気であれば導線1本あれば電流に変換できますので、そちらの方が可能性が高いのではないかと考えたのですが・・・」

「ああ、それは良い点に気づいていただきました。その可能性はありますし、電流感知ができるなら、物理的可動部を必要としない磁気探知の方がこの生物には簡単でしょう。しかし、その可能性も考えなければいけないとなると、対策はかなり厄介ですね。」

「長野さん、海況次第ですが、簡易的な消磁をしたらいかがでしょう？」

「藤代3尉、そんなことが出来るんですか？」

「ええ、ちよつと昔の艦艇は、磁気機雷対策に舷外電路を使って消磁コイルを作っていたんです。今は基地の固定消磁で日常的に消磁しますが、長期間の航海では其れが出来ませんから、自分で消磁をしていたんです。」

「具体的にはどうすれば良いんですか？」

「船体外周にコイルを作れば良いんです。船が動きますと、地磁気の影響でコイルに微少な電流が流れます。海域の地磁気特性が判っているなら、かなり厳密に計算できます。船体が磁化していると、それとの差異が出ますから、それを打ち消すような電流を流せば、消磁できることになります。地磁気データは私が持っております。」

「実験する価値はありそうですね。コイルは・・・ああ、『金魚』のケーブル使えば良いか。1本3kmくらいはあるし。」

「船体外周を5、6回巻ける長さがあれば大丈夫と思いますが。」

「藤代3尉、長野、出来る事は何でもやってみよう。準備に掛かってくれ。」

「了解」

高速型（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

磁気（前書き）

明日から新年にかけてちょっと出かけます。家族サービスです。更新も執筆も出来なくなると思いますので、書き上がった分を更新しておきます。

次の更新は元旦以後になります。申し訳ありません。それでは、良いお年をお迎え下さい。

磁気

長野達は作業員と甲板員の手を借りて、「金魚」用のケーブルを船体に巻き付ける作業を開始した。双胴船形ではあっても、海洋調査の利便性のため後部甲板は一段低くなっている「みこもと」の船体外周にケーブルを巻き付けるのはそれなりに手間が掛かる仕事だった。それでもこういう仕事に慣れた甲板員、作業員たちは工夫して仕事を進め、3時間ほどで長いケーブルの巻き付けが終わった。

「金魚」の電源ケーブルのうちの1本の両端を微小電流計に繋ぐと、船の揺れに合わせて変化する電流が読み取れた。船を5ノットで東西に走らせると、波の揺れでの変化はあるが、概ね一定値の微小電流が流れた。藤代3尉は手持ちの地磁気データーと巻き付けたケーブルのコイルのインダクタンスから、電流差を計算し、それを打ち消すような電流の値を算出した。

長野はケーブルの直流抵抗から、藤代3尉の計算した電流を流せるよう調整した直流電源を使い、コイルの両端に其れを繋いで、船体の磁化を打ち消す極性の磁気を発生させた。測定と電流付与を3回ほど繰り返すと、波の揺れによる誤差はあるが、概ね地磁気による電流値と等しい値が得られるようになった。磁化作用はヒステリシスを持つため、僅かな反方向磁化を繰り返し、ゼロに収斂するように作業を繰り返した結果、船体が水平を保っている間の値が3桁程度まで計算と一致したことで、消磁は完了した。

「これで船体の垂直磁化分は消磁されたと思います。ただし水平成分はコイルを若干傾けていますのでその誤差分は消磁できていますが、残留分が相当あるはずです。巨大生物の構造から水平磁化分を探知する感度は垂直分と比べて落ちると思いますので、おそらく大丈夫と推測はしますが、注意は怠りなくお願いします。」

「藤代3尉、しかし、磁化が残っているのなら感知はするのでは？」
「通常、磁気による感知は、地磁気の乱れを感知します。水平方向

の磁化による磁力線が船首・船尾方向にあるとすると、それによる磁場の乱れは、船体の磁気中心平面で発生します。これは海面もしくは海面上に発生します。しかし垂直方向の磁化による乱れは、地球の磁気軸に鉛直に発生するため、海面から海底に向かって地磁気が乱れます。垂直磁化が水平磁化より感知しやすい理由です。」

「なるほど。水平磁化はある程度の深度に達すると、乱れが小さくなって感知できなくなる、という事ですか。」

「ええ、そういう事になります。」

「後はこの生物が磁気を感じている事を祈るだけです。」

消磁を済ませた「みこもと」は、迂回針路を取って、潜水艦沈没地点への航海を開始した。接近は沈没地点真南からだった。地磁気の乱れを最小限に抑えるための針路であった。「みこもと」船上では、タンパク分解に効果が有った、褐藻類の幼体を詰めた可変深度容器が無数に用意され、船務課が用意した原始的な自動落水器に載せられていた。小さな直流モーターで太い針金を加工したゲートに繋がるワイヤーを巻き取るだけの仕掛けだったが、原始的な分、動作は確実だった。仮に同じような攻撃が有ったとしても、船内から容器を落とせる仕掛けだった。これ以外にも、除染装置の散水タンクに吸着剤の代わりに藍藻類プランクトンを混入出来る様加工したり、もし攻撃を受けた場合には、舷側から高压放水が可能のようにノズルを固定したりという作業をした上で慎重に接近して行った。いまだ「みこもと」唯一の海中放射シグネチャーである音響を感知している疑いは払拭されていないのだ。しかし、結果は良い方に転んだ。一切の接近を受けずに潜水艦沈没地点まで到達できたのだ。しかしこれからが問題だった。新たな変異種による攻撃は、「みこもと」が搭載する探査機には相当な脅威だった。いくらゼリー並みの硬さしか無いとはいえ、時速70Kmを超える速度で、100トン近く of ゼリーを投げつけられれば、戦車ですら無事には済むまい。高速型変異種では重さは数Kgだが時速は180Kmを超える。深海の高压に耐える耐圧船殻は物理的には大丈夫かも知れないが、中には

人が乗っていたり、ショックを嫌う精密な回路や機器が搭載されたりしているのだ。放射線問題を抜きにしても大問題だった。

吉村達は検討の結果、まず、樹脂製耐圧ケースに収めた水中カメラを絶縁物ケーブルを使ってある程度の水深に降ろして様子を見る方法を決定した。同時に褐藻類幼体を同時に散布する耐圧容器も同じケーブルで降ろされる事になった。最初の計画水深は250m。これと同時に船上で作成した電磁石を耐圧ケースに入れ、電池で駆動して磁場の乱れを作り出す実験も行われる事になった。カメラから20mほど離して沈め、200m程度の水深から電磁石に電流を流すタイマーも取り付けられた。うまく行けばこの電磁石へのアタックをカメラに収められる可能性があった。幼体を放出した後の耐圧容器は放出後、一定時間で再度蓋が閉まり、不完全ではあるが、同深度の海水を船上に持ち帰る。準備が進められカメラと電磁石が海中に投入された。電磁石は使い捨てで回収はしない。

「吉村さん、水深250です。電磁石は視野に入っています。」

「おう、もう絵は出てるな。」

「メインスクリーンに4方向4分割して出しています。」

「まだ例の生物は視野に入っていないな。」

「音響探査によれば、高速型が近づいてるようです。あと数十秒で到達します。大型はいまだ来ていないようです。」

「うーん、『みこもと』に引きずられて中心から離れたのかな？高速型も新型も数は少ない？」

「とういうことじゃないですかね。」

「おお、ところで長野、褐藻幼体はもう放出したのか？」

「多分、今出ている処です。カメラが付いているんで、放出を促進する上下動をさせられないんで、ある程度時間が掛かりますね。あ、3番カメラの視野に入ってきましたよ。濁りみたいなのが幼体です。」

「おお、確かに。放出完了までの時間はシミュレートしてあったよな。」

「ええ、15分＋／－2分くらいで放出完了のはずです。」

「って事はそれまでに高速型は到着するって事か。」

「ええ、来たみたいですよ。電磁石が何かに当たって回転を始めます。」

「さすが、速くてはつきり見えないな。」

「今、コマ数を変えました。秒96コマです。ただし画面が暗くなります。」

「うわっ、カメラにも当たったんじゃないか？」

「そうみたいですね。凄いアタックですね。でもこれで幼体の放出が速くなります。」

「あ、電磁石が死んだ。」

「水が入ったみたいですね。プラスチックとは言え、1000m耐圧試験に合格した容器が15秒で破壊ですか・・・」

「恐ろしいな。」

「あ、幼体が出きったようですね。容器蓋が閉まります。カメラ回収に入ります。」

電磁石は電池が短絡したことで死んだが、その鉄芯は残留磁界がある。そのため、高速型はなおも電磁石容器に執拗に攻撃を繰り返していた。出きった幼体のもたらす効果はしばらく時間を置かないと判らない。その間を利用してカメラの回収に入った。

回収されたカメラは電磁石を攻撃する高速型が擦過したことで樹脂製の耐圧容器の一部が削り取られたようになっていた。ゼリー並み強度とはいえ、100ノットを超える速度がなせる業だった。同時に回収された幼体散布容器も同様な状態だった。これで蓋が閉まったのは幸運と言えた。

幼体散布容器で回収された高速型が活動した付近の海水はすぐに分析に回された。分析のために蓋を開けた研究員は思わず鼻を押さえた。海水からは強い塩素臭が立ち上っていた。また、分析室内の放射線量が跳ね上がり、放射線防護設備から運搬容器を取り寄せ、今後の分析は放射線防護設備内で行うよう指示された。分析室は汚染

除去の専門員により徹底的に汚染除去が行われ、数時間後には放射線レベルが安全範囲にまで低下したが、今後の分析、研究は全て放射線防護設備で行われたため、航海中に使われることは無かった。放射線防護施設での分析では、ほとんど高粘度海水に匹敵するタンパク分子の存在と、海水に溶け込んだ高濃度の塩素が検出された。変異型巨大生物が常温核融合を行うための海水電気分解を行って居る事は、すでに研究で判明していたため、その過程によって発生したものと思われたが、核融合と電気分解を行う部位が高速型では小さいため、想定される単位時間当たりの電気分解量と比較した場合、量的な不自然さが残った。この問題は撮影したビデオを解析する事で判明する。撮影されたビデオを解析したところ、この高速型の体は2重構造になっており、イカに似た体型の触腕部に当たる部分から高速の水流が放出されていることが判明した。ビデオ解析の結果、水流の速度は120ノットにも達していることが判った。潜水艇の専門家である吉村達はこれが何であるかすぐに気づいた。この生物は電磁推進を行っているのだ。電磁推進とは発生させた磁界の中で海水に電流を流すと、フレミングの法則により海水が加速される事を利用した推進方である。過剰な塩素の発生はこれを裏付けるものだった。

しかし、それでも100ノットを超える速度を獲得するには不足だった。吉村達はこれに頭を悩ませていたが、これもまたビデオ解析で判明した。高速型は最高速状態では、その航跡に多量の非変異型タンパクを残していた。紫外線投光器による屈折率変化を分析する事でその航跡がはっきり見えたのだ。当初このタンパクは高速故に剥離したものと思われていたが、この獲得速度の問題により、その理由が判明した。この生物は電磁推進をフルに働かせても、最大40ノット程度の速度しか出せない計算結果だったが、抵抗の増加とともにタンパク層を剥離させることで前進抵抗をほぼゼロ近くにしていたのだ。これは常に行っている訳ではなく、高速発揮時にのみ電気刺激で非変異型の受容器接続を順次切り離すことで、表面のみ

のタンパク層を分離し、抵抗を減少させていた。これまでの音響観測で40ノット程度の速度から、いきなり100ノット超への急加速が見られたのだが、その理由が明確になった。

磁気（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

本年中はつたない小説とも呼べないようなものをお読みいただきまして感謝に堪えません。新年からも続けてまいります故、今後とも宜しくお願い致します。

南米より、皆様が良いお年をお迎えになりますよう、お祈り申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6428v/>

深海からの侵略

2011年12月29日22時46分発行